平成 25 年度

地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業

「知床半島ウトロ海域の地域協働による ケイマフリ保護の取り組み」

報告書

平成 26 年 3 月

発注者：環境省北海道地方環境事務所

受注者：知床ウトロ海域環境保全協議会

目次

1　業務概要 5
1.1　事業の目的 5
1.2　モデル実証事業の内容 5
1.3　事業実施期間 7
1.4　成果物 7
2　知床ウトロ海域保全協議会について 8
2.1　協議会の設立経緯 8
2.2　協議会の目的・活動趣旨 11
2.3　協議会規約 12
2.1　組織の構成 13
3　モデル実証事業の実施結果（平成 25 年度の活動報告） 14
3.1　協働取組のための協議の実施 14
3.1.1　会議等の開催状況 14
3.2　協働取組に係る関係者の役割および具体的実施方法の検討 47
3.3　ケイマフリの保護に向けた取組の実施 50
3.3.1　海鳥基礎調査の実施及び情報発信 50
3.3.2　ケイマフリ営巣地の保護活動　～デコイの設置について 51
3.4　普及啓発事業の実施 53
3.4.1　「海鳥 Week2013」開催概要 53
3.4.2　開催準備の状況 57
3.4.3　イベント企画の実施状況 59
3.4.4　海鳥 Week アンケートの実施 63
3.4.5　アンケート結果の分析 66
3.5　「知床スタイル」の仕組みの確立に向けた検討 68
3.5.1　「知床スタイル」を構成する 6 つのキーワード 69
3.5.2　「知床スタイル」を構成する 6 つのキーワード・・・例えばこんなこと 72
3.5.3　「知床スタイル」による環境保全　～人と自然の良い関係 75
3.5.4　皆が豊かになる（得をする）Win－Win－Win の関係 76
3.5.5　協働取り組み自体にも様々なメリットが期待できる。 77
4　協働取組のプロセス等の分析 78
4.1　個別事業における協働取組のプロセス等の分析（図 4-1） 78
4.2　事業全般における協働取組のプロセス等の分析 80
4.3　協働取組の促進要因と阻害要因 82
5　その他 84
5.1　本年度の協働取組カレンダーの作成及び３カ年の中期計画の策定 84
5.2　報告会への出席 102

5.2.1　協働のかたち研究会（採択団体合同連絡会） 102
5.2.2　協働ギャザリング 2014 －環境×協働＝どんな未来？－ 106

1　業務概要

1.1　事業の目的

「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」（以下、「法」という。）に基づく協働取組を促進するためには、協定の締結や具体的取組等について、先導的な事例を形成し、協働取組の技術情報を普及・共有することが重要である。

本事業は、民間団体、企業、自治体等の異なる主体による協働取組を実証するとともに、北海道環境パートナーシップオフィス（EPO 北海道）が設置する「地方支援事務局」の助言を受けながら、協働取組のプロセス及び技術情報等を明らかにして、協働取組を行おうとする者の参考資料として共有することを目的とする。

1.2　モデル実証事業の内容

本モデル実証事業は、知床半島ウトロ周辺に生息するケイマフリの保護に向けた取り組みを、地域の関係者（行政、専門家、漁業者、観光船業者、宿泊関連業者等）が適切な役割分担の下、協働して行うことを通じ、知床世界自然遺産地域としてふさわしい、持続的な海域の利用と野生動物等の保護を協働して行う仕組み（仮称、「知床スタイル」）の確立を目指すものである。

(1)　協働取組のための協議の実施

本事業の実施に当たっては、事業の円滑かつ継続的な実施を図るため、協議の場を設けて、本事業の目的を関係者間で共有するとともに、(2)～(4)の協働取組に係る関係者の役割及び具体的実施方法の検討等を行うものとする。

協議の場は、３回程度設けるものとする。

(2)　ケイマフリの保護に向けた取組の実施

地域の関係者の役割を踏まえ、次に掲げる取組を中心に必要なものを協働して行うこととする。

また、これらの取組を通じて得られた効果、課題を把握し、それらの整理を行った上、情報を発信するとともに、地域の関係者で共有し活用するものとする。

ア．　調査

・　専門家による海鳥基礎調査
　（ケイマフリ生息状況モニタリング調査、ウトロ海域の海鳥海上センサス、知床半島の海鳥繁殖状況調査　等）

・　観光船による海鳥モニタリング

イ．　保護活動

・　ケイマフリデコイの活用

（専門家、漁業者によるデコイの設置・撤去、専門家によるデコイの効果影響調査等）

・　ケイマフリの繁殖に配慮した観光船の運航

(3)　普及啓発事業の実施

ア．　出前講座

観光船、宿泊施設等において、地域事業者、住民、観光客を対象として、ケイマフリ等の海鳥の保護対策や「知床スタイル」の仕組みの普及啓発を地域の関係者が協働して行う。

イ．　啓発イベントの開催

地域の関係者が協働して、ケイマフリ等の海鳥の保護を推進する啓発イベントを開催する。

(4)　「知床スタイル」の仕組みの確立に向けた検討

請負人は、アドバイザー等を加え、(2)のケイマフリの保護に向けた取組の実施及び(3)の普及啓発事業の協働取組の結果を踏まえて、課題や目標と結果のかい離の分析を行い、「知床スタイル」の仕組みの確立に向けた検討を行うものとする。

(5)　協働取組のプロセス等の分析

請負人は、地方支援事務局（北海道環境パートナーシップオフィス）から本事業実施に係る助言、指導を受けつつ、連携して、本事業に係る協働取組のプロセスを分析し、協働取組を推進していくうえでの技術的情報を明らかにする。

地方支援事務局とは連絡を密にし、定期的に状況の報告を行うとともに、地方支援事務局からヒアリング等の要請があった場合は対応するものとする。

(6)　その他

ア．　本年度の協働取組カレンダーの作成及び３カ年の中期計画の策定

契約締結後、速やかに、本年度の協働取組に係る協働者、実施時期、具体的内容等を記した協働取組カレンダー（協働取組計画）、及び自主的に行う２年目以降を含めた３カ年の中期計画を策定するものとする。

なお、中期計画は、(4)及び(5)の分析結果を踏まえ、本年度の事業の終了時に見直しを行い、成果物に含めて提出するものとする。

また、本事業終了後、中期計画を用いて、自立的に協働取組の推進を図るよう努めるものとする。

イ．　報告会への出席

報告会（平成 26 年２月開催予定：於東京）に、本事業の責任者と他の組織担当者１名以上が出席し、事業成果の報告を行うものとする。

1.3　事業実施期間

契約締結日から平成 26 年 3 月 21 日（金）まで

1.4　成果物

1.2 の(5)を主体とした報告書を次のとおり作成の上、北海道地方環境事務所に提出する。

- 報告書　10 部（Ａ４版 100 頁程度）
- 報告書の電子データを収納した電子媒体（DVD-R）２式
- 報告書及びその電子データの仕様及び記載事項は、別添によること。
- 提出場所　北海道地方環境事務所　環境対策課

2　知床ウトロ海域保全協議会について

2.1　協議会の設立経緯

北海道知床半島に位置する知床国立公園地域は、2005 年 7 月にユネスコ世界自然遺産に登録され、豊かな自然環境に恵まれた地域として多くの観光利用者に親しまれている。ヒグマ・シマフクロウに代表される知床の野生動物は、知床半島の豊かな自然生態系を示すものであるが、知床半島の自然生態系は海と陸との繋がりという点も見逃すことが出来ない。知床の海は、秋には多くのサケ・カラフトマスが押し寄せる。山々から流れる河川の清冽な流れは、彼らの大切な産卵場所として利用される事は勿論のこと、シマフクロウの重要な餌資源となるオショロコマや沿岸域の海洋動植物を育んでいる。また冬季に押し寄せる流氷も沿岸域への多くの滋養をもたらし、豊かな漁場形成としても重要な存在であることが知られている。

また地域に暮らす人々には、豊かさを持続するためには自然との共存が必要であるという認識が根付き、定着していることによって、現在まで知床半島の自然が守られてきたという点も見逃してはならない。

しかしながら、豊かな自然と人々の利用のバランスを維持する事は簡単な事ではない。人々（住民、産業利用者、観光利用者）と自然（野生動物・自然環境）との関わり方については、常に何らかの課題に面しているという点も、事実として明らかにしておかなくてはならない。

知床半島ウトロ周辺の海域では、現在では希少な海鳥となってしまったケイマフリ（環境省レッドリスト 2012：絶滅危惧Ⅱ類（Vu））生息地と、観光船との軋轢がこれまでに指摘されてきた。これを受けて、平成 22 年度～平成 24 年度には「知床国立公園ウトロ海域における海鳥の保護と持続可能な海域利用検討業務」（環境省釧路地方自然環境事務所）の取り組みにより、「適正利用・エコツーリズム検討会議　ウトロ海域部会」として部会が組織され、行政・有識者・海域利用者（漁業者、自然ガイド、観光船事業者）、そのほか宿泊事業者らも加え、知床半島ウトロ海域におけるケイマフリをはじめとする海洋生物の保護、海域自然環境の保全と適正利用を検討する場が提供された。

検討会の（平成 22 年 7 月）

検討会（平成 23 年 5 月）

この 3 年間の取り組みの中では、規制に頼らないケイマフリの保護と保全の形を目指し、検討会を重ね、海域に関わる立場の違う利害関係者らの距離を縮め、専門家によるモニタリング調査、漁業関係者（ウトロ漁業協同組合）、観光船事業者（大型観光船「おーろら号」、知床小型観光船協議会）の協力関係の構築が徐々に進んだ。

ケイマフリの保全と保護に向けた取り組みとしては、ウトロ周辺で繁殖するケイマフリの専門家による生息状況調査やケイマフリ繁殖地復元へ向けてデコイの試験設置、観光船事業者やガイド事業者、ホテル等の宿泊事業者を対象とした「海鳥出前講座」を企画開催し、ケイマフリの希少性や生態をはじめ、その他の海鳥についての解説など、関係者の認知度と関心度の向上を狙った。そのほかケイマフリの観光利用者への紹介（広報・啓蒙活動）の取り組みとして、利用者動向調査（アンケート調査）の実施、PR 用デコイの展示なども行われている。

民宿でのデコイ展示

観光船「おーろら号」への海鳥出前講座開催

デコイ設置（2011 年 5 月）

デコイ設置（2012 年 5 月）

民宿でのデコイ展示

小型観光船からのケイマフリデコイ PR

平成 25 年度からは、このウトロ海域部会を母体とし「知床ウトロ海域環境保全協議会」として有志らによって事務局が組織され、ウトロ海域部会の活動体制を引き継ぐ形で新たなスタートを切ることとなった。「知床ウトロ海域環境保全協議会」は平成 25 年 6 月に開催された平成 25 年度第 1 回協議会により設立が承認され、これまでの行政主導の取り組みから地域主導の取り組みとして、大きな一歩を踏み出す事となった。

協議会の運営体制は、環境省ウトロ自然保護官事務所、知床海鳥研究会、知床小型観光船協議会、ユニオンデーターシステム株式会社から、事務局メンバーが構成され、協議会構成員は、ウトロ海域部会の所属会員がそのまま構成員となることとなった。また平成 22 年度から 3 年間にわたり助言、指導を頂いていた専門委員の有識者の方々にもオブザーバーとして引き続き協議会にご協力頂くこととなった。

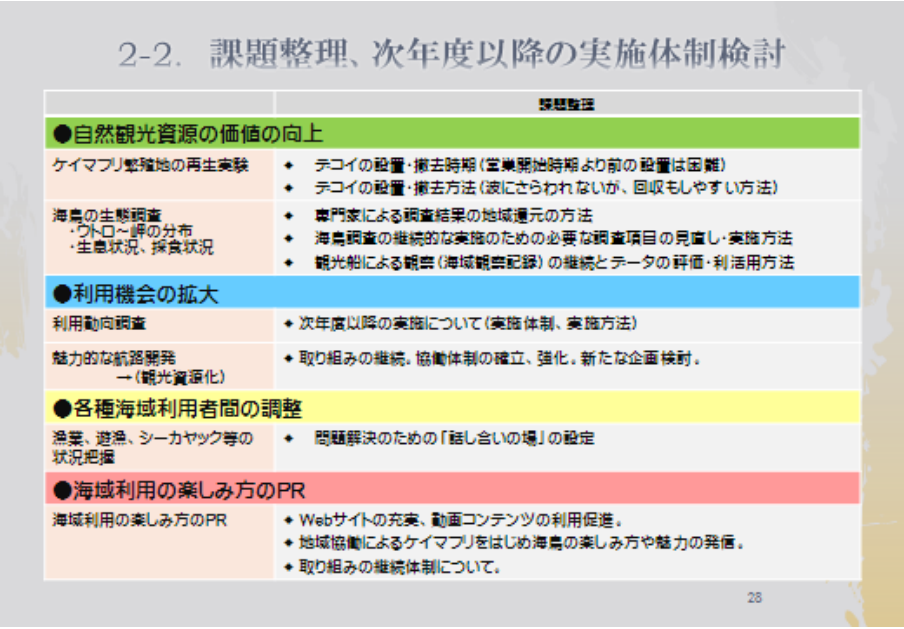
平成 25 年度第 1 回協議会（H25.6.14）
「知床ウトロ海域環境保全協議会」の設立が承認される。

2.2　協議会の目的・活動趣旨

知床半島ウトロ周辺に生息するケイマフリの保護をテーマに「規制に頼らない保護の仕組み」の実現を目指し、また利害関係にもなりうる様々な立場の関係者（行政、専門家、漁業者、観光船、観光利用客）の「全ての関係者にメリットを見出す Win-Win-Win の関係づくり」を前提目標とし、行政と民間の連携、異業種間の協力など、「ケイマフリの保護」をシンボルとして多様な立場の方々が問題を共有し具体的な活動を実施する。

将来的にはケイマフリ以外の海洋生物の保護や、海域利用者間の様々な摩擦の軽減・予防のための調整の場としての機能も目指すものとし、専門家や有識者からの調査結果や助言など科学的な知見も得ながら、知床世界自然遺産地域（知床国立公園）として相応しい、持続的な海域の利用と野生動物の保護を同時に目指して行こうとする取り組みである。

平成 23 年度
第 1 回部会資料



2-2.　課題整理、次年度以降の実施体制検討

	課題整理
●自然観光資源の価値の向上	
ケイマフリ繁殖地の再生実験	◆ テコイの設置・撤去時期（営巣開始時期より前の設置は困難） ◆ テコイの設置・撤去方法（波にさらわれないが、回収もしやすい方法）
海鳥の生態調査 ・ウトロ～岬の分布 ・生息状況、採食状況	◆ 専門家による調査結果の地域還元の方法 ◆ 海鳥調査の継続的な実施のための必要な調査項目の見直し・実施方法 ◆ 観光船による観察（海域観察記録）の継続とデータの評価・利活用方法
●利用機会の拡大	
利用動向調査	◆ 次年度以降の実施について（実施体制、実施方法）
魅力的な航路開発 →（観光資源化）	◆ 取り組みの継続。協働体制の確立、強化。新たな企画検討。
●各種海域利用者間の調整	
漁業、遊漁、シーカヤック等の状況把握	◆ 問題解決のための「話し合いの場」の設定
●海域利用の楽しみ方のPR	
海域利用の楽しみ方のPR	◆ Webサイトの充実、動画コンテンツの利用促進。 ◆ 地域協働によるケイマフリをはじめ海鳥の楽しみ方や魅力の発信。 ◆ 取り組みの継続体制について。

28

平成 24 年度
第 2 回部会資料

2.3　協議会規約

知床ウトロ海域環境保全協議会　規約

（名称）
第１条　本会は、「知床ウトロ海域環境保全協議会」（以下「協議会」という）とする。
（所在地）
第２条　本会は、北海道斜里郡斜里町ウトロ西１８６－１０に置く。
（目的）
第３条　知床世界自然遺産地域において、絶滅危惧種であるケイマフリをはじめとする海鳥等の海域の野生動物及びその生息地の保護と、海域で行われる様々な産業活動の両立を図ることを目的とする。
（事業）
第４条　協議会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。
(1) ケイマフリデコイを活用した航路設定
(2) 観光船からの海鳥等の観察
(3) ケイマフリＰＲ活動
(4) ケイマフリ調査活動
(5) その他目的達成に必要な活動
（構成）
第５条　協議会は、関係官公庁及び関係事業団体等をもって構成する。
（役員）
第６条　協議会に次の役員をおく。
(1)会長１名
(2)副会長２名
(3)監査２名
2　会長、副会長及び監査は協議会で互選する。
3　会計は事務局が担当する。
4　役員の任期は２年とし、再任を妨げない。
（職務）
第７条　会長は協議会を代表し、会務を統括する。
2　副会長は、会長を補佐し、会長に事数ある場合はその職務を代行する。
3　監査は、協議会の経理を監査する。
4　会計は、協議会の経理を処理する。
（会議）
第８条　会議は必要に応じて会長が招集する。
（運営）
第９条　協議会の運営に必要な経費は、次の収入で賄う。
(1)分担金･(2)協力金･(3)寄付金･(4)その他
（事務局）
第 10 条　協議会の事務局は、知床海鳥研究会、知床小型観光船協議会、道東観光開発株式会社、ユニオンデーターシステム（株）、環境省ウトロ自然保護官事務所の五者とし、連絡先は環境省ウトロ自然保護官事務所とする。

（事業年度）
第 11 条　協議会の事業年度は、4 月 1 日から、翌年 3 月 31 日までとする。

附則
1　この規約は、平成 25 年 6 月 14 日から施行する。

2.1　組織の構成

【協議会構成機関・団体・専門家】

敷田　麻実（北海道大学観光学高等研究センター）
中川　元　（知床博物館（元館長））
福田　佳弘（知床海鳥研究会）
知床小型観光船協議会
道東観光開発株式会社
ウトロ漁業協同組合
知床斜里町観光協会
知床温泉旅館協同組合　地域活性化委員会
知床民宿協会
知床ガイド協議会
知床アウトドアガイドセンター
ユニオンデーターシステム（株）
斜里町役場　　総務部環境課
産業部水産林務課
産業部商工観光課
オホーツク総合振興局　　保健環境部環境生活課
国土交通省北海道運輸局　北見運輸支局
環境省ウトロ自然保護官事務所

【オブザーバー】

網走海上保安署

【アドバイザー】

小城　春雄　北海道大学（名誉教授）
桜井　泰憲　北海道大学大学院水産科学研究院
寺崎　竜雄　（財）日本交通公社 観光調査部

3　モデル実証事業の実施結果（平成 25 年度の活動報告）

本モデル実証事業として行われた、知床ウトロ海域保全協議会による平成 26 年度の活動内容および活動成果について以下に示す。

3.1　協働取組のための協議の実施

知床ウトロ海域環境保全協議会（以下、協議会）では、今年度 2 回の協議会（全体会議）を開催した。当初の計画では第 3 回協議会を平成 26 年 2 月～3 月に開催予定であったが関係者の日程調整が不調となり、平成 26 年 1 月の事務局会議の中で今年度の総括、および次年度の活動内容について協議されている。今年度の会議は 2 回の協議会と 4 回の事務局会議の計 6 回が開催された。以下に協議会（全体会議）および事務局打合せの実施状況および議事概要を示す。

3.1.1　会議等の開催状況

表 3-1　等の開催状況

会議名称	開催日/開催場所	会議内容	参加者
第 1 回協議会	H25.6.14 世界遺産センター	協議会の設立および今年度活動実施計画と予算計画についての承認	協議会会員 17 名
第 1 回 事務局会議	H25.7.3 世界遺産センター	海鳥 Week 開催に向けた企画会議、海鳥 Week のイベント概要、日程等の検討および役割分担の調整。	協議会事務局を中心に協議会会員 13 名
第 2 回協議会	H25.9.9 世界遺産センター	海鳥 Week 開催結果のレビュー、今年度実施スケジュールの確認	協議会会員 18 名
第 2 回 事務局会議	H25.10.30 世界遺産センター	今年度の予算執行状況および立て替え状況の確認。デコイの設置に関する意見交換。「知床スタイル」明文化の進め方協議。来年度助成金応募についての検討。	協議会事務局を中心に協議会会員 10 名
第 3 回 事務局会議	H25.12.4 世界遺産センター	「海のガイドブック」作成検討（構成等）打合せ。知床スタイル（案）について意見交換。	協議会事務局を中心に協議会会員 7 名
第 4 回 事務局会議	H26.1.27 道の駅斜里会議室	今年度活動の振り返りおよび次年度の協議会活動方針の概要検討。	協議会事務局を中心に協議会会員 6 名

(1)　第１回協議会

会議名称	第１回協議会
日　時	平成 25 年 6 月 14(金) 13:30～15：00
場　所	知床世界遺産センター　レクチャールーム
出席者	斜里町 知床温泉旅館協同組合　地域活性化委員会　桑島委員長 知床斜里町観光協会 知床小型観光船協議会　菅原会長、事務局　神尾 知床民宿協会　梅沢会長 知床ガイド協議会　山本会長 知床アウトドアガイドセンター　関口 知床海鳥研究会　福田 ユニオンデーターシステム(株)　栗林 環境省北海道地方環境事務所　寺井 環境省ウトロ自然保護官事務所　松永（進行)、山岸、高橋 ＥＰＯ北海道　溝渕、久保田

議事概要
1.　協議会の設立について
・　（松永）皆さまお忙しい中、お集まりいただき誠にありがとうございます。昨年度までの「ウトロ海域部会」ですが、ご存知のとおり今年度からは環境省の事業で続けて行く事が出来なくなり、どのような形で継続していくか課題となっておりましたが、この度、地域の取り組みとして昨年度のまでの「ウトロ海域部会」の後を継ぐ協議会の位置付けで地域主体の取り組みをスタートする事となりました。 今年度の取り組みをスタートさせるために、福田、環境省野川（前任)、環境省松永（新任)、小型船協議会　神尾、道東観光開発　大木、ユニオンデーターシステム　栗林の 6 名が協力して、会議開催に漕ぎ着けました。 勝手に一部の人間が話を進めたと捉える方もいらっしゃるかもしれませんが、後で出て来る EPO 事業への応募申請がきっかけとなって、協議会の体制プランや今年度の取り組み実施プランを検討することとなり、それがベースとなって今回の協議会開催に繋がっておりますので、どうかご理解ください。
・　（松永）今回の会議は、今考えている今後の協議会の”案”であって、是非皆さんに御理解頂きたいという会議です。もしこの協議会に賛同できない、関わることは難しいと思われる方がいらっしゃいましたら、遠慮なく仰っていただければと思います。結果的に賛同者が少なければ、自動的に協議会の立ち上げは断念せざるを得ませんが、是非賛同して頂けるものと信じております。
・　（松永）あくまでも地域協働の取り組みです。メリットを享受するのは皆さんを含めた地域の方々、そして知床に来る観光客。そしてケイマフリとする海域の自然環境です。
・　（松永）設立趣旨は「ケイマフリをシンボルとして、様々な人が主体的に関わり、それぞれが win-win-win の関係となる仕組みの確立とそれを通したウトロの海域環境の保全を目指す」とい

うことで、ウトロ海域部会の時と基本的に同じです。また、これまで触れずさわらずが希少野生動物を、「見て守る」というスタイルを「知床スタイル」と定義し、このスタイルを確立し、対外的に大きく発信していくこともこの協議会の共通理念とさせていただきたいと思います。

まず、この協議会の設立することへの皆さんの承認は頂けますでしょうか？

【決定事項】　一同拍手にて合意。協議会の設立が承認される。

2. 「地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業」採択について

(1) EPO 事業公募および採択候補となった経緯

・　（栗林）昨年まで皆様に大変お世話になった事もあり、今年度もボランティアという形で協議会に関わらせて頂く事になりました。どうぞよろしくお願い致します。今年度の協議会ですが、環境省の「地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業」という公募事業があり、ウトロ海域部会の座長でもありました敷田先生から、この事業への応募の話を栗林に紹介してくれました。敷田先生も、今年度以降の取り組みの継続を大変心配してくれていました。この紹介を受けて、今年転勤してしまいましたが、環境省の野川さん、ユニオンの栗林、福田、神尾さんが中心となって、応募申請書を作成しました。協議会の体制や実施計画、予算計画など、かなり詳細に示す必要があったので大変苦労しました。勿論内容は構想案ということです。4 月末になんとか提出しまして、先日 5 月 27 日に採択候補となったとの嬉しい連絡が届きました。このような経緯があり、今年度はこの事業の採択団体として取り組みを進めて行くことができるようになりました。

(2) 事業の内容について（取り組み実施予算、事業の目的・特性）

・　（栗林）この環境省の事業が結構解りにくいのですが簡単に説明致します。

・・・・・(事業の内容について説明)

・　（栗林）ということで、今回、この事業のサポートをして頂ける北海道 EPO の担当者さんがこの会議に参加されています。御紹介します。EPO 北海道さんから溝渕さん、北海道環境財団の久保田さん、環境省北海道地方環境事務所　環境対策課の寺井さんです。一言ご挨拶頂いてよろしいでしょうか。また EPO 事業について補足があればご説明ください。

・　（栗林）お配りしています資料に事業応募申請書があります。この申請書の内容で応募しました。そして、この申請書の内容が、現在考えている協議会の取り組み構想そのものです。もちろん計画として甘い部分もあると思いますが、これをベースにまず進めて行きたいと思います。協議会の構成や実施メニュー、予算計画について書かれています。

3. 協議会の運営について

(1) 協議会の構成と運営体制

・　（松永）資料１の協議会規約（案）をご覧ください。裏面には本協議会の協議会構成員を列挙させていただいております。これは、あくまでも現段階での本協議会の体制案です。基本的にウトロ海域部会のままですが、あそこも入れたら良いのでは？という事がありましたら、是非ご発言ください。いかがでしょうか？

【決定事項】　一同異議なし。

・　（松永）それでは規約の中身についてです。中身をご確認・ご議論いただく前に、まずは本協議会の役員を選任させていただきたいと思います。
・　（松永）準備事務局の案としては、協議会の会長に知床温泉旅館協同組合の　桑島　様を候補として挙げさせていただきたいと思います。地域活性化委員でもあり、地域の発展や環境保全を目標とする取り組みの協議会として、相応しい方を・・ということで応募申請の最初の段階で、会長として立って頂けるか、打診させて頂き、快諾して頂きました。まず会長の選任ですが、皆さん桑島様にお願いする事でよろしいでしょうか？

【決定事項】　協議会会長に　桑島　氏　を選任。一同拍手にて承認される。

・　（松永）それでは皆さんの合意を頂けたということで、桑島さんに会長をお願いしたいと思います。桑島会長、どうぞよろしくお願い致します。
・　（桑島会長）桑島です。先日この協議会の会長をお願いしたいという打診を受けさせて頂きました。協議会の目標、趣旨には賛同できる部分も多く感じました。これまでの経緯やケイマフリについては現時点ではよく解っていないのが正直なところですが、良く皆さんのお話を聞いて貢献できるよう頑張って参りたいと思います。皆様どうぞよろしくお願い致します。
・　（松永）桑島会長ありがとうございました。次に副会長ですが、事務局としては、「見て守る」という趣旨から、実際に観光利用の主体者である「小型観光船協議会」と大型観光船を運航する「道東開発」さんの両者に就いて頂きたいと考えています。道東開発さんについては、本日はあいにく急きょ欠席となってしまいましたが、副会長の役職を担っていただけると打診させていただき、内諾をいただいております。みなさん、よろしいでしょうか？

【決定事項】　協議会副会長に「小型観光船協議会」、「道東観光開発（株）」を選任。一同拍手にて承認される。

・　（松永）次に監査役ですが、事務局としては知床観光協会さんと知床アウトドアガイドセンターの２者にお願いしたいと考えております。みなさん、よろしいでしょうか？

【決定事項】　監査役に「知床観光協会」、「知床アウトドアガイドセンター」を選任。一同拍手にて承認される。

・　（松永）最後に事務局ですが、協議会の活動は事務局がリードする事になろうかと思います。今のところ、事務局としては、海鳥研究会の福田さん、小型観光船協議会の神尾さん、道東開発の大木所長、環境省の松永（本人）、ユニオンデーターシステムの栗林さん、このメンバーを想定しています。また事務局長としては、そもそもこの協議会、前身のウトロ海域部会のスタートのきっかけとなった、ケイマフリの保護を訴えてきた福田さんに担って頂くのが妥当と思われますが、皆さんよろしいでしょうか？もちろん「私も是非事務局として関わりたい」と立候補される方が

いらっしゃいましたら歓迎しますので、いつでも結構ですからご連絡ください。

【決定事項】　事務局長に　福田佳弘氏、事務局に小型観光船協議会の神尾氏、道東開発の大木氏、環境省　松永氏、ユニオンデーターシステム　栗林氏を選任。一同拍手にて承認される。

(2) 協議会規約（定款？）の策定について

・　（松永）協議会設立に際し、協議会の約款、規約が必要となります。資料 1 に協議会規約を示させて頂きました。

・・・(協議会規約の内容を説明)・・・

内容について不明点や指摘事項など御座いましたら、ご発言頂きたいと思います。皆さまいかがでしょうか？

【決定事項】　一同異議なし。原案どおり承認される。

(3)EPO 事業の対応支出の管理について

・　（栗林）今年度の環境省事業（EPO 事業）の支出についてご説明させて頂きます。今年については幸い事業に採択されたこともあり予算があります。しかしながら予算をどんどん使ってよいという事でもありません。取り組みの支出として認められる支出でなければ、当然支払う事はできません。今年に限っては EPO 事業の絡みで、少々支出に関しては手間が掛かることもあると思いますが、御理解をお願い致します。

支払いの手順としては、協議会として支出を認めたうえで物品などの注文、物品の購入、人件費の支払い行為を許可します。勝手にお金を使って後から請求書を渡されても、支払いに応じられない場合がありますのでご注意ください。また、協議会の支出は全てオープンにしていきます。

予算計画については、人件費も認められているので、取り組みの支援作業をして頂いた方には、人件費もお支払いも出来ます。ただし、そう高い人件費設定ではありませんので、所属する会社様には、やはり支援ということで、そこのところはご理解願いたいと思います。少しでもこのような支払いが出来るということは、こういう取り組みでは幸せな事です。単価などについては、今後じっくり決めて行く必要があると思いますが、おおよそ資料に出ている予算計画の単価の程度を考えています。

また札幌から来ることとなる敷田先生及びわたくしユニオンデーターシステムの栗林については、少なくとも交通費、宿泊費の実費精算を考えたいと思います。

国の予算ですので、基本的に年度末の支払いとなるようですが、それまでの現金が無い事は問題となると思います。すぐに支払しなければならない物品購入も当然あるでしょう。これについては立て替えなどをお願いする事になると思いますが、どうかご理解の程、よろしくお願い致します。

4. 今年度の取り組み計画

・　（栗林）今年度の取り組み計画ですが、大枠としては事業申請時の活動メニューを想定しています。当時の申請時点とはスケジュール的に合わなくなっている部分が生じているので、役割分担と合わせて実情に落とし込んだものが資料 3 です。

・・・(資料 3 をスケジュールに沿って概要説明)・・・

内容としては、昨年度までのウトロ海域部会の取り組みメニューを基本とし、「海鳥ウィーク」ですとか、ミニ出前講座の開催強化などが追加されています。ただ、かなり盛りだくさんのメニューを詰め込んでしまった感があり、スタートはすでに 6 月も中旬ですから、全部を消化する事は難しいとも思っています。

それぞれの大枠の中で、具体的になにをやっていくかについては、今後事務局会議や企画検討会議を開いて揉んでいきたいとは思っています。ただ、スケジュール的には、今夏までに全員が集まった大きな会議を開くことはできないと考えています。したがって、この場で、できるだけ多くの具体的なアイディアをいただけると幸いです。

まずは、事業計画の基本ラインについては、御承認頂けますでしょうか？

【決定事項】　一同異議なし。原案どおり承認される。

・　（栗林）では、次に具体的な実施メニューについて、意見交換していければと思います。
今年の実施メニューの大きな目玉としては、海鳥 Week を想定しています。

・・・(海鳥 Week の概要を説明)・・・

ここに記載されてあることは、準備事務局の一部のメンバーでアイディアを出していったものですので、まだまだアイディア不足の点も否めません。この場においてもぜひみなさんに具体的なアイディアを提案していただきたいと考えています。

アイディアをご提案いただく前に、留意点をいくつかお伝えしておきます。まず、基本的に、これからは自分たちで企画して活動をしていくスタイルとなります。なるべく楽しみながら、やり甲斐を感じながら活動に参加できるような企画としていければと思います。

次に、お金があるからといっても今年だけかもしれませんし、スケジュール的に難しい部分もありますので、その辺を考慮していただければと思います。

今後は、今日いただいた意見を事務局で整理したうえで、メイルなどで皆さんと共有しつつ、早めに企画会議もやっていきますので、興味ある方は是非お集まりください。

5. EPO 事業採択の際の指摘事項

・　□（栗林）事業採択の際に、いくつか指摘を受けています。資料４をご覧ください。

・・・(資料に沿って指摘事項を説明)・・・

この部分の指摘は、どうしても受け入れなければならないと思いますし、ごもっともな内容の物がほとんどですから、これらの指摘も意識しながら協議会を進めて行きたいと思います。

6.閉会

・　（松永）本日はお忙しいなかお集まり頂きありがとうございました。会議の進め方も至らない点多々あったと思いますが、次回も是非お集まり頂けます様お願い致します。地域の取り組みとして協議会は動いていきますので、皆様の協力がこれまで以上に必要となってきます。地域の良い取り組みですので、是非ともご協力頂けます様お願い致します、本日は誠にありがとうございました。

写真 3-1　協議会の様子（2013.6.14）

(2)　第１回企画会議

会議名称	第１回企画会議
日　時	平成 25 年 7 月 3 日(水) 18:00～20:35
場　所	知床世界遺産センター　会議室
出席者	知床温泉旅館協同組合　地域活性化委員会　桑島委員長 知床小型観光船協議会　菅原会長、事務局　神尾 道東観光開発(株)　大木所長 ウトロ漁業協同組合　山本総務課長 知床ガイド協議会　山本会長 知床アウトドアガイドセンター　関口 知床海鳥研究会　福田 環境省ウトロ自然保護官事務所　松永（進行）、山岸、高橋 ＥＰＯ北海道　溝渕 ＮＨＫ網走報道室　高塚

議事概要
1.　桑島会長からのご報告 ・　（桑島）報道されているごみの不法投棄の件について、知床グランドホテル職員が関与していたため、会社の意向として、責任をとって当協議会の会長職を辞したいと考えている。引き続き協議会メンバーとしては、かかわっていきたい。 ・　（福田）協議会としては、残ってほしい。ただ、どうしてもということであれば、事務的な手続きもあるため、次期会長が決定するまでは、会長職を担っていただけないか？後任も推薦してほしい。 ・　（桑島）地域活性化委員長の後任として予定されている知床第一ホテルの西岡氏を推薦するので、打診いただいてはどうか。 ・　（ガイド協　山本）協議会としては、辞任する必要はない。むしろ、この時期に会長が代わることのマイナスの方が大きい。協議会として、会社に慰留をすることはできないか？→一同賛成。 ・　<u>【最終案】会長からの辞任願いについては保留事項（事務局預かり）とする。協議会として、グランドホテルに慰留を依頼する（事務局）。</u> **2.　今年度の「海鳥 Week」活動について** **（１）スケジュールについて** ・(福田）ケイマフリは８月の下旬にはいなくなってしまう。７月中がよい。 ・(松永）観光船の繁忙期を外す必要があるか？ ・(菅原・神尾）夏休みスタート時期から、お盆をピークに９月上旬くらいまで忙しい。 ・　（ガイド協　山本）来年以降は、お客さんの少ないシーズンに実施し、それをやることでお客さんを呼び込んでいければ。 ・　菅原・神尾）ベストシーズンは観光船が忙しくなる前の６月。

・　（福田）お客さんが多い時期でも講座の実施は可能か？
・　（大木）大型船では３００人くらいの乗客となる。講座を聞ける人も限られてくると思う。
・　（菅原）小型船でも海鳥を紹介すれば関心を持つ人は多い。ある程度の解説を行うこともできる。観光船として協力する内容から考えると、７月中でも可能だろう。
・　（ガイド協　山本）ＰＲ用のバッジやＴシャツの制作には、一般的に１ヶ月、デザイン等がそろっていても、最低２週間はかかると思われる。
・　（松永）そうなると、グッズが出来上がってくるのが、最短で 15 日の週の後半から 22 日の週前半。22 日開始が妥当か。
・　（高塚）21 日までは参院選の影響がある。22 日以降であれば（結果についての報道はあるが別枠なので）いつでも変わらない。報道面から言えば、週の最初の月曜日がよい。
・　（福田）１週間に事業を詰め込むよりも、少し猶予があるほうがよい。ただ、２週間は長い。

【最終案】今年の海鳥 Week は、7 月 22 日（月）～31 日（水）とする。
初日の７月 22 日（月）に目玉となるキックオフイベントが必要。アイデアを募集。

（２）具体的な内容について

①出前講座

・　（大木）大型船では３００人くらいの乗客となる。講座を聞ける人も限られて、不公平感も出てくると思う。現時点で、開催日程をセットすることは難しい。予約状況をふまえて、回答したい。
・　（菅原）小型船では船長によるガイドのタイムテーブルがこと細かく決まっている。改めて考えれば、お客さんが多い時期でもあり、講座の実施は難しいかも。
・　（桑島）うちのホテルでは、夜レクチャーなども行っている。佐藤マサ子という従業員が、ヒグマの話などをしている。その代わりに講座を開くことは可能。もちろん、他の観光客の方が聞きに来てもよい。４ホテルに対しては、私が照会をかけたい。
・　（ガイド協　山本）できないかもしれないが、ホテルだけでなく、各旅館や民宿への声掛けもお願いしたい。

【最終案】出前講座の実施場所は、大型船とホテル・旅館等とする。まずは、大型船（大木）、ホテル（桑島）、旅館（事務局）それぞれで、実施可能日を幅広に事務局に連絡したうえで、日程調整を行う。

②グッズの製作

・　（神尾）ヒグマのえさやり禁止キャンペーンのように、やはり海鳥 Week に関係者がおそろいの缶バッジやＴシャツなどを付けられるのがいいのではないか？それってなに？っていう話になる。大型船でも可能なのか？
・　（大木）乗組員は制服なので、Ｔシャツは難しい。ただ、缶バッジは可能。窓口の職員は、Ｔシャツも着用可能。
・　（松永）海鳥 Week まであと２週間あまりしかない。缶バッジにしても、Ｔシャツにしても、もし既存のデザインがあれば、それに頼るしかないと思う。今年度の海鳥 Week は暫定的にそれでいいのではないか？協議会のシンボルマークであったり、しっかりとしたデザインは

１年かけて皆で検討していけばいい。

- （福田）過去に海鳥研究会として、缶バッジを作成しようと考え、考えていたデザインがある（デザインの紹介）。
- （山本）いるかホテルとしても、Ｔシャツを販売しようという企画があり、前環境省ＡＲの中村さんにいろいろとデザインを考えてもらっていた経緯がある（デザインの紹介）。
- （一同）缶バッジのデザインは、空いたところに文字を入れれば、これでいいのではないか？
- （松永）缶バッジ、Ｔシャツについて、それぞれ福田さん、山本さんに製作責任者になってもらって進めていくしかないと思うが、それでよいか？→一同賛成
- （菅原）缶バッジの文字は、知床という文字だけでいいのではないか？海鳥協議会だの、海鳥 Week だのごちゃごちゃ入らないほうがよい。
- （神尾）知床という文字であれば、漢字が適当か。
- （松永）福田さんの方で、既存のデザインに知床という文字を入れ、協議会メンバーに提示してほしい。
- （菅原）缶バッジとＴシャツのデザインの図柄もそろっていた方がいいのでは？
- （山本）Ｔシャツは販売用として製作するとリスクも大きい。今回はスタッフ用として考えた方がいい。枚数が少なければ、プリントスクリーンを行えばいいので、製作期間の短縮にもなる。
- （松永）Ｔシャツは今年度限りのものとして考えると、知床海鳥 Week 2013 などとなるか？
- （関口）キャッチコピーも入った方がいい。ケイマフリという言葉を使うのかはわからないが。
- （松永）山本さんの方で、いくつかデザイン案を考えていただき、協議会メンバーに提示してほしい。
- （山本）Ｔシャツの購入費用については、各主体が責任を持てる枚数を把握し、当面立て替える形をとってもいいのではないか？→一同賛成。
- （松永）缶バッジとＴシャツの製作が決まったが、これ以外に手を出す余裕がないと思うので、この２つでよいか？→一同賛成。

議事概要

【最終案】海鳥 Week に間に合うように、Ｔシャツと缶バッジを作成する。

＜缶バッジ＞

- 福田さんが製作責任者となり、デザイン案を作成して協議会に諮る。
- 缶バッジのデザインは、既存のものを活用。「知床」という文字を挿入する。
- 缶バッジはスタッフ＋関係者＋講座やイベント等での観光客への配布用とし、数百～1000 個程度の製作とする（価格との調整）。

＜Ｔシャツ＞

- ガイド協　山本さんが製作責任者となり、デザイン案を作成して協議会に諮る。
- Ｔシャツのデザインの図柄は、缶バッジとできるだけそろえる形とする。
- Ｔシャツには、「知床海鳥 Week 2013（字体、表記要検討）とサブタイトル（「知ってる？」ケイマフリ）（仮）のロゴをプリントする。
- Ｔシャツはスタッフ用限定とし、数十枚程度の製作とする。各事業所で必要となる枚数を事

務局（環境省）に連絡する。
・　Ｔシャツの製作費については、各主体が立替るものとする。

③写真展の開催
・　（福田）写真展を開催してはどうか？
・　（松永）写真展であれば、既存の写真もあるし、お金や準備の時間もあまりかからないので良いのではないか？
・　（大木その他）観光船の乗船受付所や屋外での掲示は、人の流れが止まってしまうので難しい。分散ではなく、一カ所に集めて開催するほうが望ましい
・　（一同）異議なし。開催するのであれば、遺産センターがよい。
・　（松永）基本的に大丈夫だと思うが、団体予約の可能性もあるので、確認させてほしい。
・　（山本）プロ写真家は、印刷の色合いにこだわるので、意外に難しいかもしれない。
・　（福田）写真については、私の方でも撮りためているのがある。
・　（神尾）知り合いの写真家もいるので、あたってみたい。
・　（一同）掲示の仕方、水準にばらつきが出ると思われるが、今回は準備期間が短いのでやむをえない。開催するということに重きを置こう。
・　（福田）写真展のわきで、ケイマフリの YouTube 動画を DVD プレイヤーで流すこともよいのではないか？

【最終案】海鳥 Week 期間中に、世界遺産センターにおいて、可能な規模で知床海鳥写真展（仮）を実施する。
・　写真展の責任者（福田）は、遺産センター職員と調整の上、写真の展示数や全体の構成、写真の印刷方法を決定し、協議会メンバーに連絡する。
・　展示写真については、各自持ち寄り、または知り合いの写真家に提供を打診する。

④観光船サンセットモニターツアー（仮）
・　（松永）事務局での意見交換の際に、海鳥専用のツアーや、サンセットツアーを設けてはどうか？という意見が出たことがあるか、どうか？
・　（神尾・関口）クルーザーやカヌーを使った「海鳥観察ツアー」はお金の担保さえあれば、モニターツアーとして実施することも可能だが、海鳥単体での集客は難しい。
・　（菅原）お客さんが呼べないツアーをモニターツアーで実施しては、お金がもったいないのではないか？
・　（溝渕）アンケートを行うなどして商品化に結びついていけば、協議会経費としてモニターツアーを実施してもＥＰＯ事業としては問題ないと思われる。
・　（関口）海鳥 Week のイベントや活動の趣旨はなんだろうか？
・　（福田）希少種であるケイマフリを知ってもらうこと。海鳥を対象としたツアーが商品化できれば。
・　（関口）海鳥だけでお客さんを呼ぶのは難しい。（賛同多数）
・　（松永）海鳥でリピーターを呼ぼうとは思っていない。一見さんもまだまだ発掘できるはず。知床に来て、知床五湖だけ訪れて、観光船にのらないという人もまだまだ多い。ケイマフリ

の知名度を上げることで、ここまで来たんなら、観光船にのってケイマフリを見ていくかという気にさせられればしめたもの。

- （ガイド協　山本、関口）「ケイマフリツアー」「海鳥ツアー」ではなく、「野生生物ウォッチングツアー」等の方が、まだ、集客力はあると思う。野生生物の観察ができるようなゆっくりめぐるツアーは、ボンズホームさんがすでにやっているので、声掛けしてはどうか？
- （松永）協議会名は、ウトロ海域協議会。ケイマフリだけにこだわる必要はない。かつてはサンセットツアーをやっていたという話も聞くが、例えば小型観光船が実施するとして、経費的な制約があるのか、それ以前にマンパワー的に無理なのか？
- （神尾）マンパワーもあるが、船を一回出すのに１２万円。従業員が働く時間が増えるとなると、プラスアルファで労務経費もかかる。経費的な問題が大きい。
- （松永）協議会としても、今年せっかく予算がついているうちに、何か新しい商品化につながるような試験ツアーを行ってみたい。サンセットや野生生物をゆっくり観察できるようなモニターツアーを協議会として予算を付けて１本企画できないか？
- （山本）サンセットツアーであれば、集客がみこめるのではないか？来年度以降の商品化につながり、それで地元への経済効果があり得るということは意義がある。

【最終案】協議会の経費負担で、小型船による観光船サンセットモニターツアー（仮）を開催する。開催日や対象とする事業者について調整する（神尾）。

- 野生生物ウォッチングツアーを実施している、ボンズホームさんに対して、海鳥 Week とのタイアップを相談する（環境省）。

⑤アンケート

- （福田）昨年まで実施していたようなアンケートを行いたい。返信用はがきなどもつけて、その場以外でも回収できるようにならないか？アンケート参加者にはポストカードなどのグッズを配布して、回収率をアップさせたい。アンケートの内容は、観光業者にとっても、有効なものとすればよいのでは？
- （松永）アンケートをやるのは賛成だが、内容や回収体制を整えるのは意外と大変。２週間しかない中で実施できるものとしてはどうか？アンケートは、表面１枚のみの簡単なもの。サンセットクルーズ（仮）や講座などの一部の参加者のみを対象として、限定して実施することでどうか？

【最終案】サンセットクルーズ（仮）や出前講座などの一部の参加者を対象としたアンケートを実施する。アンケートのボリュームは表面１枚のみ。１案を作成し（環境省）、協議会に諮る。アンケート記入者には、缶バッジを配布する。

⑥広報手段

- （神尾）小型船の事業所に貼れる大きさとしてはＡ３判が適当。
- （菅原）少なくとも、写真展や出前講座などのイベントの情報は掲載してもらいたい。
- （福田）海鳥は、かいちょうと読まれることがある。そうなるとひらがなが妥当か。
- （関口）海鳥 Week のサブタイトルがほしい。

・　（福田）昨年作成したＨＰでは、～「知ってる？」ケイマフリ～をキャッチコピーとしている。統一できればいい。
・　（松永）１回目の知床海鳥 Week なので、このキャッチコピーがサブタイトルでもいいのではないか？
・　（松永）ポスターのデザインは、缶バッジの図柄をとりいれることでよいか。うちの事務所のデザイナー（高橋ＡＲ）が数案作成し、みなさんに提示させてもらう。
・　（松永）本来であれば、海鳥 Week のＨＰが作成できればいいが、その余裕はない。昨年作成したウトロ海域部会のケイマフリ紹介ＨＰに、海鳥 Week の一文をいれて、ポスターにリンクを張る形で対応したい。各メンバー所有のＨＰでもリンクを貼って広報をお願いしたい。バナーの作成についても、こちらで検討する。

【最終案】缶バッジデザインと同じ図柄をとりいれた「知床海鳥 Week 2013」ポスターを作成する。数案デザインを作成し（環境省）、協議会メンバーに諮る。ポスターには講座やイベント情報を盛り込むこととする。

・　ウトロ海域部会のケイマフリ紹介ＨＰに、海鳥 Week の一文をいれて、ポスターにリンクを張る形をとる（環境省）。
・　7 月 8 日の週の前半を目途にイベント開催の報道発表を行う（環境省）。

⑦当面の活動資金

・　（菅原・神尾）小型船協議会として、建て替えできる資金の準備が 50 万円程度ある。ただ、メンバーの事業所１社から、焦げ付きがないように、一筆書いてほしいと依頼されている。
・　（松永）協議会として一筆書くという性質のものではないと思う。今年度の事業は環境省のＥＰＯ事業ということもあり、協議会メンバーに環境省も入っている。必ず支払われるように調整したいので、信用してもらうしかない。→持ち帰って検討（小型船協議会）。

【最終案】協議会の当面の活動資金については、小型船協議会が立替金として拠出することを検討し、検討結果を事務局に報告する（神尾）。

２．今年度の海鳥 Week 以外（シーズンオフ）の活動について

・　（ガイド協　山本）専門家だけでできることには限界がある。乗組員や従業員が解説できる方が、すそ野が広がる。それらを対象とした勉強会みたいなものは開けないか？

【最終案】海鳥解説のすそ野を広げるために、乗組員や従業員を対象とした勉強会の開催を検討する。

３．来年度以降の活動について

・　（ガイド協　山本）協議会認定マークのついた商品やサービスを、各主体が開発、販売して、売上の一部を寄付にまわすような仕組みができないか。そうすることで協議会の会計も必要となり、それが集まる機会になる。また観光客にとっても、環境保全に使われることは動機付けになる。
・　（関口）海鳥だけでお客さんを呼ぶのは難しい。なんらかの「伝説」めいたもの、ストーリ

ーがあるとおもしろい。福田さんが言う「世界一ケイマフリを見やすい場所」というのはいいキャッチコピー。本当に世界一なのか？また、「赤い足」にちなんだ「赤い糸」婚活イベントとか。

・　（福田）見やすいという意味では、世界一。観光船という足もあり、溶岩台地と浅瀬、そこに発生するイカナゴ等、いろいろな環境条件が奇跡的にそろって初めて成立している。

【最終案】協議会で商品を認定し、売り上げの一部を協議会に還元するといったような継続な運営の仕組みを検討する。

□　ケイマフリを売り込むためのストーリー作りを検討する。

４．その他

・　（漁協　山本）小型観光船のものと思われる漁具被害があった。漁具がかなり絡まって土俵を切るレベルにまで行っている。土俵を切るのは漁師にしかできない。結局、どこがやったかは自ずと耳に入ってくる。なぜ、黙っているのか！！やったならやったでしょうがない。やったことは責めないが、しらを切ることは、信用問題にかかわる。Win-Win の関係なんて言っても、信用がなければ成り立たない！場合によっては、漁協はこの協議会からも手を引く。そのことを伝えておきたい。

・　（福田）今年はオオセグロカモメやウミネコはほとんど営巣していない状態。（ケイマフリは営巣を始めたばかりなので不明）。16、17 年調査を続けてきてかつてなかったくらい異常な事態である。

・　（松永）協議会印の作成、協議会の口座の開設を進めたい。事務局の連絡先は、当事務所で問題はないか？

・　（溝渕）環境省事業であっても、事務局は自然保護官事務所でも問題ない。（要確認）

【最終案】漁協からの漁具被害の報告を踏まえて、協議会の関係者間における信頼関係の構築に改めて配慮する。

・　協議会としての契約事務に必要な物品（印鑑）の作成、口座の開設については、淡々と準備を進める。

(3)　第２回協議会

会議名称	第２回協議会
日　時	平成 25 年 9 月 9(月）13:30～15：30
場　所	知床世界遺産センター　レクチャールーム
出席者	知床ウトロ海域環境保全協議会会長　西岡　保　（知床第一ホテル　支配人） 北海道大学大学院観光学研究センター　敷田　麻実　教授 知床博物館　元館長　中川　元 斜里町　環境課自然環境係長　高橋誠司 水産林務課　笹峯健太 商工観光課観光係長　伊藤　智哉 知床小型観光船協議会　菅原会長、事務局　神尾 知床斜里町観光協会　林　典幸 知床財団　事務局次長　寺井　元 知床海鳥研究会　福田　佳弘 ユニオンデーターシステム（株）　栗林　貴光 環境省ウトロ自然保護官事務所　松永（進行)、高橋、笠井 ＥＰＯ北海道　溝渕 北海道環境財団　内山 環境省北海道地方環境事務所　向田

議事概要
開会挨拶 ・　（敷田）ここにお集まりの皆さんは、初めての方もいらっしゃると思いますが、過去３年にわたってケイマフリの保全を中心とした活動に何らかの形でお関わりいただいた皆さんです。環境省が３年前にスタートさせたこの事業では、司会をしていただいている福田さんが中心になってケイマフリの保全をどうするにはどうすればいいかということでスタートしました。この事業につきましては、直接の関係者の皆さまほか、ここにいらっしゃる中川さんを初め、専門家の方、それから３年間この事業を支えていただいたユニオンデーターシステムの栗林さん、地域の中と外の関係者の皆さんが非常にうまく連携ができた事業であったと思います。そういう実績もありまして、環境財団とＥＰＯの皆さんのご支援が決まりまして、これから今年は１年間の事業を継続するというより、新たに発展させていくチャンスをいただいたと認識しております。EPO さんからは、よりステップアップするために取り組みがひとつの目標である宿題をいただいています。ということで、今日、お集まりいただいた皆さんについては、ぜひ３年の実績をもとに、次のステップに上げるにはどうしたらいいのかというのをお考えいただければと思います。 　この事業の実施は、環境省に過去３年間関わっていただきましたし、さらにステップアップしていくことを考えております。ケイマフリでスタートした事業ですが、もしかすると、他の野生生物のいい見本になっていく可能性を含んでいる事業でありますので、皆さんが今日、これからご検討される、新たに進められることが知床でいろいろな事業の見本になっていくというふうに意識をし

てぜひお話を行っていただきたいと思います。過去３年、関係する事業で座長をしていた関係で、簡単な計画紹介と引き続きの内容についてご挨拶させていただきました。どうもありがとうございました。

1.　協議会会長人事、構成メンバーについて

（1）　協議会会長人事について

・　（松永）「ヒグマの餌やり禁止キャンペーン中」に起こったホテルスタッフによる「ごみ投棄」事件を受け、桑島専務が責任を感じ、会長職を辞退したいとのご意向を事務局に寄せられていた。企画会議においても、事件と協議会は関係ない、慰留すべきとの判断で、グランドホテルにも続投をお願いしたが、辞意の意思は変わらず、協議会としてこれを受け入れることとした。桑島専務に後任として、知床第一ホテルの西岡支配人をご紹介いただき、事務局として説明を行ったところ、現業に差支えない範囲であればご協力したいとのお返事をいただき、本日ご出席いただいている。西岡支配人に代表を務めていただきたいと考えているがよいか。

（承認の拍手）

（知床第一ホテル　西岡支配人からご挨拶）

・　（西岡）この度、会長職という少々荷が重い大役を預かりまして。本来ならば、地元事業者、役場関連の方、有識者の方がたくさんおられる中で非常に大変恐縮で、困惑していますが、桑島専務からというお話もございました。また先日松永さん、神尾さんからも真剣に知床海域の環境保全と、あわせて地域の活性化も踏まえていらっしゃるというお話をいただきまして、共通命題だというふうに思いました。先日行われました「活性化委員会」の会議の中で、活性化委員会として、今後歴任するであろう会長職の者が代表としての会議に出席させていただくことが承認させていただきました。非常に大きくて重要な課題であるということと、観光関係者として、宿泊業の私たちが何か皆さんのお力添えになれるのであれば、と考えておりますので、勉強しながらご協力させていただきたいとこのように思っています。大変力不足だと思いますけれどもご支援の程、お願い申し上げます。

（2）構成メンバーについて

・　（松永）敷田さんから、知床財団にメンバーに入っていただきたいと提案がありました。現時点ではオブザーバーであるが、寺山次長に出席いただいています。自然センターというビジターセンターを運営していることもありますし、普及啓発という点でも連携が必要な組織であると思います。その他の部分でも、対自然環境の専門家集団ということでアドバイス等いただけると思いますので、事務局としても構成メンバーに入っていただきたいと考えています。

（承認の拍手）

・　（知床財団　寺山次長）よろしくお願いいたします。

2.　協働取組推進事業について

(1)　協働取組推進事業の受託と今後のやり取りについて

・　（溝渕）○資料 1-1、1-2 について、事務局が EPO に随時事業報告をしていく旨と 2 月に報告会があることを説明。
・　（溝渕）補足として、下半期はステップアップに向けた検討をぜひ進めていただきたい。

3.　平成 25 年度事業スケジュールと今後の活動中間報告について

(1)　事業スケジュールについて

・　（松永）・・・（○資料 2-1 に沿って事務局が説明）・・・・・
・　（溝渕）第 2 回連絡会は 10 月 4 日（金）に札幌で開催。公開で行う。知床ウトロ海域環境保全協議会と、北海度ブロックのもう一つの選定案件である NPO 法人もりねっと北海道（旭川）の取り組みの報告、有識者による取り組みの分析、助言をいただく機会とする。ウトロ海域協からも、お二人程度、札幌に来ていただきたいと考えている。詳細は別途お伝えする。

(2)　海鳥ウィークについて

・　（松永）・・・（資料 2-2 に沿って、事務局が説明）・・・・・
・　（松永）アンケート調査の集計結果は別途お送りする。
・　（福田）海鳥 Week では、小型船でのガイドは関心を持ってもらえたと思う。ホテルでの「うみどりトーク」はまだ改善の余地がある。

(3)　海鳥調査について

・　（福田）・・・（○資料 2-4 に沿って、海鳥研究会　福田会長が説明）・・・
・　（福田）営巣数が激減。十数年の調査の中で、こんなに悪いのは初めて。巣をつくったが途中で放棄しているものも多いようだ。気温の低さ、大雪などの理由で繁殖を途中でやめたのではないかと思われる。
・　（中川）ケイマフリはいい状態であるが、他の状態を見ると異常。ウミウは 400 を下回ったことはなかったが…。積雪の影響もあるとは思うが、カモメの仲間は例年 5 月に入ってから営巣しているものもあるので、放棄したということもあるかもしれないが、半減以下というのは餌とか、何か他に大きな要因があるのではないか。
・　（福田）トウゾクカモメも非常に少ない、水温の変化が激しく、急に高くなったりしたので、餌がとれなくなったりすることもあったのではないか。海全体がおかしいという印象。海域のモニタリングとして、海鳥は指標になるのではという気づきもあった。
・　（中川）観光船から乗っている皆さんから情報ありませんか。
・　（神尾）今年はプユニ岬とかで繁殖している巣はなかった。調査している範囲以外に隠れているということは考えられないか。
・　（福田）繁殖環境が決まっているので考えられない。オオセグロカモメは市街地でも繁殖するが。
・　（中川）人工物の上に営巣しているものがあって、そっちの移動していることはどうか。
・　（福田）市街地にはあまり増えない傾向にある。ごみの処理がうまくいっているためだと思われる。

国後の繁殖数が増えているとは聞いているが、そんなに一気に引っ越していくとは考えられない。

・ （松永）調査範囲はどこからどこまでか。

・ （福田）ウトロの市街地から相泊までで、羅臼の市街地は調査範囲に入っていない。オロンコ岩は減っています。斜里側と羅臼側で傾向は同じで、羅臼の方が常に少ない。海のえさの小魚などのデータや水温なども含めて解析していく。

(4) 協議会における平成 25 年度会計について

・ （松永）・・・（○事務局より資料 2-5 に沿って、事務局が説明。）・・・

・ （松永）今年度に限り適用するものとしたい。

4. 協議会の当面の課題と将来的な方向性について

(1) 協働取組カレンダーについて

・ （松永）ただ単に調査をやったり、意識啓発をやるだけではなく、協議会の主旨を協議会メンバーで共有して、何のために進めているのか、何が問題なのか、将来的にどんな組織にしていくのかを明確にして行くために、協働取組カレンダーを作成していく必要がある。事務局でたたき台として、作成いたしました。（資料 3）

「①【WHY】この取組がなぜ必要なのか」について

・ （中川）生態系の中のひとつにケイマフリがある。ケイマフリを通して、海域環境全体を考えてほしい。いろんな海の関係者がケイマフリのことを通じて集まって、知床の海全体をみんなで見て、情報を共有して、保全していく。ということができるのではないかと思います。

・ （松永）協議会の規約ではケイマフリに特化しているので、少しせまいかなとは思っていた。そのように変えていこうと思います。

・ （中川）ケイマフリを通して、いろんなつながりの中のひとつで最初に問題が出てきた種。海全体はつながっているというのは必ずあると思います。

・ （松永）今日の協議会の参加者は観光関係の方が少なかった。ガイド協議会、アウトドアガイドセンター、一次産業の視点の漁協も今日は欠席されていて、幅広い関係者とはなっていない。一般的な希少種には触れず触らずという視点ではなく、知って、見て、観光利用しながら守っていくとやり方を提唱している以上、観光のシンボルとしても使っていけたらなあと、観光協会とか観光課さんにご指摘いただければと思いますが、いかがでしょうか。

・ （西岡）ひとつは、なぜ海鳥が減っていって、数が不安定なのか。伝える側としてはどのように伝えるのか。どうすることが対策につながってくるのか。ひとつは、何をしてほしいのか。どんな啓発をして欲しいのか。ヒグマえさやり禁止キャンペーンでは「えさを与えないでください」「ごみの処理をきちんとしてください」とわかりやすいが、海域の場合は何をしてほしいのか、何をしてほしくないのかを明確にしてほしい。もうひとつは、保全をすることで何が変わってくるのか、未来予想が明確に伝わってくると、よりこういう活動が浸透してくるのではないか。

・ （福田）減っていった理由というのはわからない。ケイマフリはヒグマのように人を襲ったりするわけではないので、アプローチの仕方に悩む。以前ケイマフリが生息する地域に観光船が近づき過ぎたことで、数を減らしていったという経緯があった。そのことをわかってもらって、協議会にも参加してもらうようになったという、協議会を作っていった経緯がある。今、回復しているように

見える。科学的に確定したデータではないが。

- （松永）どのようなことをして欲しいのか、どのように変わるのかは、海鳥が観光の目的になれればと思う。海鳥を観光資源として利用していくことで、観光利用の幅が広がる。それを目当てに観光に来ていただけるようにしていきたい。

  希少種の保全は、まずその存在や背景を知ってもらうことで守ろうという意識が出てくる。それらを通して win-win の活動にしたい。
- （福田）協働で取り組むことで世界遺産知床の価値が上がっていくと思います。世界遺産としてのレベルアップを図れるのではないか。
- （栗林）「規制によらない保全」が重要。規制をせずにメリットを享受しながら、メリットを得ていこうと考えている。

「②【WHAT】この取組で何をするのか」について

- （中川）「将来的には」ということではなく、いまやっていることがつながっている。生物はなんだかんだ人間の影響を受けている。どういうことが影響を与えているだろうかと、みんなで考えていくことで広がっていく、そういうニュアンスで書くほうがいい。
- （福田）環境教育の場にもなりえるかなと思っています。
- （松永）海域環境保全協議会と銘打っているからにはケイマフリ以外にも考えて行かなくてはと思っていた。みんなで考えること自体が保全活動のひとつであると言っていただけると、他の活動のことを考えることができる。
- （中川）何ができるんです。ということが出てくると思いますので、そのひとつとして先ほどの観光船の取り組みもありますし、知恵をしぼって、その中から出てくるということもあると思いますし。
- （福田）漁業に対して、どのような価値が提供できるのかという課題があると思います。保全が漁獲量の向上や、価値の向上に繋がればと思うがいい案はないか。
- （菅原）漁業者は観光は出ていけという考えの方が多い。空き缶をボンボン捨てている、そのことをやめてもらうのがよい。
- （高橋）ケイマフリの保全からいろんなところの海域保全に繋がるという話がでているが、海岸漂着物だとか、住民が身近に参加できる取り組みができると思う。ごみ対策というのもひとつあるのかなと思いました。
- （栗林）ありがちな活動ですけれども、成果を実感できる取り組みだと思う。リターンがすぐに目から理解できる活動というものもやったほうがいいのかなと思います。半島のごみ回収もやっていますよね。

- （中川）海鳥などはプラスチックごみの影響を受けている。漁具とか釣り糸とかからまってとか世界的な問題である。
- （栗林）小城先生とかの出番があるかなと思っていました。
- （高橋）環境省とまちの主催で、年 1 回、岬に出て 10 回くらいやっている。減っている実感が出ており、達成感がある。油の問題もそうですし、海外漂着物のこともありますが、捨てない、拾うということもある。漁業者の参加は「文吉湾」のところまで行くので協力して頂いている。学校教育

関係では、博物館の体験学習で中学生を船で連れていっているが、岬の方に立ち入ってというのは制度的には確立していない。

- （溝渕）サンセットクルーズのときに地元の子どもたち、家族が参加してとても喜んでいた。そういうところからの海を守りたいという思いも芽生えるのではないか。
- （福田）子どもの教育から、親に伝えていくこともできるのではないか。また、海鳥の糞が観光客のクルマを汚しているという課題もある。
- （林）繁殖とかの文言は入れていないが、いい看板があればいい。どれくらい希少な鳥類なのかを知らせるＰＲをしていってはどうか。
- （中川）相手が理解すると怒りがおさまったりする可能性もある。
- （栗林）町の取り組みにも協議会は寄り添いながら、win-win の関係ができればと思いますので、協議会を活用していただければと思う。
- （向田）調査だとか、保護の部分はほぼ終わっている。知床スタイルの確立をし、ステップアップした組織を作っていって欲しい。
- （中川）「知床スタイル」は専門家だけではなく、みんなでやろうと言っていたと思う。船によるゴミ拾いセンサス調査はどうだろうか。以前、知床横断道路で調査を行っていた。どんなゴミがどんなところにどれくらいあるのか種類を分けて行っていた。海のごみを調べるというのもある
- （菅原）以前ハワイで、チャーターした船が目的地に行く途中でごみを拾っていた。大きな船が U ターンしてまで、たったひとつのごみを拾っていくのに驚いたが、そんな活動も悪くない。
- （栗林）漂着ごみの関係、どこから来ているのか、何由来のゴミなのか分別するのは面白い。いろいろなごみを拾うということもあるかもしれない。
- （福田）ごみもテーマの一つとして扱えるのではないか
- （敷田）海鳥と関連も近いし、海域の美化とのつながりもある。砂粒を数えるような話になる。労力と手間とエンドレスな活動になるので、この集まりでどこまで対象でするので効果的にやってほうがいい。大きな活動の一部を支えることになるので、そういう整理が必要になる。ごみを拾うことも、自分たちの中でできる工夫として開発する方がいい。規制をしないで環境保全ができるという、新しい試みがここまでのところうまく行っているのが、みんなが得できているからだ。
- （敷田）サンセットクルーズ、何を期待していました？何かを見て、そのサービスにお金を払うが今まで。サンセットクルーズは雰囲気を買ってくれるように移せるはず。消費の仕方を高度化するブランド開発をしていければ、メリットを得られる人が増える。お金の一部と労力の一部を消費の高度化につなげればいいのではないか。

　ごみの投棄については、なかなかあらたまらない。海との付き合いができているようでできていない。海との付き合いをもう一度していただくほかない。

　そもそも業業者とは意見が違うと思いますし、こちらが考えていることと必ずしも一致しないと思う。だが、漁業の存在は利用できるとメリットが大きく、新しい展開になると思います。漁業者はこちらに利用価値があると思っていないが、別の意味でこちらを使えるなと思わせるところがあれば、そこが突破点になると思います。協働することでのメリットは大きい。小型船を乗っているのは女性が６割。女性にはイメージを伝えるほうがアプローチのほうが伝わりやすい。

（菅原）ドルフィンはほとんどインターネットで予約するお客さん。

- （神尾）ゴジラ岩観光は半分くらいがインターネット。
- （敷田）イメージを伝える内容は全員で考える必要はありませんが、協議会を利用していけばいい。

私はケイマフリの話より、ケイマフリを保全する人たちの話のほうが聞きたい。2 日 3 日しかいない人にとっては、希少種と言ってもそれほど重要なことではないが、話を聞くことで自分との関わりを感じた人は、福田さんの活動に共感するようなことになっていく。新しい商品開発をできる価値はあると思います。

- （福田）サンセットクルーズの時間帯は、これまで調査できなかったが、これまでとは異なる生態がわかってよかった。
- （西岡）ごみを基点だとか、地域の人がどういう意識で取り組んでいるかということが重要なコンテンツになってくるので、そういう展開が考えられるのではないか。すぐに対応できるレベルであると思います。
- （菅原）サンセットクルーズはすぐにできるが、雨、雲のときはできない。天気に影響を受ける。そこがひとつ難しい。また、朝早くから夜遅くまで従業員を働かせるという問題もある。
- （敷田）観光協会と相談しながら、観光船業者の間で順繰りでやることで、従業員の問題は解決できるのではないか。来年すぐにやるという訳ではなく、実験の規模拡大はできるんじゃないか。雨天時は最初から別プログラムを用意すればいい。
- （環境省）この事業では今年中に知床スタイルの確立をしろというわけではないので、皆さんの自由な発想で進めていって欲しい。
- （敷田）せっかく知床財団の寺山さんに来てもらっているので、何か役割をしてもらってはどうか。
- （寺山）「漁業者との連携は漁業者へのメリットを作らなくてはうまくいかないだろう」と「ケイマフリの認知度を上げるためデータの徹底した発表」の 2 点が大切だということはわかった。お手伝いできるところがあると思うが、まずは静観したい。
- （福田）知床自然センターでもＰＲをしていただけるとありがたい。広報誌だとかで PR して頂きたい。
- （敷田）知床財団広報誌 SEED の次号で取り上げてもらえないか。
- （寺山）紙媒体よりも自然センターの「柱展示」でこだわりのケイマフリ展示をつくってはどうか。ケイマフリのアイドル化が必要ではないか。
- （中川）福田さんの調査結果を知床財団に持っていってはどうか。アドバイスをアタ抱くだとか。知床財団が海の調査に乗り出すきっかけになるのではないか
- （敷田）冊子の企画はいつころ考えているのか。
- （寺山）余裕があれば、１年前から企画をしている。編集に 2，3 ヶ月かかる。
- （敷田）わざわざ「知床スタイル」をつくろうと考えると手間暇かかるが、アウトプットすることを目標とすると、取り組みやすい。冊子で特集してもらうことを検討していただけないか。
- （寺山）検討はしていきます。広報誌に乗せるというのであれば、知床スタイルが完成されて全員に共通認識があり、合意があがっている状態であればよいが。今作っている状態であれば、難しいであろう。

5. その他

（1）チャーター船に対するリスク管理について

- 福田：ケイマフリの群れにつっこんでいく船がいた。ケイマフリが有名になると、逆にそんな問題も出てくるだろう。行き過ぎたバードウォッチングにならないように、させない、しないというように活動を進めていきたい。釣り船をチャーターしてというパターンは今後は注意したほうがよい。

・　中川：現在、遊漁船で観察とか写真撮影というのは結構あるのか。
・　福田：今の時点ではほとんどない。他の地域ではあると思う。落石、歯舞などはやらせていない。漁協の山本さんによれば、釣り船（遊漁船）はやっていいが、釣り船で観光はしてはいけない。通常の漁船はやってはいけない。
・　敷田：小型観光船が割を食うので、現実になるのは将来であるが今から注意しておいたほうがいい。かといって、小型船の方ができるわけではないので漁協との話し合いをしておくほうがいい。
・　松永：遊漁船に対してあまりいい思いをしてはしていないが、ライセンス関係のことは「なかなか言えないんだよね」と言っていた。

（２）ガイドブック作成提案について

・　（松永）協議会の事業継続のための仕組み（運営体制、役割分担、資金面）が構築されておらず、話し合いをしていく必要である。資金面で足しにしていくための提案として。ガイドブックを作成し、その中で「知床スタイル」を表現、定義づけしていってはどうか。アンケート集計結果で、一番ほしいのは「ガイドブック」だった。観光船でのうみどりトークの場合、欲しいグッズのアンケートでは半分以上が「ガイドブック」が欲しいと回答されていた。ガイドブックを作って売っていくことで、資金の足しになればと思う。事務局で案をつくって、提示していきたいと思う。
・　（栗林）過去３年の事業で「パンフレット」をつくろうというのもあった。それをもとにバージョンアップしてはどうか。
・　（福田）海鳥研究所で作成しているパンフレットも増刷を目指したが、助成金があたらなかったため増刷できていない。発展的なそのコンテンツを提供してもよい。
・　（敷田）観光船事業者にとってはメリットになるのか。
・　（神尾）メリットはある。
・　（菅原）パンフレットしかないので、ガイドブックがほしいという声はある。
・　（敷田）どうせ作るならおしゃれなものを作った方がいい。「シリエトクノート」のような、おしゃれなデザインで小さいものができればいい。知床財団の作っているものもデザイン性が上がっているので、目標にして作っていくといい。ホームページの観光船の予約システムに入るのに 10 秒ぐらいのイメージ動画が流れるのもいい。

・　（寺山）素敵なものを作るのは大変なこと。紙媒体がいいのかもわからない。船に乗ったとき、手にバーチャルのケイマフリが現れるようなアプリの開発とか。だいぶ遊んだものを作った方がいいと思う。

●閉会・挨拶（知床第一ホテル　西岡支配人）

・　（西岡）それぞれの立場ごとに意見を出し合える場である、ということが大事だと思いました。引き続き行っていただければと思う。

終了

写真 3-2　協議会の様子（2013.9.9）

(4)　第 2 回事務局会議

会議名称	第 2 回事務局会議
日　時	平成 25 年 10 月 30(木) 16：00～18：00
場　所	環境省ウトロ自然保護官事務所会議室
出席者	ウトロ自然保護官　松永暁道 自然保護官補佐　高橋優太（AR） 〃　笠井憲子(AR) 知床小型観光船協議会　神尾昇勝　（ゴジラ岩観光） ユニオンデーターシステム(株)　栗林貴光 知床海鳥研究会　福田佳弘 知床第一ホテル　西岡保 北海道地方環境事務所　寺井仁史 北海道環境財団　久保田学 EPO 北海道　倉博子

議事概要
１．開会 ・　（西岡）予算とこれまでの経緯、これから状況に合わせて意見交換をしたい。 **２．今年度の予算について（配布資料を参照）** ・　（松永）当初予算は 250 万という形で受託。実際の支出、予算との差額は資料の通り（予測含む）。いまのところ、総額で 214 万程度の支出があり、35 万円残る。これ以降の作業としては、報告書作成については計上していない。また、前回の協議会でガイドブックの作製についても承認いただいた。ガイドブックについては年度内に印刷までは出来なくても、作業を進めてゆく。その作業料、イラスト・写真等の謝金・借料を含んでいないので、そこを含むと収支ゼロになる。 **[費用の立て替え・人件費支払いについて]** ・　（松永）立替部分については、山本氏が T シャツ・缶バッチ発注 20 万ぐらいを立て替えている。山本さんが 29 日に亡くなられたが、落ち着いたところでご家族あるいはホテルの方にお話に行くこととする。 ・　（松永）海鳥 Week の作業等にかかる人件費は、基本的に会社等に対して支払われることとなるが、ケースバイケースになるので、個別に相談してもらった方が良い。 【合意事項】各自負担金については、事業終了後の精算となることで了解された。

[小型船協議会から承諾していただいた当座資金について]

・ （松永）小型船協議会のほうでお金を使っていいよという形で承諾していただいたが、そのお金は使われておらず、今後も可能であれば使わないこととする。

[デコイについて_流失について・来年度の設置について]

・ （福田）デコイが流失した。作らないといけないが、その前に、管理を徹底しないといけない。撤去の責任を明確にすべき。流出したデコイについては、土俵にもろい部分があり、砂が流出したものである。定置網の船を用いて沈めれば流失はしないものと考えられる。デコイの単価は高く（約 6 万円。FPR 製）流失前提に作るわけにはゆかない。流されてしまうことを考えると、ケイマフリがいる時期プラスαに設置時期を限定することも考えるべき。

・ （福田）ケイマフリが巣地を探している時期は波が高く、組合に協力を求めにくい。また、船が大きくなればなるほど燃料代がかかる。

・ （栗林）協議会として漁協へ文章で正式な依頼をするかたちで交渉してゆくべきではないか。

[デコイについて_活用・設置の意義]

・ （福田）デコイの設置については、環境省がケイマフリの普及のために設置しているような説明のされ方を聞くことがある。営巣地での設置について誤解に無いよう観光船に徹底したい。あくまで、鳥の営巣地での船との距離間を感じるためのものであり、また協働で守るための活動のシンボルとして、鳥のいない時期に設置しているものである。

・ （福田）デコイ鎮めているのは、かつて大きな繁殖地だったが、今年もそこでは繁殖はしていなかった場所である。やがては「また戻ってきた」シンボルにしたい。

・ （福田）今年のモニタリングではデコイの効果は見えていない（設置時期が遅かったため）。普及の効果を狙っているととられかねなかった。

[デコイについて_今後]

・ （栗林）デコイによる再生計画は専門家である福田氏に立ててもらわないといけない。三年後にはどういう状況になっているのか、陸上設置はいつ、といったような長期的なもの。専門家の意見を聞いて、そういうこともできるということをアピールすべき。まずは福田氏が考える理想的な計画案を立ててもらい、それを現実的に可能となるものかを協議会で検討する。

・ （福田）現実的にいまは調査とモニタリング、観光利用しか考えていないので、その先にどこを目指しているのというものが必要。協議会としては、繁殖地拡大の誘因としてデコイが活用させているような仕組みをつくりたい。

３．本年度の事業について

[協働取組カレンダー・取り組むべき事業の確認]

・ （福田）今後、出前講座はニーズがあれば行う。流氷の時期だったら、夏の海の話をして、夏にもまた来ていただく誘因とする、など。回数を重ねてやりすぎることはない。

・ （栗林）協働取組関係については、事業とは離れることで、EPO・環境省と相談しながら作成する。3 年計画は先に松永氏に作成していただいたのでそれをベースとする。あとは、知床スタイル

の明文化が残っているが、イベント的なものはおおむねできているかと思う。

[知床スタイルについて・協議会説明資料について]

- （栗林）明文化し、パンフレットを作成するには、まずはたたき台が必要。
- （福田）「知床スタイルは何なのか」というのを既存の資料（福田氏が過去作成した資料がある）をたたき台としてはどうか。
- （栗林）テキスト量が多いものよりも、A4 の 1 枚で分かるようなもの。憲章のようないくつかの短いフレーズと、関係図で表現できるとよい。ただし明文化には熟考が必要。言葉づかいも誤解を招かない、そしてわかりやすいものを。
- (栗林)協議会のパンフレットのようなものが必要。会長の交代もあったので、これまでの経緯を含め西岡会長へ説明する資料を作成する。そうすると、それがひいては福田氏が外部に対して説明を行う際の資料にもなる。(別紙栗林メモ参照)。
- (栗林)web サイトも必要。知床スタイルの定義のようなページがあってもよい。協力者、スポンサーを募る際のツールにもなる。
- (栗林)知床スタイル会議を開催してはどうか。それぞれが思う知床スタイルを作って持ち寄っていけばいい。キーワードだけでもよい。
- (栗林)西岡会長は観光業界の方であり、我々と違う専門的な視点から見ていただき、活動にご意見をお願いしたい。
- (栗林)この協議会は、多種に渡る立場の方が入っておりこれは強みである。

[ガイドブックについて]

- （松永）ガイドブック等については、敷田先生から紹介されたシリエトクノートを作成した斜里町の中山氏、網走タイムズのアベ氏に相談をしながら、AR の 2 人に作成を任せたい。
- （松永）構成案等のたたき台や意見出しの編集会議も実施したい。
- （松永）まずは校正案をつくり、それに意見を出してもらう形がよい。完成は今年度中でなくてもよい。

[web サイト・FB について]

- （福田）福田氏が協議会名のフェイスブックを作成したが、福田の個人用と混同してゆかないかとの懸念がある。(法人仕様で作成していないことがわかったので、後日 AR の高橋氏に作成してもらうことになった)。
- （松永）ホームページとフェイスブックの役割は別。固定の情報はホームページにおき、うまく連動させ協議会の活動を理解してもらうツールとなるとよい。
- （松永）FB で「いいね」を押す人が何故「いいね」を押すのか。協議会の活動に対してか、知床のホットな話題が欲しくていか。後者ならあまり意味がない。→バードウォッチングのネタを提供するのは協議会の役目ではない。

［事務局の運営について］

・　（栗林）第１回、２回協議会実施には松永氏へかなり負担をかけている。今後どの様にして軽減するか。
・　（栗林）会議開催のメール連絡については、一部で実施か、全員なのかは相談してほしい。開催の連絡は早く流すこと。
・　（栗林）会議開催の際、資料づくりが大変である。内部だけの会議は資料を少なくしたい。

［助成金および今後の活動資金について］

・　（福田）来年度の活動するための助成金情報を栗林氏の方でまとめてもらった。ある程度、説明時間がないと応募についての協議会会員への説明は出来ない。→今回予定していたもの(太陽財団の助成)は見送り。
・　（福田）助成金をもらうと活動に係る人件費部分が出ないため、結局持ち出しが必要になる。
・　（栗林）人件費を積める複数年の助成金もある。しかし競争が激しく中期的な活動計画等がないと獲得することは難しい。単年度足りない部分を助成金で調達するのはいいのか、今年度もあと５カ月あり、この期間に今後中期的な活動計画を作成しては。
・　（地方環境事務所）来年度の環境省予算概要がＨＰで公表されている。来年度の本事業については、総理指示でもある「経済財政運営と改革の基本方針」に沿って本年の倍額を計上されている。こちらについては、本省からの説明がないので、詳しい内容は不明だが、何らかの形で継続するものもありえる。しかし、以前からもお話しているとおり、本年度の目標達成の整理や、活動により新たな巻き込みターゲット等今後の計画も必要となると思う。本年度の最終的な活動の報告についても、現状こちら側から示せていない状態であり、こちらも含め新たな情報があれば早急に連絡等することで今後ともよろしくお願いする。
・　（松永）来年度の活動や中期計画が決まらない状況で助成金の応募は難しい。今後何をしたいのか。それに必要な金額をじっくり考える期間があっても良いと思う。助成金を取ることばかりに走ることで、活動自体が弱まっていくことにならないようにするために、ここは一度冷却期間を取ることも重要でないか。
・　（栗林）助成金ありきの活動だと打ち切られるとどうなるのかが宿命としてある。持続継続可能な仕組みになってゆかない。今期は予算が付いたことでここまで進めることが出来た面がある。協議会の持続性はモニタリングにかかっているので、福田氏が調査費用を獲得するためなら、協議会の名前を使って助成金を取ることには反対はしない。但し、事前に同意を得る必要はある。
・　（神尾）「海域を見つめる」というのが協議会のテーマであれば、モニタリングについて協議会で担保するという考え方もありだろう　→　協議会の活動では保全としても保護増殖までは無理。そうするとモニタリングは重要になるので、資金のある程度のパーセントは占めておくべき。
・　（地方環境事務所）助成する側としても、そのくらいの額で何できるというよりも、それをベースにしてどうしていくのかというところを見ていく。広域というのはポイントとしては大きい。連携、地域発展を前提として謳っている助成金ならなおさら。
・　（栗林）　協議会としてどのような資金調達をするのかは持続性に関わる。協議会にそれぞれのメンバーが個人として参加しているのか仕事として参加しているのかは、企業から資金を調達する上で重要になる。

・　（栗林）斜里町長に一度、協議会でこの活動を直接訴え、町の年次予算に組み込んでもらうのが望ましいのではないか。ウトロの各事業者が名を連ねた協議会であり、無視できない声になるのでは。陳情等も視野に入れる。
・　（栗林）日本野鳥の会のように会員を集めていくのも一つの戦略。企業からの継続的な支援も考えてゆけるとよい。
・　（栗林）船舶のエンジンを製造している会社などからの支援を求めるのも考えられる。
どちらにしても、今後「何を実施してくのか」など実施する計画は必要であるので引続き考えていきたい。

[そのほか]
・　（栗林）ソフトビニール製のアヒルを模したケイマフリ版が作れるとよい。

(5)　第３回事務局会議

会議名称	第３回事務局協議会
日　時	平成 25 年 12 月 4 日(水) 16：00～18：00
場　所	知床世界遺産センター　レクチャールーム
出席者	知床ウトロ海域環境保全協議会　西岡保　会長　（知床第一ホテル　支配人） 知床小型観光船協議会　事務局　神尾 道東観光開発㈱　大木 知床海鳥研究会　福田 環境省ウトロ自然保護官事務所　松永（進行）、高橋、笠井

議事概要
1.　知床海のハンドブック（ウトロ版）（仮称）企画書（案）について意見交換 ・　資料　「知床海のハンドブック（ウトロ版）（仮称）企画書（案）」について意見交換を行った。 ・　あまりにも観光船に特化しないほうが良いという複数の意見をいただいたので、暫定的に「海のハンドブック」という名称に変更する。 ・　ページは＋４or８と膨らんでいるが内容的に弱い（岩の説明だったり、景色の説明だったり…）部分もまだまだあるので、今後テーマ性やメッセージ性等を考えて、取捨選択していければと思う。 ＜ハンドブック作成の目的＞ ・　海域に関わる人の営みやいわれをとりあげ、観光資源となっている景観の裏側にあるドラマについて、海域観光客により深く知ってもらう（観光の充実にもつながる）。 ・　海域観光客に、野生動物と人との適正な関係（距離）の周知を図る。 ・　ハンドブックの売上収益を海域の環境保全に還元する（観光船のエコツアー化）。 ・　ハンドブックの売上収益を海域エコツアーの推進や海域観光の質の向上、海域観光客の誘客、その他地域活性化に還元する。 ・　（サブ的に）関係者のこれまでの取り組みの一つの結実。協議会の安定運営。 ＜ハンドブックのイメージ＞ ・　かわいらしく、デザイン性が高く、おみやげとして喜ばれるもの。女性を意識したもの。イラストをふんだんに。 ・　ルールなどの記載や団体・取り組みのＰＲなどは極力少なく。（書く場合であっても、固い文章とならないように工夫） ・　海域に関わる人の営み、生態系や人と自然との適切な関係について、堅苦しくなく、分かりやすく解説する。 ・　観光船の利用とマッチさせる。一方で、ただの案内ブックとはしない。 ・　大きすぎず、かさばらないもの。ポケット図鑑か文庫本サイズで、２０～２４ページ程度。

＜ハンドブックの販売について＞

- 知床観光船（おーろら、小型観光船）（販売の仕方は要調整※）での販売を主に想定。その他、補足的に遺産センター等観光施設や宿泊施設など。
- 将来的には、観光船の全利用者（平成 24 年度、約 20 万人）の約３割（初年度は約１割）の購入を目指す（多いに越したことはない…）。
- １冊約 300 円？（うち原価約 30～40 円？、販売手数料約 50 円？）を想定。（要検討）
- 例えば（皮算用）⇒（初年度の目標）利益 220 円程度／冊×２万人＝4,400,000 円
- （将来的な目標）利益 220 円程度／冊×６万人＝13,200,000 円
- ※観光船のチケットはツアーに組み込まれている場合が多いため、ツアー客への売り込みについて要検討。

＜ハンドブック売上収益の活用について＞

（短期的）

- 安定的な海鳥のモニタリング（ケイマフリを中心に）
- 必要最低限のケイマフリ保護活動（海上デコイの作成・設置）
- 海鳥 Week 等のイベントを通して、新たなエコツアーの創出、野生動物と人との適正なルールの周知
- カモメ糞公害の洗車代の負担
- 安定的な協議会の運営
- 取り組みＰＲを通して知床海域観光のイメージＵＰ（エコツアー化）

（中長期的：収益が上がった場合に追加で）（要アイデアだし）

- 海鳥モニタリングの拡充
- ケイマフリ等の保護増殖の一部（陸上デコイの設置？モニタリング？）
- 海岸、海中清掃への一部拠出（協議会単体ではなく、複数の関係者の協力が必要）
- 会計士による協議会会計監査
- 事務局員の配置（遺産Ｃに１人配置など？）
- 地域活性化イベント、誘客にむけた幅広い取り組み
- （環境保全は柱として据えつつ、知床海域観光の質がより高く、幅が広がるように。経済的な好循環を生み出せるのが理想）

＜その他アイデア＞

●デザイン・内容：

- 表紙は特徴的に（イラストなど）
- 取組ＰＲページは、ケイマフリの赤い糸が関係者を結び付けているイメージ（裏表紙？）。
- ケイマフリが各ページを紹介。
- ウトロと羅臼で、内容の差別化をし、将来的には羅臼版の作成も働きかけられれば。（どちらの観光船にも乗りたいと思わせるような）
- 数年に一度更新。

●販売の仕掛け：

- スタンプシートページ・・・・・町内の宿泊・コンビニ・スタンド・観光船・遺産センター、自然センターなど→「協議会限定色ケイマフリ手ぬぐい」プレゼント
- 冊子掲示による割引 or 巻末にウトロクーポン券付録
- 観光船チケット割引
- 「漁協婦人部食堂」御食事代 100 円引き　or　イクラてんこ盛りサービス
- ホテル・旅館・民宿、居酒屋・お食事処でのサービス・割引
- スマホで応募　「忘れた頃に突然届く！」ウトロのアキアジ　プレゼント
- ポストカード付録　・・ウトロ郵便局協賛　限定のケイマフリポストカード「知床の動物　切手シート」とか「ケイマフリ消印」など。

●お金払ってもいいと思える要素：

・保護活動への協力意識、内容の良さ、旅行の記念、お得感、プレミア感

2.　その他

- （松永）シリエトクノートの中山さんや、絵本作家のあかしのぶこさんと意見交換を行う予定。

(6)　第 4 回事務局会議

会議名称	第 4 回事務局協議会
日　時	平成 26 年 1 月 27 日(月) 18：00～21：40
場　所	斜里町道の駅
出席者	知床海鳥研究会　福田 知床小型観光船協議会　事務局　神尾 道東観光開発㈱　大木 環境省ウトロ自然保護官事務所　松永（進行)、高橋 北海道環境財団　久保田

議事概要
＜協議会の活動の今後の方向性について＞ ・　今までやってきた取り組みをしっかりと継続していくことが大事。 ・　活動を大きく広げる必要はないと思っている。その中で、福田さんのモニタリングが安定的に担保していければよい。ただ、モニタリングのために、協議会を回していると周りから思われては本末転倒。 ・　知床スタイルの明文化など、十分に取り組めていないものを完成させる必要がある。協議会で知床スタイルの共有をしたい。 ・　外部への発信、連携を進めていきたい。 ・　補助金対応に追われる背伸びをした活動はできない。活動を広げていくには、現在の体制では難しいし、もう少し地に足を付けて、やらなければいけない部分をしっかりと押さえていきたい。その中で、みんなでやれる範囲をやっていってはどうか。 ・　関係者が、今のような形でつながっていることは非常に素晴らしいこと。 ・　海鳥調査はいい加減なものとしたくない。妥協せずにきっちり継続していきたい。 ・　会長を通じるなどして、既存の枠組みと当活動との連携に力を入れることもあり。 ・　なによりも知床スタイルの明文化を優先するべき。 ・　知床スタイルは１枚の概要版と、詳細版があってもよいのでは。 **＜平成２６年度事業計画について＞** ・　平成２６年度は補助金申請なしで、ボランタリーベースでやれる範囲でやりたい（一同賛同)。 ・　海鳥 Week は、平成２５年度と同様に、海の日を皮切りに実施してはどうか。ある程度早い段階で中身を決定し、効果的な広報を行うべき。 ・　うみどりトークは、少なくとも平成２５年度と同様に、ホテル２回、オーロラ２回で実施したい。もう少し増やしてもよい。 ・　サンセットクルーズは、定着までの間は協力ベースで行ってもよい。ただ、観光事業者の協力をもとに、できるだけお客さんが集まるように広報していきたい。 ・　缶バッジの製作については、観光関係者に対して一定の販売数引き受けの依頼も検討してはどう

か？（協議会で提案。Ｈ２５協議会時にそのような申し出もあり。）

- ケイマフリデコイの設置については、ゴジラ岩観光に残っている最後の１基を使用し、番屋に協力依頼して設置を行う。
- 海鳥調査については、オーロラのモニタリングは継続していく。専門家による調査は、環境省予算と調整の上（Ｈ２５年度並み？）、適切な範囲で実施する。
- 知床財団や自然公園財団など、知床での普及啓発や情報発信の役割を担っている若手職員を対象として、ケイマフリやウトロ海域の魅力を伝える育成事業を新たに実施してはどうか（おーろらや福田号などで）。魅力を伝える人、関わってくれる人を増やすことが大事。

＜３ヶ年の中期計画について＞

２０１４年

- 完全にボランタリーベースで、平成２５年度と同レベルの活動を行う。
- 既存のメンバーに加えて、普及啓発や魅力発信を行う核となる人の育成を図る。
- 安定した活動予算を確保する仕組み（啓発素材の作成・販売、協賛の募集など）を検討し、確立する。

２０１５年

- 安定した活動予算を確保し、それらを活用した事業を推進する。
- 海岸の清掃などを例として、漁協との連携強化を図る。

２０１６年

- 「知床の海はひとつ」をキーワードとして、ウトロ地域と羅臼地域との連携を目指す。

＜ハンドブックについて＞

- 漁業や地形などの項目はある程度分けて構成したほうが良い。
- ケイマフリが紹介するような形を採用してもよい。
- 具体的に作業を進めていき、また適宜情報共有・意見照会を行っていきたい。

＜今年度のスケジュールについて＞

- 今日の事務局会議の結果を整理して、事務局で共有する。メールで意見交換を重ね、２月の報告会等に臨む。

3.2　協働取組に係る関係者の役割および具体的実施方法の検討

本協議会が進める協働取組に際し、参加者の役割分担は確実かつ的確に決めておくことが必要となる。基本的には各参加者の専門分野（本業）の範疇で得意とする所を担当してもらうことが最も効果的であるが、協議会としても、その関係者が得意とする分野の作業の部分を積極的に取り組みの中に盛り込んで行く企画力も必要であろう。参加者が得意とする部分が持ち寄られる事で、協働取組ならではの“総合力“を発揮することができるはずである。

本協議会では海域に直接関わる漁業、観光、行政、研究者の参加者の他に 2 次的に関わってくるホテルなどの宿泊事業者、民間企業、有識者、地域の方々など、多くの様々な立場（セクション）の参加者と繋がりを持っており、今年度の取り組みの中でも実際に多くのセクションからの協力により「海鳥 Week」などを成功させることが来た。本協議会の取り組みは、むしろこれらの多種多様なセクションの参加者の存在なしには、進めることが出来ない取り組みであるとも言えるだろう。また今後もさらなる協議会関係者との具体的な協力関係の発展、拡大にむけて努力していく必要がある。

表 3-2　取り組みにおける主な役割分担の例

取り組み	取り組み内容／作業内容	担当セクション
海鳥モニタリング調査	ケイマフリの生息状況調査および海鳥センサス調査の実施	・知床海鳥研究会 ・「観光船おーろら号」
デコイ設置・撤去	ケイマフリ繁殖地でのデコイ設置および撤去作業	・知床海鳥研究会 ・ウトロ漁業協同組合 ・知床小型観光船協議会
海鳥 Week 関連	海上「海鳥出前講座」の開催支援、および開催 PR 等	・「観光船おーろら号」
	ホテルでの「海鳥出前講座」開催に伴う会場設置、宿泊客への PR 等	・知床温泉旅館協同組合
	うみどりサンセットクルージング開催に伴うチャーター船運航および、開催 PR。	・知床小型観光船協議会
	「知床の海鳥写真展」の開催に伴う、展示場所、展示パネルの提供等	・環境省
協議会運営	協議会の運営支援、会議資料の作成、企画検討等	・ﾕﾆｵﾝﾃﾞｰﾀｰｼｽﾃﾑ（民間）

役割分担という点では、もう一つ協議会自体の運営上の役割分担も重要である。実際の取り組みを進めるための舵取り役、旗振り役として協議会事務局は重要な役割を担っている。地域主導の取り組みとしてスタートした今年度の協議会運営は、事務局担当者の負担は想像以上に重いものであった事も事実である。第 1 回事務局会議の中でも事務局運営上の役割分担について協議は行われたものの、その後の実際の状況では負担の偏りなども見られ、今後の協議会

運営において、事務局の役割分担と明確化とそのために必要な人員体制など、大きな課題を残す結果となっている。

表 3-3　事務局の役割分担の協議（第 1 回事務局会議資料から抜粋）

(4) 事務局運営の役割分担

現在、事務局の役割分担が明確でない事から、早急に事務局体制を整える必要があると思います。以下、懸念事項。

・旗振り役　→　やはり事務局長として福田さんの旗振りと動きだしが必要です！
・メイル（意見）の集約ができていない。→松永さんがやってくれていますが・・。
・メイル発信者が自動的に旗振り役になってしまう今の状態は、あまり良くないと思います。→松永さんの負担増加中。

協議会事務局の役割分担（案）

担当職	概　　要	担当者
会　　長	協議会の全体を掌握し、事務局に意見する。	桑島氏
事務局長	旗振り役。動きを起こす。意見をとりまとめ、運営を統括する。協議会発信の文書、メイル本文は基本的に暫くの間は事務局長が作成する。他の者はチェック、肉付けを行いサポートする。協議会の窓口としての皆さんに周知されるためにも前面に立って頂きたいです。場面、場面での最初の動き出しを！	福田
事務局員	事務局長を補佐し、取り組みの実施に向けて、具体的な計画準備、調整、作業を主導的に行う。	神尾 大木 松永 栗林
情報担当	会員への案内や日程調整など、メイルの発信、受信に関わることを担当。案内文書文面などの作成は負担の分散のため、基本的に情報担当以外が作成。情報担当は内容をチェックして送信。	松永? 栗林?
経理担当	契約関係、支出の管理	栗林
EPO 担当	地域協働推進事業（EPO 事業）対応　（H25 年対応）	栗林
運営ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	EPO さんに運営のアドバイスを頂くのはどうか？	溝渕氏?

どういう担当が必要かも含めて検討が必要かと思います。

また事務局内の担当以外にも、何かに秀でたものをお持ちの方がいれば、是非得意な分野でご協力頂けるような担当を設置してお願いしましょう。（Web まわりが得意、デザインが得意、しゃべりが得意、写真が得意など）

表 3-4　事務局の役割分担の協議（第 4 回事務局会議資料から抜粋）

○役割分担　□

・それぞれにリーダーを選任し、スタッフのスカウト（協力依頼）
・得意な事で協議会に参加できるように。 →適材適所
・立場上の適材適所も考慮。行政の役割、観光事業者の役割、など
・誰もやりたがらない役割も重要。負担が集中しないような配慮も。
・各担当間の繋がりを大切に・・・あまり担当に拘らなくても結構です。相手を尊重しつつ協力を。
・一つの担当チームに業種、年齢層のバリエーションを。協働作業を有意義なものに。

1.常設のもの（担当チーム）

事務局（総務）	事務局長　：
	事務局スタッフ　：
	・協議会運営　～総合的な取り組み実施のけん引役（旗振り役） ・各種調整、対外対応の窓口として ・会議運営　日程調整、案内配信、議事録、レポート配信 ・H25は「地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業」EPO事業対応
Web、情報化推進担当	リーダー　：
	スタッフ　：
	・Facebook,Twitter,Blogなどインターネットサービス、アカウント取得、開設、更新 ・「ケイマフリホームページ」は環境省と協力し更新、 ・メイル配信　会議案内など会員への情報配信作業
企画・広報担当	リーダー　：
	スタッフ　：
	・ケイマフリ展示企画、PR企画、展示協力、展示品作成（ポップなど） ・グッズ製作企画（デザイン、発注、配布） ・広報企画、ネタづくり、ネタ提供（Web担当とも相互協力）
製作、実施スタッフ	どなたでも　　ぜひご協力ください
※集まって何かやるのは苦手だが部分的には協力してもよい、という方々	・デザインが得意な方　・パソコン関係が得意な方 ・物づくりが得意な方　・写真が得意な方 ・トークが上手な方　・体力に自信のある方 ・取り組みに興味がある方　・立場上、協力しなくてはならない方
会計	担当者　：
	支出の管理、収支報告

2.必要に応じて一時的に組織されるもの

海鳥Week実行委員	実行委員長　：
	企画・実施メニューの検討、開催準備、案内・広報、運営全般、 レポート（開催とりまとめ、次回への課題抽出）

3.3　ケイマフリの保護に向けた取組の実施

3.3.1　海鳥基礎調査の実施及び情報発信

今年度の海鳥基礎調査（ケイマフリ生息状況モニタリング調査、ウトロ海域の海鳥海上センサス、知床半島の海鳥繁殖状況調査）は、協議会事務局長でもある知床海鳥研究会　福田　佳弘氏　が中心となり実施された。調査結果の内容は、次年度の観光シーズンが始まる前までに、協議会等で報告される予定である。

※調査結果については、本報告書の巻末に別冊の「平成 25 年度知床半島海鳥調査結果報告書」として掲載する。

また、海域の海鳥観察情報を中心とした自然情報の発信として、知床海鳥研究会のインターネットブログ「知床の鳥と自然情報」（http://ameblo.jp/murrelet/）から随時調査時の海鳥観察状況などが発信された。

図 3-1　インターネットブログ「知床の鳥と自然情報」

3.3.2　ケイマフリ営巣地の保護活動　～デコイの設置について

今年度のケイマフリデコイの設置作業は 2 度行われた。一度目は平成 25 年 6 月 1 日に昨年と同様のトークシモイ湾の入口に水上設置型のデコイを 2 基設置したが、その後 6 月中旬の大時化に際に、デコイが流失してしまう事態に見舞われた。流失は小型観光船からの連絡で判明した。

再設置は 25 年 8 月 23 日に行われ 1 基が再度設置されたが、これも 9 月中旬の大時化の際に流失が確認され、今年度設置したデコイ 3 基は全て流失してしまう結果となった。

このことにより、残念ながら今年度実施されたケイマフリの生息状況調査の中では、ケイマフリデコイの効果検証調査が十分に出来なかった。

2 回の設置作業は設置個所の選定を知床海鳥研究会　福田　佳弘氏が担当し、作業船およびデコイ係留資材（土俵、ロープなど）はウトロ漁業協同組合に担当して頂いた。そのほか作業支援として環境省ウトロ自然保護官事務所より、アクティブレンジャー2 名も乗船した。

オホーツク海に外洋に面したウトロ周辺の断崖からなる海岸線は、海岸から急激に深くなる海底地形となっており、潮流も速く、海上デコイの設置には非常に難しい海岸環境である。一昨年度にもデコイの流失が発生しており、今年度は係留資材を強化して望んだものの、シーズンを通じてデコイを設置することは出来ず、改めてウトロ周辺のデコイ設置の難しさを痛感することとなってしまった。

次年度以降の課題としては、まず如何にしてデコイをシーズン中、海上に維持できるかという点である。時化が予想される場合は未然に撤収することや、流失を前提に、より安価な簡易デコイを開発すること、短時間に撤収・撤去が出来る係留方法の改良などが考えられる。日々のデコイの設置状況の確認は、小型観光船や漁業者による目視点検が可能であることから、まず、これらの流失防止対策の検討が急がれる。

写真 3-3　デコイ設置作業の様子（2013.8.23）

ウトロ漁協山本氏、福田事務局長の作業の様子

ウトロ自然保護官事務所の高橋氏も作業協力

設置されたデコイと見守るウトロ漁協山本氏（左）

波間に浮かぶデコイと目印のボンデン

海上設置型のデコイ

ボンデンにはウトロ漁協の小旗が揺れる

3.4　普及啓発事業の実施

本協議会の新たな取り組みとして、今年度の活動の目玉となった「海鳥 Week2013」を開催した。このイベントはケイマフリを中心とした知床の海鳥の魅力について紹介する企画を用意し、観光船利用者、ホテル宿泊者を対象とした「うみどりトーク」をはじめ、誰でも気軽に海鳥の魅力に触れられる写真展の開催、地域の方々が無料招待されたサンセットクルーズなど、開催期間の 7 月 22 日～31 日の 9 日間にわたって、ウトロ地区を中心に集中的にイベントを実施する充実したイベントとなった

観光利用者イベント内容は年度当初からアイディアが検討されていたが、第 1 回事務局会議（7 月 3 日）の中で詳細な実施計画が検討され、イベントの各企画別に役割分担を決め、それぞれが主体となって開催準備を進められた。

3.4.1　「海鳥 Week2013」開催概要

「海鳥 Week2013」の主な開催企画を　表 3-5 に示す。またイベント概要資料として、イベントポスターおよび、報道発表資料を次頁以降に示す。なお、今年度事業計画で予定されていた、「海鳥出前講座」は、海鳥 Week で開催された「うみどりトーク」に該当する。

表 3-5　「海鳥 Week2013」の企画一覧

企画名	企画内容	企画・準備担当
うみどりトーク	大型観光船「おーろら号」の知床岬コース便 2 便で船上「海鳥ミニ出前講座」を開催。またウトロ地区のホテルでナイトイベントとして 2 回のロビー出前講座を開催。	知床海鳥研究会 観光船「おーろら号」 知床小型観光船協議会 知床温泉旅館協同組合 環境省ウトロ自然保護官事務所
サンセットクルーズ	最終日 7/31 の夕刻出港の小型観光船を運航。先着 80 名限定のうち、地元の方々30 名を無料招待枠として設定。夕暮れの海を海鳥解説付きで楽しむことができる企画。	知床海鳥研究会 知床小型観光船協議会 環境省ウトロ自然保護官事務所
ケイマフリ写真展	世界遺産センター内に会場を設置し、ケイマフリの姿や生活生態、美しい知床の海を紹介する写真展を開催。	知床海鳥研究会 環境省ウトロ自然保護官事務所
バッチがもらえる アンケートの実施	うみどりトーク開催時、写真展会場でアンケート調査を実施。回答して頂いた方々には特製缶バッチプレゼント。	知床海鳥研究会 環境省ウトロ自然保護官事務所

図 3-2 「海鳥 Week2013」ポスター

「知床海鳥ＷＥＥＫ２０１３」の実施について

平成２５年７月１９日（金）
環境省ウトロ自然保護官事務所

ケイマフリをはじめとした海鳥を通して、知床の海の環境保全と適正利用を考えていく「知床海鳥ＷＥＥＫ２０１３」を7月２２日（月）～7月３１日（水）にかけて実施します。
海鳥ＷＥＥＫ期間中は、観光船やホテルでの専門家による海鳥の解説「うみどりトーク」やサンセットクルーズ、知床世界遺産センターでのケイマフリ写真展など、様々なイベントを開催します。

１　背景・目的

知床世界遺産地域の海域の保護とレクリエーション利用については、平成 22 年からケイマフリ等の海鳥の生息環境の保全と海域利用の両立を図るための検討が進められてきました。

これらの検討を踏まえて、地域の関係者が主体性をもって、海域の環境保護と地域振興の両立を図るための協働組織である知床ウトロ海域環境保全協議会が本年６月１４日に発足しました。海鳥ＷＥＥＫの実施と期間中の各種イベントの開催は、同協議会による初めての取り組みであり、本年度の目玉事業でもあります。

２　知床海鳥ＷＥＥＫとは？

ケイマフリをはじめとした海鳥を通して、知床の海や観光に関わる様々な関係者が、知床の海の環境保全と適正利用について、改めて見直し、考えていく期間です。

海鳥ＷＥＥＫ期間中は、観光船やホテルでの専門家による海鳥の解説「うみどりトーク」やサンセットクルーズ、知床世界遺産センターでの「知ってる？」ケイマフリ写真展など、様々なイベントを開催し、観光客の皆さんに対しても、知床の海の現状を知ってもらい、環境保全について考えてもらうことを目的としています。

３　期間

平成２５年７月２２日（月）～７月３１日（水）

４　開催イベント

１）うみどりトーク（７月２４日キックオフイベント）

知床の海で日々調査・研究を行っている海鳥の専門家が、観光船やホテルで、海鳥や知床の海に関する生の情報を解説します。観光客を対象とした専門家による解説は、初めての取り組みです。

①知床観光船オーロラ

日時：７月２５日（木）１０：００（出港）～１３：４５（帰港）岬航路
日時：７月２８日（日）１０：００（出港）～１３：４５（帰港）岬航路

※知床観光船利用者が対象で、観光船利用料金が必要です。

図 3-3　「海鳥 Week2013」開催概要報道発表資料（1/2）

②知床グランドホテル　北こぶし
日時：７月２４日（水）２０：３０～２１：３０
※参加無料。宿泊者以外でも自由に参加可能です。

③知床第一ホテル
日時：７月２９日（月）２０：３０～２１：３０
※参加無料。宿泊者以外でも自由に参加可能です。

２）サンセットクルーズ（フィナーレイベント）

普段は出航しない夕暮れの時間帯に出航する海鳥ＷＥＥＫ限定ツアーです。ケイマフリをはじめとする海鳥の観察とともに、夕焼けで染まる知床の海をゆっくりと味わいます。

日時：７月３１日（水）１７：４０（出港）～１８：４０（帰港）
参加費：３，０００円（乗船料）
参加人数：最大８０名（うち、ウトロ地区お住まいの方３０名は無料招待）
●問い合わせ・申し込み先
知床小型観光船協議会
TEL：0152-24-3231

３）「知ってる？」ケイマフリ写真展

絶滅危惧種であり、一般の人にほとんどなじみのない海鳥、ケイマフリ。知床ウトロ地域は、日本におけるケイマフリの数少ない繁殖地の一つであるとともに、日本一観察しやすい場所でもあります。様々な写真を通して、ケイマフリの生態の一部をご紹介します。

本写真展は、海鳥ＷＥＥＫ終了後も継続して開催します。

場所：知床世界遺産センター
期間：７月２２日（月）～８月１１日（日）
開館時間：８：３０～１７：３０
入館料：無料

●問い合わせ先
知床ウトロ海域環境保全協議会事務局
環境省ウトロ自然保護官事務所内
自然保護官：松永　曉道
TEL：0152-24-2297
FAX：0152-24-3646

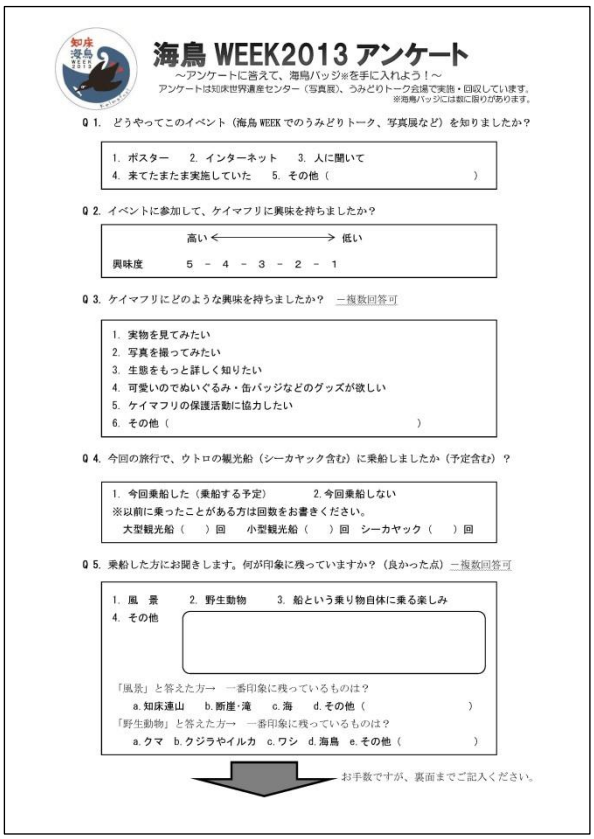
図 3-3　「海鳥 Week2013」開催概要報道発表資料（2/2）

3.4.2　開催準備の状況

「海鳥 Week2013」開催に向けて PR グッズ、およびアンケート調査票が作成された。

イベント T シャツの製作
協議会スタッフおよび、イベント運営スタッフ向けに PR 用 T シャツを製作した。イラストデザインは、イベントポスター、缶バッチと共通デザインとし、イラストデザイナーの高橋知里さん（元環境省ウトロ自然保護官事務所 AR）に依頼した。
缶バッチの製作
イベント PR 用およびアンケート回答者へのプレゼント用として、缶バッチを製作した。デザインはポスターと同様のケイマフリイラスト。円形にアレンジし“世界遺産知床”、“keimafuri”文字を追加。製作個数は 500 個でイベント中にほぼ全部が配布された。

アンケート票の作成



海鳥 WEEK2013 アンケート

～アンケートに答えて、海鳥バッジ※を手に入れよう！～
アンケートは知床世界遺産センター（写真展）、うみどりトーク会場で実施・回収しています。
※海鳥バッジには数に限りがあります。

Q 1. どうやってこのイベント（海鳥 WEEK でのうみどりトーク、写真展など）を知りましたか？

1. ポスター　2. インターネット　3. 人に聞いて
4. 来てたまたま実施していた　5. その他（　　）

Q 2. イベントに参加して、ケイマフリに興味を持ちましたか？

高い ←――――→ 低い
興味度　5 － 4 － 3 － 2 － 1

Q 3. ケイマフリにどのような興味を持ちましたか？ ―複数回答可

1. 実物を見てみたい
2. 写真を撮ってみたい
3. 生態をもっと詳しく知りたい
4. 可愛いのでぬいぐるみ・缶バッジなどのグッズが欲しい
5. ケイマフリの保護活動に協力したい
6. その他（　　）

Q 4. 今回の旅行で、ウトロの観光船（シーカヤック含む）に乗船しましたか（予定含む）？

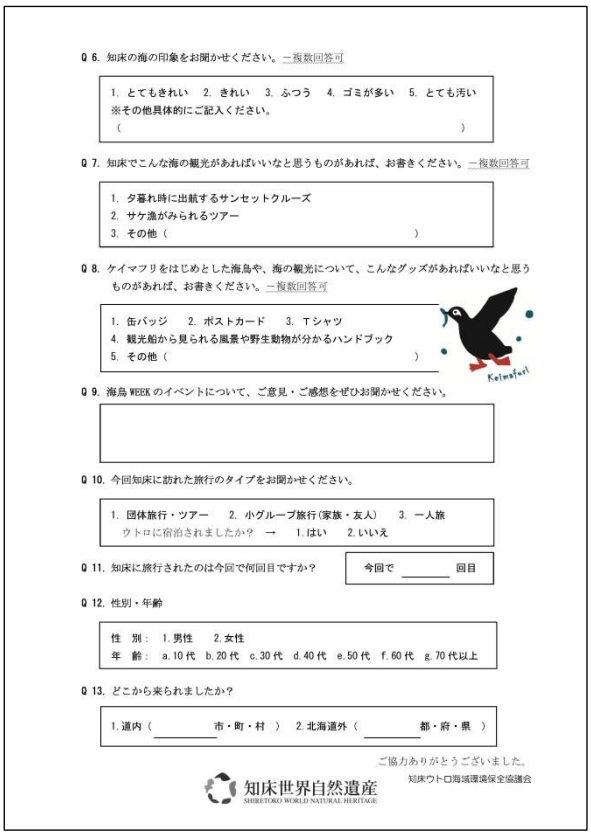
1. 今回乗船した（乗船する予定）　2. 今回乗船しない
※以前に乗ったことがある方は回数をお書きください。
大型観光船（　）回　小型観光船（　）回　シーカヤック（　）回

Q 5. 乗船した方にお聞きします。何が印象に残っていますか？（良かった点）―複数回答可

1. 風　景　2. 野生動物　3. 船という乗り物自体に乗る楽しみ
4. その他

「風景」と答えた方→　一番印象に残っているものは？
a. 知床連山　b. 断崖・滝　c. 海　d. その他（　　）
「野生動物」と答えた方→　一番印象に残っているものは？
a. クマ　b. クジラやイルカ　c. ワシ　d. 海鳥　e. その他（　　）

お手数ですが、裏面までご記入ください。



Q 6. 知床の海の印象をお聞かせください。―複数回答可

1. とてもきれい　2. きれい　3. ふつう　4. ゴミが多い　5. とても汚い
※その他具体的にご記入ください。
（　　）

Q 7. 知床でこんな海の観光があればいいなと思うものがあれば、お書きください。―複数回答可

1. 夕暮れ時に出航するサンセットクルーズ
2. サケ漁がみられるツアー
3. その他（　　）

Q 8. ケイマフリをはじめとした海鳥や、海の観光について、こんなグッズがあればいいなと思うものがあれば、お書きください。―複数回答可

1. 缶バッジ　2. ポストカード　3. Tシャツ
4. 観光船から見られる風景や野生動物が分かるハンドブック
5. その他（　　）

Q 9. 海鳥 WEEK のイベントについて、ご意見・ご感想をぜひお聞かせください。

Q 10. 今回知床に訪れた旅行のタイプをお聞かせください。

1. 団体旅行・ツアー　2. 小グループ旅行（家族・友人）　3. 一人旅
ウトロに宿泊されましたか？ → 1. はい　2. いいえ

Q 11. 知床に旅行されたのは今回で何回目ですか？　今回で＿＿＿回目

Q 12. 性別・年齢

性　別：1. 男性　2. 女性
年　齢：a. 10 代　b. 20 代　c. 30 代　d. 40 代　e. 50 代　f. 60 代　g. 70 代以上

Q 13. どこから来られましたか？

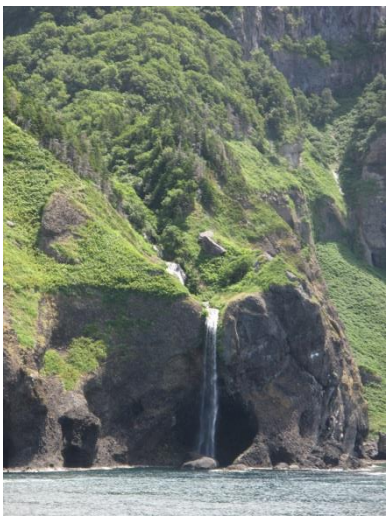
1. 道内（＿＿＿市・町・村）　2. 北海道外（＿＿＿都・府・県）

ご協力ありがとうございました。
知床ウトロ海域環境保全協議会
知床世界自然遺産 SHIRETOKO WORLD NATURAL HERITAGE

利用者アンケートは、イベント期間中の各イベント会場で配布された。平成 24 年度に環境省事業で実施された利用動向調査票を参考に、内容をケイマフリに絞り A4 用紙で表裏 2 ページのアンケート票を作成した。作成は環境省ウトロ自然保護官事務所が中心となって行われた。

3.4.3　イベント企画の実施状況

「海鳥 Week2013」で企画された各種イベントの実施状況を以下に示す。

おーろら号での船上「うみどりトーク」の実施
大型観光船「おーろら号」での船上「うみどりトーク」開催の様子
開催運航便：平成 25 年 7 月 25 日（木）、28 日（日）10：00 出港の知床岬コース便
7 月 25 日、28 日の両日の 10：00 時出港の大型観光船「おーろら号」（道東観光開発㈱）知床岬コース便にて、船上「うみどりトーク」を開催した。知床の海鳥およびケイマフリ繁殖地を船上から説明し、臨場感に富んだ「うみどりトーク」が展開された。解説者は知床海鳥研究会（協議会事務局長）福田氏、アシスタントは上川自然保護官事務所　松永氏。乗船客のコントロールおよび船内放送による開催案内など「おーろら号」スタッフの皆様に協力を頂いた。好天にも恵まれ、乗船された利用者は楽しまれた様子。参加者数は 1 便あたりおよそ 30 名～40 名程度であった。 

ホテルでの「うみどりトーク」の実施

知床第一ホテル、知床グランドホテルでの「うみどりトーク」開催の様子

開催日：平成 25 年 7 月 24 日（水）　知床グランドホテル 20:30～21:30
　　平成 25 年 7 月 29 日（月）　知床第一ホテル 20:30～21:30

うみどりトークはウトロ地区のホテルでも開催された。宿泊客が夕食後のくつろぎタイムに気軽に参加できるような開催時間の設定と会場の雰囲気づくりに配慮した。またホテルのフロントスタッフの皆さんもケイマフリ T シャツを着用してイベントの盛り上げに協力して頂いた。トーク内容も海鳥に限らず、イルカ、クジラなどの他の海生動物、ヒグマやエゾシカ、シマフクロウ、オジロワシなどの陸上哺乳類、希少猛禽類などの話も織り交ぜ、楽しんで聞くことが出来るよう工夫した。アンケートでもらえる缶バッチは好評。参加者はグランドホテル（7/24）約 35 名、知床第一ホテル（7/29）約 30 名であった。

サンセットクルーズの実施

小型観光船による「うみどりトーク」開催の様子

開催運航便：平成 25 年 7 月 31 日（水）17：40 出港の特別便（ゴジラ岩観光が運航）

イベント最終日となった7月31日の夕刻に開催されたサンセットクルーズでは町内の無料招待者を含む 30 名の乗船者が参加した。航行中は知床海鳥研究会（協議会事務局長）福田氏による知床の海鳥の興味深い話や、実際の海鳥繁殖地を間近で見ながら解説を行うなどの試みを行った。トークアシスタントは上川自然保護官事務所　松永氏、笠井さん、ゴジラ岩観光の神尾氏が担当。そのほか乗船客のコントロールおよび船内放送によるガイドなど、ゴジラ岩観光のスタッフの皆様に協力を頂いた。好天にも恵まれ、夕暮れのおだやかな海を乗船された利用者は楽しまれた様子。

「知ってる？」ケイマフリ写真展

写真展会場の様子（世界遺産センター）

開催期間：平成 25 年 7 月 22 日（月）～8 月 11 日（日）　世界遺産センターにて

知床観光利用者の訪問率の高い世界遺産センターにて、ケイマフリを中心に知床の海鳥を紹介する「知ってる？」ケイマフリ写真展を開催した。館内の通常展示と合わせて、利用者にとっては充実した企画展示が提供出来たものと思われる。来場者が多く、知床のケイマフリの普及効果は非常に高かったと考えられる。ここでもアンケートでもらえる缶バッチは好評で、アンケートの回収率に大きく貢献しているようだ。写真展の開催スペース、展示パネルなどの貸与、展示品の配置アレンジ、ポップの製作などウトロ自然保護官事務所の皆様には多大な協力を頂いた。

3.4.4　海鳥 Week アンケートの実施

今年度の海鳥 Week 開催時には、うみどりトーク、サンセットクルーズ、「知ってる？」ケイマフリ写真展、の各イベント開催会場でアンケート調査を実施した。アンケート票は今回の海鳥 Week 用に、過去に実施した利用者動向調査の調査票を参考に新たに作成された。アンケート配布方法および缶バッチの受け渡し方法は、写真展についてはアンケート票の設置配布で、希望者は自由にアンケートに答えてもらい、記入したはアンケート票を遺産センターの案内窓口に提出すると、缶バッチがもらえる仕組みとした。その他のうみどりトーク、サンセットクルージングでは、イベント終了後の直接配布およびその場での記入協力をお願いし、アンケート票回収時に缶バッチを手渡した。

アンケート配布目標数は特に設定せず、うみどりトーク、サンセットクルージングでは参加者全員に配布を行い、写真展のアンケート票設置では、残りが少なくなった場合に随時補充するようにした。アンケートの回収数は、うみどりトークで 94 票、写真展で 375 票、合計で 469 票の回答を得ることができた。

次頁以降にアンケート票を示す。

写真 3-4　アンケート票の配布状況（写真展会場）

海鳥 WEEK2013 アンケート

～アンケートに答えて、海鳥バッジ※を手に入れよう！～

アンケートは知床世界遺産センター（写真展）、うみどりトーク会場で実施・回収しています。

※海鳥バッジには数に限りがあります。

Q 1. どうやってこのイベント（海鳥 WEEK でのうみどりトーク、写真展など）を知りましたか？

1. ポスター　2. インターネット　3. 人に聞いて
4. 来てたまたま実施していた　5. その他（　　）

Q 2. イベントに参加して、ケイマフリに興味を持ちましたか？

高い ←――――――→ 低い

興味度　5 － 4 － 3 － 2 － 1

Q 3. ケイマフリにどのような興味を持ちましたか？　ー複数回答可

1. 実物を見てみたい
2. 写真を撮ってみたい
3. 生態をもっと詳しく知りたい
4. 可愛いのでぬいぐるみ・缶バッジなどのグッズが欲しい
5. ケイマフリの保護活動に協力したい
6. その他（　　）

Q 4. 今回の旅行で、ウトロの観光船（シーカヤック含む）に乗船しましたか（予定含む）？

1. 今回乗船した（乗船する予定）　2. 今回乗船しない

※以前に乗ったことがある方は回数をお書きください。

大型観光船（　）回　小型観光船（　）回　シーカヤック（　）回

Q 5. 乗船した方にお聞きします。何が印象に残っていますか？（良かった点）ー複数回答可

1. 風　景　2. 野生動物　3. 船という乗り物自体に乗る楽しみ
4. その他

「風景」と答えた方→　一番印象に残っているものは？

a. 知床連山　b. 断崖・滝　c. 海　d. その他（　　）

「野生動物」と答えた方→　一番印象に残っているものは？

a. クマ　b. クジラやイルカ　c. ワシ　d. 海鳥　e. その他（　　）

お手数ですが、裏面までご記入ください。

アンケート（表面）

Q 6. 知床の海の印象をお聞かせください。－複数回答可

1. とてもきれい　2. きれい　3. ふつう　4. ゴミが多い　5. とても汚い
※その他具体的にご記入ください。
（　　）

Q 7. 知床でこんな海の観光があればいいなと思うものがあれば、お書きください。－複数回答可

1. 夕暮れ時に出航するサンセットクルーズ
2. サケ漁がみられるツアー
3. その他（　　）

Q 8. ケイマフリをはじめとした海鳥や、海の観光について、こんなグッズがあればいいなと思うものがあれば、お書きください。－複数回答可

1. 缶バッジ　2. ポストカード　3. Ｔシャツ
4. 観光船から見られる風景や野生動物が分かるハンドブック
5. その他（　　）

Q 9. 海鳥 WEEK のイベントについて、ご意見・ご感想をぜひお聞かせください。

Q 10. 今回知床に訪れた旅行のタイプをお聞かせください。

1. 団体旅行・ツアー　2. 小グループ旅行(家族・友人)　3. 一人旅
ウトロに宿泊されましたか？　→　1. はい　2. いいえ

Q 11. 知床に旅行されたのは今回で何回目ですか？　今回で＿＿＿＿回目

Q 12. 性別・年齢

性　別：　1. 男性　2. 女性
年　齢：　a. 10 代　b. 20 代　c. 30 代　d. 40 代　e. 50 代　f. 60 代　g. 70 代以上

Q 13. どこから来られましたか？

1. 道内（＿＿＿＿市・町・村）　2. 北海道外（＿＿＿＿都・府・県）

ご協力ありがとうございました。

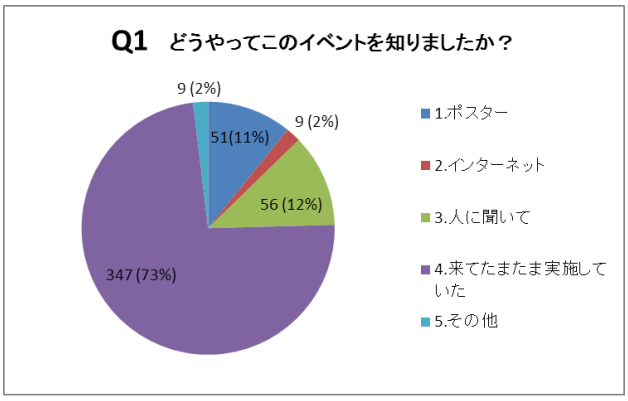
知床ウトロ海域環境保全協議会

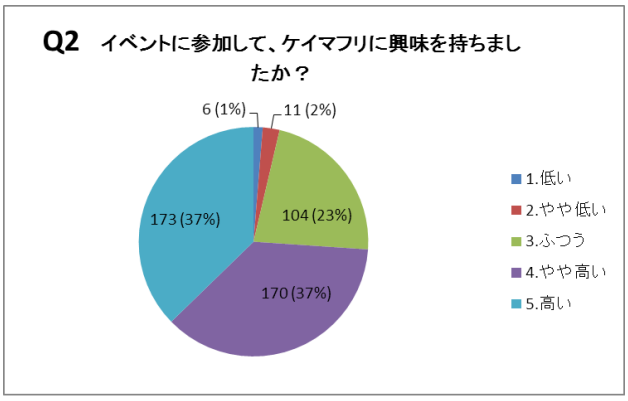
知床世界自然遺産
SHIRETOKO WORLD NATURAL HERITAGE

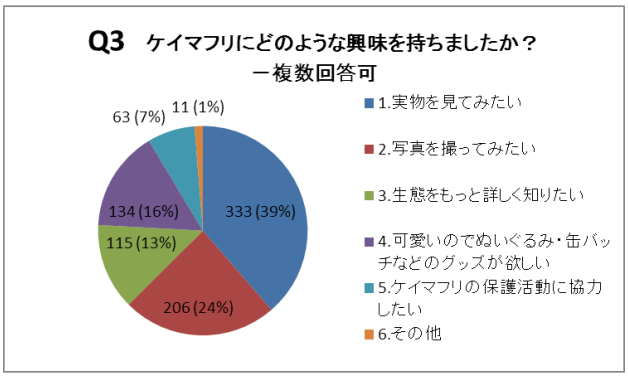
アンケート（裏面）

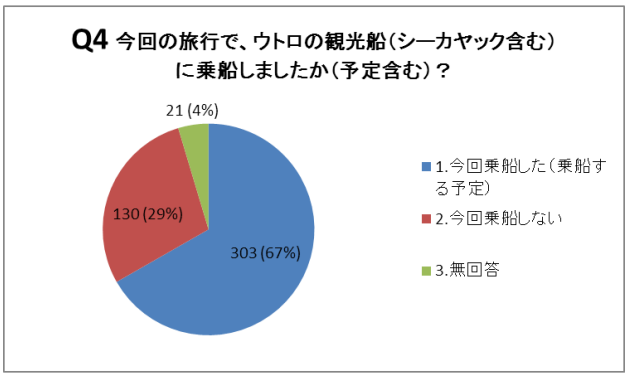
3.4.5　アンケート結果の分析

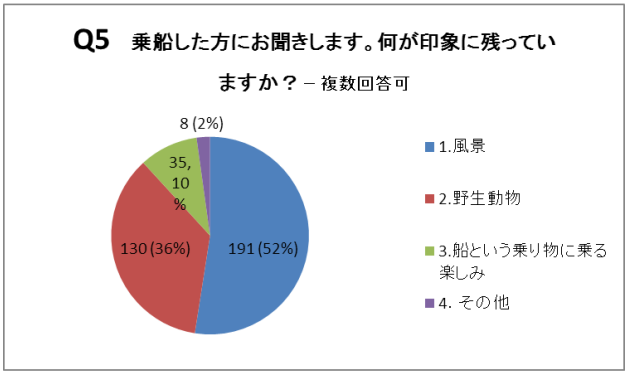
回収されたアンケート票は、環境省ウトロ自然保護官事務所の協力により集計され、協議会会員へ報告された。以下に全体集計結果をグラフ示す。

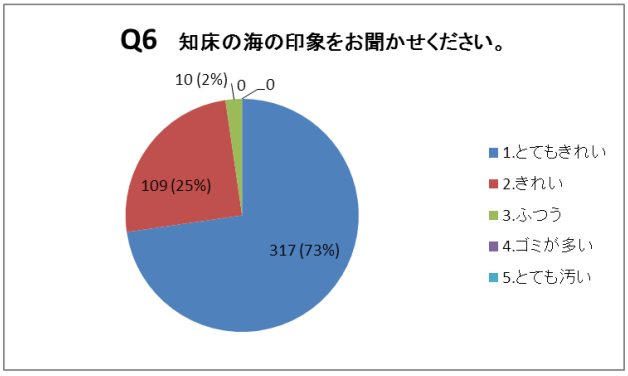


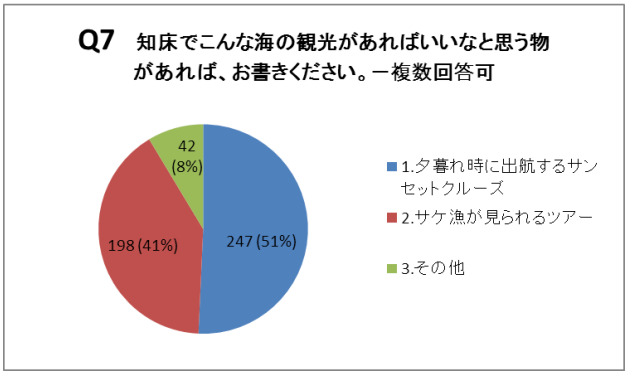


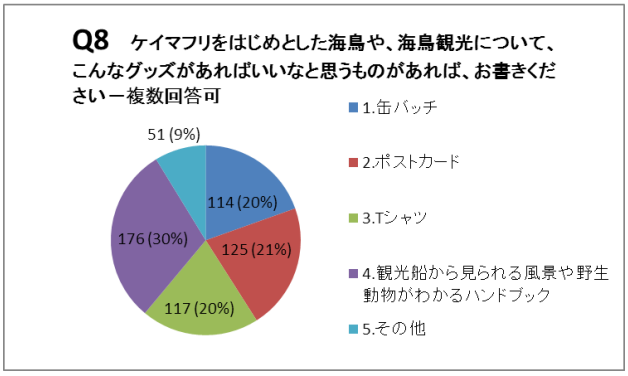


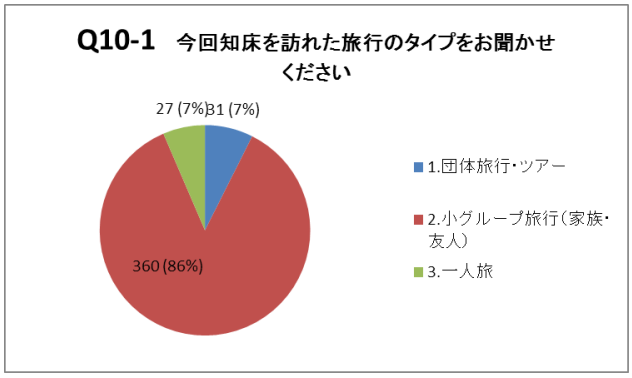


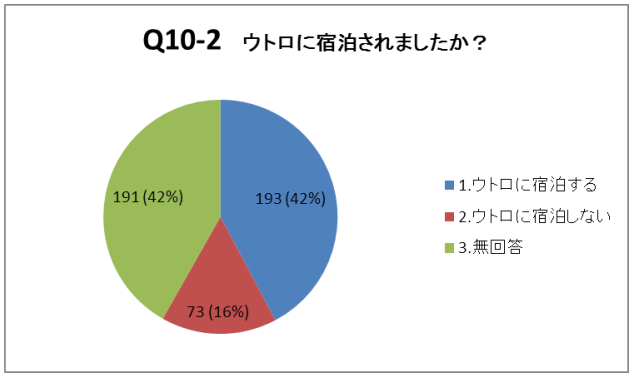


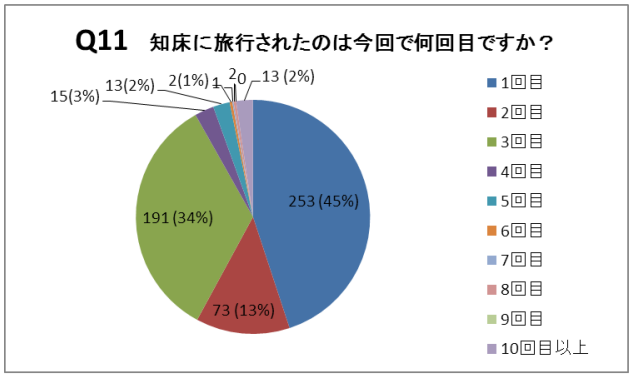


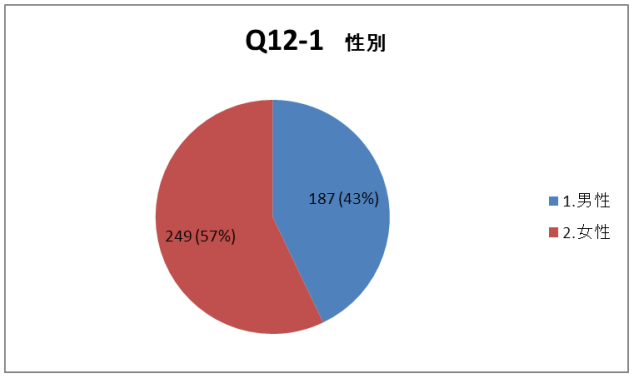


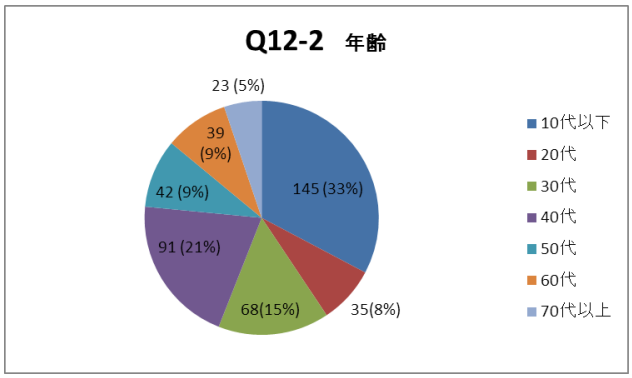


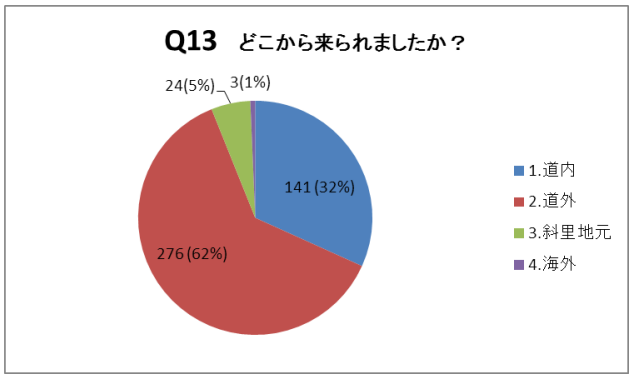












アンケート結果からは、今後の普及・PR 活動の参考になる結果がいくつも読み取れるため、次年度以降の参考にしていくこととする。またアンケート票に自由に記述できるコメントには、取り組みを行う者にとっては嬉しいメッセージも多く見られるため、協議会関係者には十分にアンケート結果報告を行う必要がある。

3.5　「知床スタイル」の仕組みの確立に向けた検討

今年度の本協議会の取り組みでは、本協議会が考える知床の海生動物と人間の海域利用の適切な関係づくりによる自然環境保護の形を「知床スタイル」と名付けて推進していく事となっている。これまでに行われてきた議論と関係者の合意形成によって構築され始めた、ウトロにおけるケイマフリ保護の仕組みをアピールするため、対外的な説明資料として「知床スタイルの明文化」作業を行った。今年度は協議会として「知床スタイル」の定義の確立まで、明文化作業を進める予定であったが、検討案（第 2 案）までの作成検討は進められたがが、協議会としての合意形成にまでは至らなかった。今後も細部の協議は続けるものとし、出来るだけ早期に対外的に発表出来るように議論を進めて行く必要がある。またインターネットなどでの公開など、も早期に実現したいところである。

以下に「知床スタイル」の検討案（第 2 案）を示す。

「知床スタイル」とは？
～海に関わる人・産業・自然・野生動物の良い関係を目指す～

前文

知床半島斜里町は、世界自然遺産登録地域として、また古くから国立公園として多くの人々に親しまれてきた知床半島の西側に位置し、半島の東側の羅臼町とともに知床半島の玄関口として知られている町です。知床半島の中央部に位置するウトロ地区には、多くの宿泊施設が立ち並び、知床自然センターや世界遺産センターなどの観光拠点となる施設があります。また、観光船の発着地として観光シーズンには多くの人が集まります。またウトロは地域産業の主軸となる漁業の拠点であり、さけ・ます定置網漁が半島沿岸で盛んに行われています。

知床に生きる人々は、これまで豊かな知床の自然を守り続けてきました。豊かな知床の自然こそが私たちの大切な財産であること、自然との共存は人々の生活と地域の発展に欠いてはならない事を先人たちに教えられ、また次の世代へ伝え受け継がれています。

時代が変わっても、知床の豊かな自然環境と人々の暮らしを次の世代へ引き渡していくことが、知床に住む我々の使命です。知床を訪れる訪問者の皆様にも協力して頂き、共にこの使命を分かち合っていただきたいと思います。

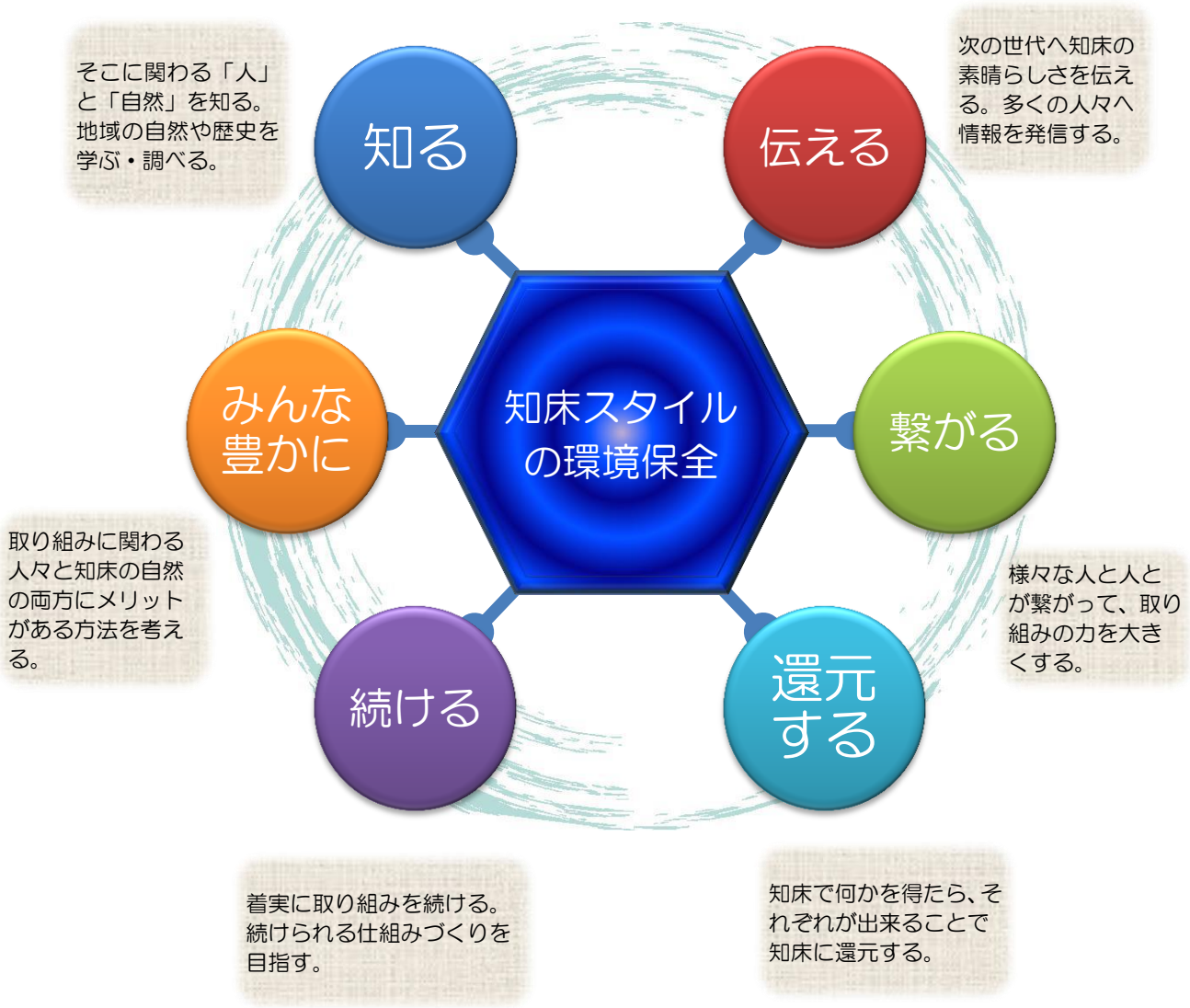
次の世代の方々が将来知床半島を訪れた時に、皆様が感じた感動と同じ、またそれ以上の感動が味わえる知床になっているように、共にこの「知床」を守り、育て、伝えていきましょう。

～「知床スタイル」の環境保全活動～

知床半島の豊な自然が守られていくことは、「魅力ある知床」であり続けるための生命線です。豊かな知床の自然の中で、野生動物と人々が豊かに生活している。この状態が高いレベルで維持されていく事が理想です。自然も人間もおおらかで豊かに。　“自粛、制限、管理、規制、禁止”といった言葉によって窮屈な思いをしなくとも、豊かな自然が守られていく・・・・

そんな欲張りな環境保全の考え方が「知床スタイル」です。

3.5.1　「知床スタイル」を構成する６つのキーワード



知床スタイルの環境保全

知る
そこに関わる「人」と「自然」を知る。
地域の自然や歴史を学ぶ・調べる。

伝える
次の世代へ知床の素晴らしさを伝える。多くの人々へ情報を発信する。

繋がる
様々な人と人とが繋がって、取り組みの力を大きくする。

還元する
知床で何かを得たら、それぞれが出来ることで知床に還元する。

続ける
着実に取り組みを続ける。
続けられる仕組みづくりを目指す。

みんな豊かに
取り組みに関わる人々と知床の自然の両方にメリットがある方法を考える。

知床スタイルの環境保全

- **知る**　そこに関わる「人」と「自然」を知る。地域の自然や歴史を学ぶ・調べる。
- **伝える**　次の世代へ知床の素晴らしさを伝える。多くの人々へ情報を発信する。
- **繋がる**　様々な人と人とが繋がって、取り組みの力を大きくする。
- **還元する**　知床で何かを得たら、それぞれが出来ることで知床に還元する。
- **続ける**　着実に取り組みを続ける。続けられる仕組みづくりを目指す。
- **みんな豊かに**　取り組みに関わる人々と知床の自然の両方にメリットがある方法を考える。

3.5.2　「知床スタイル」を構成する６つのキーワード・・・例えばこんなこと

知る

●人々を知る

知床に関わる立場の違う人々のそれぞれの考え方や状況を知る（理解する）必要があります。地域の人々に加え、訪れる観光利用者もこの関係者に含まれます。

●自然環境や野生動物について深く理解する

誰にも気づかれずに数を減らしてしまった野生動植物や急激に増えてしまったエゾシカなど、現在の知床半島を取り巻く自然について、正しく、詳しく知る必要があります。また多くの野生動植物へ関心を持ちましょう。今まで見過ごしていた生き物のドラマに感動し、時には生き物たちからの危険信号に気付くこともあるはずです。

●何をしなければならないか？どうすれば良いか知る（学ぶ）

知床にとってより良い形を考える時に、客観的に知床に意見できる様々な分野の学識者や、自然生態系や野生動物に詳しい研究者、また地域に永く住む「地域のベテラン」の意見に耳を傾けましょう。

伝える

●知床半島の自然を次の世代に継承

地域の大切な財産である知床の自然を伝えて行きましょう。なぜ知床は自然が豊かなのか？どのように守られてきたか？現在どんな課題があるか？環境学習への協力や若手（担い手）の育成機会の提供などを通じて、地域へ知床の素晴らしさ、現状、課題を伝えましょう。

●観光利用者への情報提供

見る、聞く、感じる・・観光利用者は充実した旅に期待して知床へやってきます。正しい情報はもちろん、ここでしか聞けない話などに心動かされます。またインターネットなどで事前に情報を得ているからこそ楽しめる場合や、逆にその場で知ることが出来たから感動できる情報もあるはずです。観光利用者は旅から戻られて「知床良かったよ」とお話して頂ければ、プチ観光親善大使やプチ自然解説員になってくれるのです。正しい情報と有意義な情報、旅を豊かにする情報を提供しましょう。

●「知床スタイル」の取り組みをアピール

人と自然の良い関係づくりを目指す「知床スタイル」の取り組み自体も誇りを持ってアピールできる知床の良さの一つです。それぞれの立場で出来る事を持ち寄ることで皆が豊かに。取り組みの輪を広げましょう。

繋がる

●異業種間の連携・協働、地域の繋がりを強化

「この部分では理解し合いたいね。知床だからね・・」利害関係のある繋がりにくい立場が違う人が繋がるから強いという事もあるはずです。繋がれるためにはお互いにメリットが無ければ繋がれません。どういう繋がり方が出来るか？どんなメリットが生まれるか？理解し合える部分を見つけましょう。

●学識者、研究者、専門家、行政機関、を身近に

幸いなことに「知床」にはたくさんの科学者や研究者が集まります。地域の中にも経験に優れた有識者や専門家（プロ）が数多く存在します。知床は「人」にも恵まれた地域と言えます。行政機関との連携も重要です。時には牽引力として、時には後押ししてくれる存在です。知床に関わる行政機関にも「知床」を抱えている誇りと責任感があるはずです。地域の人々とこれらの人々の距離が近いのが「知床スタイル」です。

●人と人との繋がりから生まれる豊かさ

身近に存在していても、きっかけが無いとなかなか人と人とが繋がる機会は少ないものです。色々な人と出会い繋がる事で新たなアイディアや力が生まれる可能性があります。また発生しがちな問題の未然防止や軽減も期待できます。多くの人と繋がって豊かな「知床コミュニティ」を築きましょう。

還元する

●知床で得たものを知床に

知床では数多くの調査や研究が行われています。知床で得たノウハウや研究成果はぜひ知床に還元して頂きましょう。今後も知床が有効な調査や研究フィールドであるように、また地域の方々への感謝の気持ちを忘れずに。

●知床の自然の恩恵を受ける者として感謝の気持ちを

知床に関わる多くの方々が様々な形で知床の恩恵を受けています。それぞれが将来の知床のために出来る事を考え、知床に還元しましょう。

●観光利用者も「知床」への感謝の気持ちを

知床を訪れて楽しい旅をされた方には、知床の自然に感謝したい気持ちが生まれます。「ゴミを拾てない」「身勝手な行動はしない」などのルールを守り、良い旅の思い出のままに“あなたの記憶の中の知床”を守り続けてください。いつか「知床は良い所だったよ」と誰かにお話することも、巡り巡って知床への恩返しの一つとなるはずです。

続ける

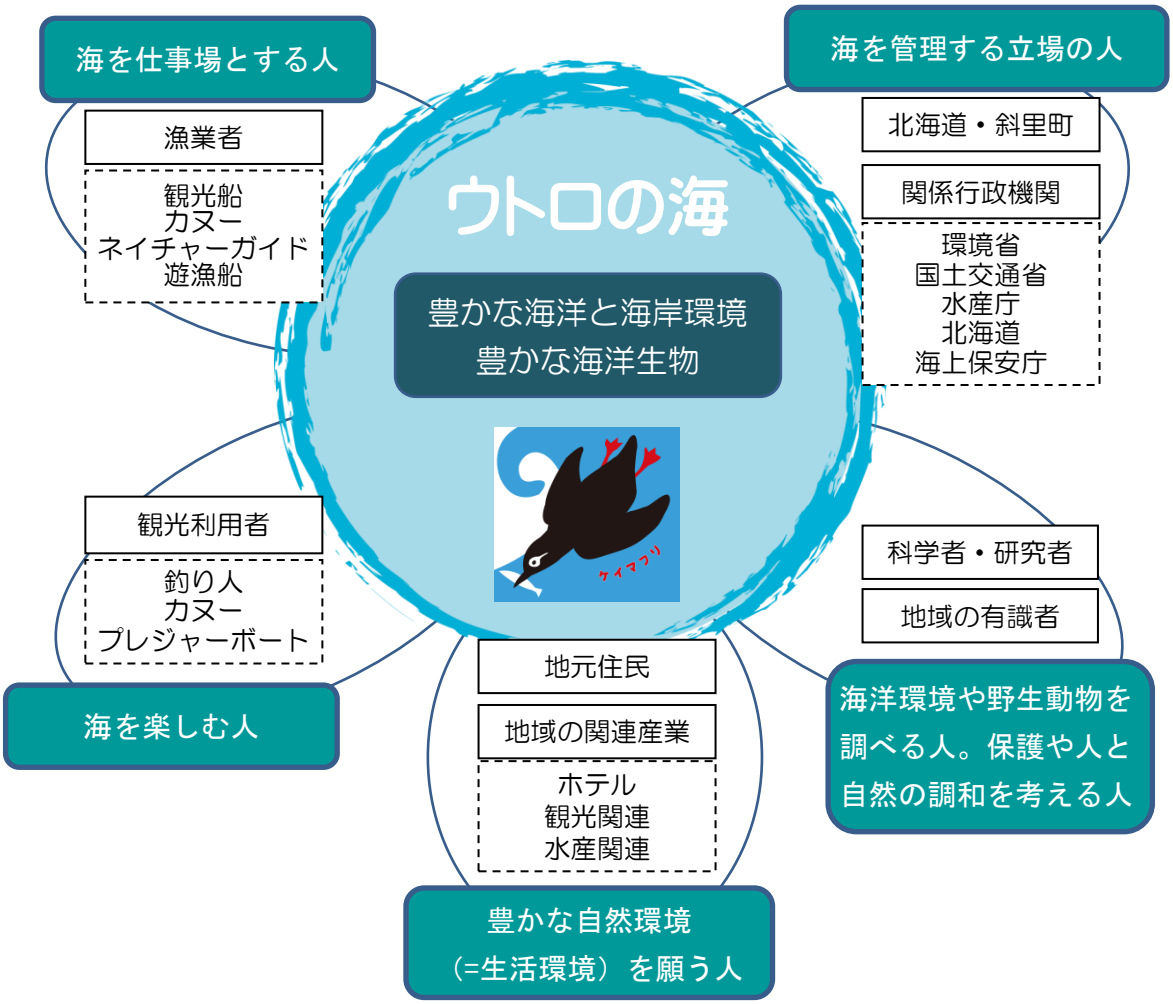
●取り組みはコツコツと
自然環境保全、野生動植物の保護活動は長期にわたる取り組みの継続があってはじめて実現されます。失うには時間が掛かりませんが、取り戻すには何倍もの時間が必要なのです。野生動植物の生態などは短期間の観察では絶対に解り得ないものです。取り組みの必要性を訴え、理解を得ながら、長く続けられる方法で着実に取り組みが進められる方法を模索します。
●続けることで評価され、理解され、協力も得られる
長く続けてデータが蓄積されるからこそ評価される場合が多いです。また定期的に成果を発信し伝える事で理解され、協力も得られるものです。
●保護の取り組みが継続できる仕組みづくりを目指す
自然環境保全、野生動植物の保護の取り組みにはもちろん資金も必要です。活動を支える力が必要です。取り組み活動の地道な努力が評価され、そして支援される・・・そんな仕組みづくりも必要です。支援者にもメリットがある「知床スタイル」ならではの支援の形を目指します。

みんな豊かに

●規制に頼らない自然保護のカタチでみんな豊かになる
「規制による保全・保護・回避」で人間を排除することによる保護の進め方が知床にフィットするのでしょうか？人間も自然も両方が「豊かになる」自然保護のあり方、自然環境利用のあり方、そのバランス点を目指します。
●メリットがあるから参加できる保護の取り組み
自然を相手に生活をする人々にとって保護の取り組みに関わることと「豊かになる」ことは、相反する事のように見えます。しかし保護の取り組みをすることが将来の豊かさに繋がることや、現在ある資源の価値（観光地としての価値、漁業で獲れる海産物の価値）が上がり「得をする」可能性があります。もちろん野生動植物も保護されて見守られ、安心して暮らせます。観光利用者ももっと感動できるかもしれません。「みんなが得をする」、「みんなが豊かになる」事を考えましょう。
●保護の取り組みを支援する事で豊かになる
知床は世界自然遺産地域ですから世界の財産です。他地域からの支援は世界の財産に貢献することを意味します。行政や企業からのサポートは知床の自然環境の保全、野生動植物の保護を支える大きな力です。企業からの支援はブランドイメージの向上や、社会貢献活動として広くアピールできるはずです。知床の将来を担っているという誇りをぜひ感じてください。

3.5.3　「知床スタイル」による環境保全　～人と自然の良い関係

例）ケイマフリの保護と持続的な人々の海域利用を目指す、「知床ウトロ海域環境保全協議会」の取り組み。



3.5.4　皆が豊かになる（得をする）Win－Win－Win の関係

ケイマフリの保護を進めると皆にメリットがある？

なぜケイマフリが生息しているか？	生息数を減らさないためには？	ということは・・	皆にメリット	どうして？
豊富な餌資源（小魚）を育む海がある	餌となる小魚が沢山いる海にしよう。海を壊さない。	小魚を餌とする大きな魚や他の海洋生物も集まってくる。小魚の餌となるプランクトンも豊富ということ。	ケイマフリ	餌が豊富で良い環境
			漁業者	魚がたくさん獲れる。持続的な漁業を営むことが出来る。
			他の海の生物	ケイマフリ以外の生き物にとっても良い環境。
営巣環境に適した断崖がある。	営巣している断崖周辺には近づかないようにしよう。	ケイマフリの営巣環境が守られる	ケイマフリ	安心して繁殖できる
			観光客・住民	知床の価値が守られる
		観光船は一部の断崖を近くで見せることが出来なくなる！ デメリット？	観光船にもメリット！	・野生動物の保護に協力している観光船として価値が上がる。 ・新しい見せ方やアイディアを考えるきっかけとなった。
			観光客にもメリット！	・観光船のガイド内容が充実。 ・自然に配慮する良い観光船に乗れた♪
ウトロ周辺はケイマフリが生息出来る条件を備えた貴重な場所	広く皆さんに知ってもらうべき。 知ってもらう事で守ることが出来る！	知床にはこんなに希少な海鳥がいる事を紹介しよう！	観光利用者	「知らなかった！見てみたい！」ちょっと得した気分♪
			ホテル・民宿	お客さんが喜んでくれた♪
			住民	知床の実力を紹介出来て嬉しい♪

3.5.5　協働取り組み自体にも様々なメリットが期待できる。

ケイマフリの保護活動、それ自体にも色々なメリットがある

保全活動	実施主体・協力者	皆のメリット	どんなメリット？	こんなメリットも
ケイマフリ デコイを設置	環境省 研究者 ウトロ漁協 観光船	ケイマフリ	繁殖地として使えそう！	
		環境省	希少野生動物が増えてきた！	海域関係者の協働によって立場の違う方々との距離が縮まった！意外な好影響も期待できそう。
		ウトロ漁協	協力している事をアピールできる。	
		観光船	ガイドの中でも紹介出来るかも？	
ケイマフリ 生息状況調査	行政 専門家 ボランティア 漁業者や観光船も協力	ケイマフリ	見守られている。変化に気付いてもらえる。	
		科学者・研究者	研究成果が保護につながる。	
		漁業者	協力している事をアピールできる。	漁業に影響する海の変化に気付いてもらえるかも。
		観光船	ガイドの中でも最新の情報を紹介出来るかも？	乗組員の海鳥への関心が高まってきた。
観光船による 海域観察	大型観光船 環境省がデータ分析協力	ケイマフリ	見守られている。変化に気付いてもらえる。	
		大型観光船	季節ごとの海洋生物の出現状況などガイドに活用できるデータが蓄積される。	知床の環境保全への貢献として良いアピールが出来る。
		観光船利用者	最新の海洋生物の情報が聴ける。	環境保全に配慮している良い観光船に乗れた♪
		環境省	海洋生物の生息状況や変化についてデータが収集できる。	ほぼ毎日の観察がされている“海を見守る目”という「巡視」的な役割も果たすことになる。
海鳥 Week などの啓蒙活動	協議会を主体として地域協働によるイベント開催	ケイマフリ	広く知ってもらう事で保護の必要性が認知される。	他地域の生息個体や他の種類の生き物についての関心を高めることが出来る。
		観光客	海鳥について詳しく知ることが出来る。楽しめる。	他の人にケイマフリの事や、知床の人々の自然に対する意識の高さを伝えてくれる。
		漁業者	協力する事で知床の漁業もＰＲできる。知床品質！ブランド力向上！	漁業＋αとして地域の活性化に繋がる。
		観光船 ホテル・民宿	お客さんの満足度が上がる。	事業者として自然環境への貢献活動としてアピールできる。 従業員が解説できる知識を持つことでサービスの質向上が期待できる。
		斜里町	地域のイベントとして知床の PR に繋がる	地域協働の事例として期待できる。
協議会が組織され活動の主体となる	海域・観光に係わる行政および地域の方々、科学者、研究者など多種多様。	ケイマフリ	見守ってくれる存在がいる	
		協議会参加者	保全活動に関わっている事を本業分野のアピールポイントとすることができる。	普段話すことが少なかった異業種の人々と関わる機会が増えた。 今までなら大きな問題になった事が問題になる前に解決できた。
		行政機関	規制を作らなくて良い。新たな懸念の発生抑止効果も期待できる。行政の負担が軽減される。 ↓ 行政のコストダウン。より効果的な予算の投入が可能	町おこしや環境学習などへの展開にも期待できる。 地域からの意見を吸い上げやすくなる。海に関連する事業を進めたいときの受け皿が出来た。
		科学者・研究者	これまでの成果を還元する事ができる。	新しい知見・データを得ることが出来る。
		地域住民	良い地元の自然環境が保たれる。	地域のコミュニティとしての機能が期待できる。「私も参加してみたい。楽しそう♪」

4　協働取組のプロセス等の分析

本モデル実証事業は、知床半島ウトロ周辺に生息するケイマフリの保護に向けた取り組みを、地域の関係者（行政、専門家、漁業者、観光船業者、宿泊関連業者等）が適切な役割分担の下、協働して行うことを通じ、知床世界自然遺産地域としてふさわしい、持続的な海域の利用と野生生物等の保護を協働して行う仕組みとして、「知床スタイル」の確立を目指すものである。

この目標の達成に向けて、知床ウトロ海域環境保全協議会は以下の事業に取り組むことにしており、この章では、モデル実証事業の個別事業及び事業全般について、協働取組のプロセス分析を行うものである。

なお、本モデル実証事業以前の協働関係については、「2.1　協議会の設立経緯」をご参照いただきたい。

4.1　個別事業における協働取組のプロセス等の分析（図 4-1）

(1)　協働取組のための協議の実施

協議会 2 回（6/14、9/9）、企画会議 4 回（7/3、10/30、12/4、1/27）を開催し、知床ウトロ海域の環境保全に係る利害関係者（行政、専門家、漁業者、観光船業者、宿泊関連業者等）が集まり、意見交換を行った。

過去 3 年間の事業の積み重ねのもと、本モデル実証事業を契機として多様な利害関係者が主体的に意見交換の場を形成したことは、地域で協働を進める上で非常に重要な一歩であった。協議会に新たな関係者を巻き込んでいくプロセスは、各関係者が他者との利害関係を調整し、事業に対する主体的を意識する貴重な機会ともなった。

協議会がプラットフォームとして成長しつつあることは、例えば、事業期間中に観光事業者によるものと思われる漁具被害が発生したが、協議会が解決に向けた意見交換の場として機能したことなどに表れている。

一方で、会合の日程調整や資料作成など、準備運営等に係る作業では、未経験者が役割を分担することが難しく、そうした専門性を持つ団体・個人に負担が大きく偏ってしまった。行政機関や地域住民等が協働主体として関わりやすい議題や事業に調整しつつ、運営についても役割分担や担い手育成を進めていく必要がある。

(2)　ケイマフリの保護に向けた取組の実施

具体的な取組としては、「専門家」が中心となって「調査活動」及び「保護活動」を行った。

「専門家」の海上での活動に対する「漁業者」「観光船業者」による理解、活動支援（漁業者による調査受け入れやデコイの設置・撤去、観光船業者による海鳥モニタリングや繁殖に配慮した運航）が実績となり、協働による取り組みが確かなものとなっている。

また、その結果を協議会にフィードバックすることは、協働の成果を共有して連帯感を醸成し、また、現状認識や未来像について地域の関係者が共通認識を育む資料となる点で、重要なプロセスであると考える。

(3)　普及啓発事業の実施

ケイマフリ等の海鳥の保護を推進する啓発イベントとして、協議会で「海鳥ウイーク」を企画。各主体のハイシーズン等も考慮して、平成 26 年 7 月 22 日（月）から 31 日（金）にかけて実施した。

主要な企画として、地域の観光事業者（ホテル）や観光船事業者が専門家に情報発信の場を提供した「うみどりトーク」（7/25、28）及び「サンセットクルーズ」（7/31）があり、各主体の特性を生かし、潜在的なメリットを探る協働事例が実現できたと考える。

また、両企画はいずれも地域外の観光客を主な対象として企画されたものであるが、ウトロ地区の多くの住民が勤務する場であるホテルでのトークセッションや、地域に居住する母親と子どもの参加が目立ったクルーズを通じ、地域住民に活動の意義や状況を発信する糸口を得ることができた。このイベント用に作成された「海鳥バッジ」は、協議会構成者の連帯感を可視化し、広げるためのアイテムとして機能しており、こうしたことは次の段階で協働に広がりをもたらすための大きな足掛かりになると考える。

(4)　「知床スタイル」の仕組みの確立に向けた検討

「知床スタイル」は協働して目指すべき方向性や手法の集大成として位置づけられるものであり、協議会での意見交換や実際の取組を通じて、内容の品質が練磨されるものである。また、ある時点で完成というものではなく、方向性は変えることなく、その都度の状況に応じて内容を更新していくものであると考える。

以上を「知床スタイル」の前提と想定すると、本モデル実証事業期間では、協議会内部での協働が持続可能なあり方で確立されてきており、着実に次の段階に進められていると言える。今後はそのあり方が言語化された「知床スタイル」と具体的な仕組みを、住民等、地域の保全・利用を考える上で避けられない関係者と対話を重ねるプロセスが必要になると考える。

また、複数の利益を実現しつつ、知床の自然環境保全を進める「知床スタイル」を体現するものとして、協議会において「海のガイドブック」の制作提案があり、これまで関係性の薄かった知床のコミュニティ誌作成者の協力を得て、作成している。「海鳥バッジ」同様、共通の関心事に基づいたアイテムが、これまでの協働関係を深め、新たな協働関係をつくるという機能を果たしていると考えられる。

4.2　事業全般における協働取組のプロセス等の分析

(1)　効率性

- 専門家と観光事業者（ホテル）、観光船事業者、漁業者等の共通理解が進み、お互いの特性を活用し、調査や保護活動、意識啓発事業が展開できた。
- 会合や企画の準備等、事務運営に係る人材投入が難しく、何らかの方策が必要である。

(2)　効果－目標達成度

- 協議会の構成者の協働に対する主体意識が高まった。これは本モデル実証事業が行政主導から地域主導の取り組みへ移行するものであり、責任や役割の分担が必要であることを実感したことによると思われる。
- 協議会が海域環境保全上の課題を共有し、解決するためのプラットフォームとしての機能を持ち始めている。漁業者と観光事業者の軋轢が生じた際にも、その解決に向けた話し合いが協議会の場で行われた。
- 協働での企画運営、調査とのそのフィードバックを通じて、協働の意識や具体的な取組が確実なものになっていると考える。さらに地域住民や若者等、新たな関係者を巻き込みつつ、事業の PDCA サイクルをまわすことで、地域の課題解決に向けた、より高い効果が得られると考える。

(3)　関係主体の巻き込み度合い

- 協議会を構成する既存の関係主体について、繁忙時期等を含めた事業特性を踏まえて協議や事業を展開することで、より深く関わりを持ってもらうことができた。
- 有識者を協議会の構成主体（メンバーやアドバイザー）とすることで、協議会の動きに外部視点を組み込み、内部の連帯感を高めつつ、客観的に効果のある事業を目指すことができた。
- 地域メディアについては、アイテムの作成を通じて関係性を深めることができた。
- 自治体（環境行政、観光行政、教育行政）や企業、関連する地域の有力団体、地域メディア等については、協議や事業の展開、「海鳥バッジ」や「海のガイドブック」等の制作活用を通じて関係性を深める機会がそれぞれ生まれつつあり、今後、協働が深まるように工夫を施す必要がある。

(4)　受益者の満足度

- ・普及啓発活動については、アンケート調査（回収サンプル数 469 件）を合わせて実施し、協議会で評価を行った。
- ・アンケート調査の集計結果によれば、「企画に参加してケイマフリに興味を持ったか」という問い（単数回答）に対して、「とても興味を持った」（36.2%）「やや関心を持った」（36.9%）を合わせた関心層は約 4 分の 3 を占めた。また、「ケイマフリにどのような興味を持ったか」という問い（複数回答）では、「実物を見てみたい」が 71.0%で最も多く、次いで「写真を撮ってみたい」（43.9%）となっており、普及啓発活動の効果が表

れた。「生態をもっと詳しく知りたい」（24.5%）のほか、「ケイマフリの保護活動に協力したい」（14.3%）という回答者も一定数おり、ボランティア活動に対する潜在的な参加意欲が見受けられた。・アンケート調査の自由回答では「解説がわかりやすくて楽しい」「写真が美しい」等の声が多く見られ、満足度の高さがうかがわれる。

(5) 社会的インパクト

- 知床を代表する海鳥の生息状況に関して、今後も基礎調査を継続実施する方向性を関係者間で確認できたことは、地域の環境保全に大きく貢献することだと考える。今後はその結果を継続して発信していくことが重要だと考える
- 自治体や地域の有力団体とも、「Win-Win-Win」という協働に基づいた事業構築、ケイマフリをシンボルとする「知床スタイル」等のキーワードについて共感を得ることができた。政策反映等の社会的インパクトをもたらすためには、まず、体制の強化が重要だと考える。
- 地域住民や観光客に対しては、ケイマフリ等の海鳥についての認知度はある程度、上がってきたと考えられる。
- 地方新聞紙等のメディアにはこれまでの関係性を生かし、協議会の構築や事業について積極的に情報を提供した結果、本モデル実証事業に大きな関心を持ち、紙面等を通じた広範な情報発信が行われた。
- インターネットを通じて、「海鳥ウイーク」等の情報発信を行った。小型観光船の利用者はサービスの情報をインターネットで収集をすることが格段に多いため、小型観光船のホームページにバナーをはり、過去に作成したケイマフリの情報サイト等に誘導している。

(6) 計画妥当性

- 計画はおおむね妥当であったと考えるが、構成主体が多様であり、自然を相手にしているメンバーも多いため、想定以上にスケジュールの調整が難航した。これについては、協議会より小規模に集まることができる事務局会議や企画会議を設置し、機能代替を図った。
- 今後はこうした経験を踏まえ、年間スケジュールを関係者間の合意のもと、事前に決定しておくことがよいと考えられる。

(7) 自立的発展性

- 事業の目的、今後の展開等については、協働基盤となる協議会構成メンバーと密な意見交換を通じて共有するように努めた。今後は活動に関係するハンドブック等の制作販売を通じて得た収益を活動資金に充て、次の活動を展開することを想定している。
- 協議会の企画運営、資料作成、プロセスの記録蓄積等の事務的な業務については、取り組める構成主体が限られているが、協働で進める上ではこうした役割が不可欠であり、負担の分散が今後の活動継続のポイントになると考えられる。
- 今後は現在、協議会にオブザーバー参加している「公益財団法人知床財団」と将来像を共有し、連携協働の道を模索していくことが有効だと考える。また、協議会には「斜里

町」「斜里町教育委員会」が構成主体として参画しており、さらに「斜里町教育委員会」等との連携によって、町内ユネスコスクール等での環境教育事業の展開が望まれる。加えて、現在の協議会はジェンダーバランスの観点から女性視点の導入が必要だと考えられ、例えば漁協の女性部会等との連携が、漁業者や地域住民へのアプローチとしても有効だと思われる。

4.3　協働取組の促進要因と阻害要因

(1)　促進要因

①　複数主体の利益の共存を認める姿勢

「Win-Win-Win」発想に基づく信頼関係が、対話を通じて構築、積み重ねられている。

②　未来像をつなぐ外部の仲介者の存在

信頼関係の構築にあたっては、それぞれの利益と未来像を確認し、「共存可能である」という気づきを与える外部の仲介者が存在している。

③　信頼関係を可視化するアイテムの開発・販売

活動思想を言語化、表明する「知床スタイル」や、取り組みと連動した「海鳥バッジ」「海のガイドブック」等の制作により、協働が促進されている。またその企画・開発・物販を組み込むことで、企画者・制作者・販売者の連携が一定期間、担保される。

④　働の拠点となる場の開放

上記の関係者が集まり、自由に意見交換ができる場が用意されていることは重要である。また逆に、場の特性が協働主体の構成を限定してしまう可能性もあると考えられる。

(2)　阻害要因

①　支援的業務の分散困難性

会合や企画の準備運営等の事務的業務は、対話と共同作業によって進められる協働取組において、不可欠な支援業務である。しかし、現場ではそうした経験を持つ人は限られ、また支援的な専門性を持つ人は、普段、現場にはいないため、意識の共有が難しく、志願があまり見込めない状況にある。この負担の偏りが、協働取組のボトルネックではないかと考える。

②　地理的な隔たりによる対話の不足

構成主体が広範囲に存在し、日常的に顔を合わせる機会が少ない場合には、対話の内容も限定され、信頼関係が構築されにくいことが考えられる。特に北海道においては、冬季の移動困難性が協働作業を阻害する要因にもなりえるため、季節特性や事業特性に、多様な働きかけの手法も加味した協働プロセスの促進戦略が必要である。

③　地域産業における収益格差の構造

協働が進まない大きな要因に、産業による収益水準の格差が阻害要因となることがある。そうした利害関係者を巻き込むためには、さまざまな観点から、協働要因を探っていく戦略性が必要である。

図 4-1　個別事業における協働取組のプロセス

※協働に関連のある事項を枠で示した

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
協働取組のための協議の実施	■第1回協議会 (6/14) ・協議会の設置及び役員の決定 ・仕様書に基づいて今年度の事業について確認、意見交換	□第1回企画会議 (7/3) ・「海鳥ウイーク」の計画策定 意見交換の進め方について検討調整(事業期間中)	観光客等を対象にしたアンケート調査	■第2回協議会 (9/9) ・「海鳥ウイーク」の開催報告 ・今年度の事業について確認、意見交換(事業計画及び「知床スタイル」「海域ガイドブック」等)	□第2回企画会議 (10/30) ・第2回連絡会(札幌10/4)の報告 ・会計中間報告 ・平成26年度事業計画について ・「知床スタイル」について		□第3回企画会議 (12/4) ・「海域ガイドブック」について	□第4回企画会議 (1/27) ・事業報告会(東京2/22)の内容 ・「知床スタイル」及び「海域ガイドブック」について ・事業報告書の作成について	
ケイマフリの保護に向けた取組の実施	■調査活動 漁業者の調査受け入れ、観光船による海鳥モニタリング調査 ■保護活動 漁業者によるデコイの設置・撤去、観光船による生態を考慮した運航			専門家による海鳥基礎調査のとりまとめ、フィードバック (運航終了)				観光船による海鳥モニタリング調査のとりまとめ、フィードバック	
普及啓発事業の実施		海鳥ウイーク (7/22-31) ・うみどりトーク ・クルーズ ・写真展 ・グッズ展開 ・アンケート調査	デコイ設置 (8/24) 写真展 (～8/24)	海域ガイドブックの作成	デコイ撤去 ・うみどりトーク、クルーズの協働実施(観光事業者、観光船事業者による場の提供) ・協議会構成主体の共同による、Tシャツやバッジを用いた普及啓発活動 シリエトクノート編集部へのアプローチ				
「知床スタイル」の仕組みの確立に向けた検討	協議会の場での漁業者と観光船事業者の軋轢の解消 地元企業の不祥事に協議会として関与		公益財団法人知床財団との協働の可能性を探るアプローチ	「知床スタイル」協議開始			「知床スタイル」明文化作業		
その他、地方支援事務局への対応等	毎月の月次報告及び必要に応じてヒアリング対応等	■第1回連絡会 (7/31)			■第2回連絡会「協働のかたち研究会」 (札幌 10/4)				■事業報告会 (東京 2/22)

5　その他

5.1　本年度の協働取組カレンダーの作成及び３カ年の中期計画の策定

今年度事業に採択された本協議会の今年度の事業計画（協働取組カレンダー）、および３カ年の中期計画（中期計画シート概要版・詳細版）、振り返りシートについて、次頁以降に示す。

協働取組カレンダー　記入フォーム②事業スケジュール

提出資料

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
協働取組全主体の連絡会・勉強会・報告会の開催		第1回連絡会（キックオフ）	3ヵ年の中期計画記入フォームの提示		第2回連絡会 「協働のかたち研究会」10/4札幌			記入フォームの提出（1月末予定）	報告会（2月中旬予定）
各協議会の開催	・第1回協議会（6/14）	・協議会企画会議（7/3）		・第2回協議会（9/9）	・事務局会議（10/30）		・事務局会議（海のハンドブック制作計画）12/4	・事務局会議（次年度計画検討など）1/27 1月の事務局会議に振り替え	~~・第3回協議会（2～3月開催予定）~~
普及啓発事業		海鳥WEEK開催（7/22～7/31） ・海鳥の解説4回 ・サンセットクルーズ ・写真展 ・Tシャツ、缶バッジの作成	写真展（継続） ケイマフリデコイ設置	→	ケイマフリデコイ撤去	「知床スタイル」＝（知床の海の環境保全の考え方）明文化作業	→	→	→
海鳥生息状況の把握（研究者）	海鳥生息状況調査	→	→	とりまとめ、フィードバック	→	→	→	→	→
海鳥観察記録（観光船）	海鳥観察記録	→	→	→	→	→	→	とりまとめ、フィードバック	→
持続的な協議会運営のための仕組み・体制づくり				協議	→	→	継続協議	→	→
活動の将来的な方向性を見据えた検討				協議	→	→	継続協議	→	→

中期計画シート（概要版）

提出資料

事業名:	記入日:	記入者:

①【WHY】この取組がなぜ必要なのか

・現状表面化している問題
- ・ケイマフリの生息数、営巣数が減少している。
- ・海域関係者間の相互理解、協力関係が脆弱である。
- ・地域において、「ケイマフリ」という海鳥の認知度がまだまだ低く、知床の魅力の一つとして紹介できていない。
- ・世界遺産地域の名に相応しい環境保全と観光利用の良いカタチとは？

・問題を放置した場合に想定される状況
- ・海の観光利用の目的が、船、景色、クマなどに限定される。
- ・ケイマフリという希少種が、人知れず知床から姿を消してしまう可能性がある。
- ・海域関係者間で様々な問題や摩擦が生じる。嫌な思いをする。

②【WHAT】この取組で何をするのか

・2014年
- ・ケイマフリの保全活動を継続する。
- ・海域（地域）関係者間の情報交換の場やコミュニティーとして協議会を定期的に開催する。
- ・取り組み継続のために体制強化を目指し、地域社会で認めらるような取り組みを始める。「知床スタイル」のPR

・2015年
- ・ケイマフリ生息状況に応じて、保全活動の評価と見直しを行う。
- ・行政機関や漁協などと連携できる新たな活動に着手する。
- ・取り組み継続のための体制強化と、その仕組みづくりを目指す。

・2016年
- ・ケイマフリ以外の海洋生物や海洋環境に関わる課題を抽出し協議会で扱う。
- ・羅臼地域の活動と連携する等、ウトロ海域の活動を知床全体やその他地域と結び付けていく。

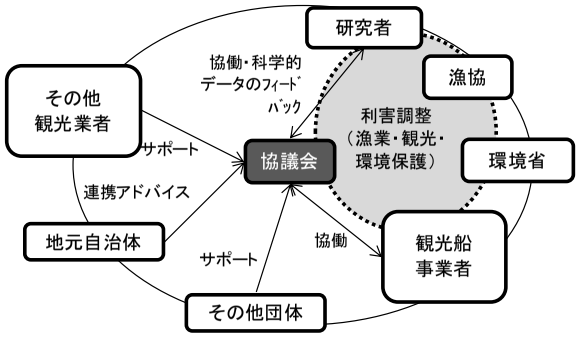
③【HOW】 この取組をどう進めていくのか

・2014年
- ・役割分担を出来るだけ確立する。
- ・低予算の中でも出来る方法を模索し、継続できる仕組みづくりを目指す。
- ・行政機関や地域住民との連携を目指し、イベントへの協力、参加協力なども行っていく。
- ・人材育成と新たな協力関係の拡大により事務局体制の強化

・2015年
- ・年間活動のうちルーチン化出来るものは淡々と実施できるようにする。
- ・企画やネタがマンネリ化しないよう。新たな取り組みを検討する。
- ・体制強化の継続

・2016年
- ・2013年～2015年を振り返り、協議会としてレビューを行い、達成したもの、しなかったものについて整理し分析を進める。次の3カ年計画を立てる。

④【WHO】誰とどのような関係性で協働するのか



⑤【WHO】誰がなんの役割を果たすのか

研究者：ケイマフリをはじめとする海鳥調査を行い、調査結果を保護や観光利用、普及啓発にフィードバックする。
観光船事業者：協議会の活動を通して、観光客にケイマフリの解説を行い、観光資源として育てていく。
その他観光業者：ケイマフリの普及・啓発にあたって、アイデアだし、各種サポートを行う。
漁協：漁業という形での海の利用者として、環境保護や観光利用に対して、調整すべき点に係る意見を述べる。
地元自治体：教育など連携可能な取り組みなどについて、アドバイス・サポートを行う。
国立公園管理者（環境省）：希少種の保護、自然公園の利用について、適切なアドバイスを行う。

⑥【GOAL】2016年度末までのゴールはどこか

最高の状態
- ・ウトロ・羅臼それぞれの海域や観光船利用の個性が尊重された上で、連携によって、利用・保全ともに相乗効果が発揮されている。
- ・ケイマフリを中心とした活動から、ケイマフリ以外の海洋生物や海洋環境の保全に関わる活動に発展している。

望ましい状態
- ・住民の多くがケイマフリ等の海鳥の存在意義について認識し、観光利用者の多くがケイマフリという海鳥が生息することを知っている。
- ・ケイマフリを中心とした定型的な活動から、その他の協働型の活動への着手について、具体的な検討が始まっている。

確実に達成する状態
- ・関係者のつながりが維持され、協議会や「海鳥Week」が継続的に開催できている。
- ・普及啓発や海域の魅力を紹介することができる応援団が増えている。

⑦【PROBLEM】事業実施における課題・懸念はなにか
要素例）人員、財政、法・制度など

・協議会の事業継続のための仕組み（運営体制、役割分担、資金面）が構築されていない。→事務局メンバーがそれぞれの仕事が忙しく、協議会の活動に時間を取れない。

・関係者の協働型の取り組みが、特定の活動に限定されている。例えば、漁協や行政などとの本格的な連携に至っていない。

⑧【IMAGE】課題・懸念が解決された状態はどのようなものか

・協議会が持続的に運営されていけるような仕組みが構築されている。
・関係者がWin-Winの関係となり得るために、常に意見交換ができる場を持続している。
・ケイマフリを中心とした活動から、ケイマフリ以外の海洋生物や海洋環境の保全に関わる協働型の活動を行っている。

⑨【SOLUTION】課題・懸念を解決するための対策はなにか

・定年退職された方など、比較的時間が取りやすい方が事務局メンバー入りする。
・運営主体、役割分担の明確化
・行政機関等との連携・協力体制の構築。
・協議会に関わることが負担にならない、続けられる、参加したくなるような企画や仕掛け、方法を考える。
・補助金に頼らずに、事業を継続できるような仕掛け（商品開発など）を行う。
・経費が比較的掛からない会議開催などは、構成員による持ち寄り方式で継続的に開催していく。

中期計画シート（概要版）

提出資料

2014年の事業内容・目標	2015年の事業内容・目標	2016年の事業内容・目標
協議会発足2年目は、協議会の開催や、「海鳥モニタリング調査」、「海鳥Week」など、毎年コンスタントに実施したい、協議会の軸となる活動の実施時期や実施体制の確立を目指します。また活動の継続性確保のため、事務局体制の強化や少ない予算でも活動を実施できる「続けられる仕組みづくり」のために、普及啓発や魅力発信を行う核となる人材の育成を行うとともに、行政機関や各種団体などとの将来的な連携も視野に入れ、地域に認められる協議会になれるよう、実績づくりに専念します。 《主な活動内容》 ・海鳥Week、海鳥モニタリング、「知床スタイル」の実践 ・人材育成、海のハンドブックの作成 《目標》 ・協議会の運営体制・基盤を強化！ ・普及啓発や魅力発信を行う核となる人材の育成。 ・欲張らず、出来ることを確実に行い、実績を作る。	協議会の開催、「海鳥モニタリング調査」、「海鳥Week」はコンスタントに実施。そのほか行政機関や漁協などの各種団体とのコラボ企画などにもチャンレンジする。 《主な活動内容》 ・海鳥Week、海鳥モニタリング、「知床スタイル」の実践 ・人材育成 《目標》 ・新たな協力関係の構築 →協議会の運営体制・基盤を強化！ ・行政機関や漁協などの各種団体と、これまでにない協働の構築を目指す！	協議会の開催、「海鳥モニタリング調査」、「海鳥Week」はコンスタントに実施。羅臼海域の関係者との意見交換の場を作り、ウトロ海域の取り組みとの連携による相乗効果を図る。 ・また、ケイマフリ以外の海洋生物や海洋環境に関わる課題を抽出し、協議会で扱う。 《主な活動内容》 ・海鳥Week、海鳥モニタリング、「知床スタイル」の実践 ・羅臼地域と連携した活動 《目標》 ・「知床の海はひとつ」をキーワードとして、ウトロ地域と羅臼地域との連携を目指す！ ・ケイマフリ以外の海洋生物や海洋環境に関わる課題を抽出し、協議会で扱う！ ・次の3カ年計画を立てる

行動計画	2014年度				2015年度				2016年度			
	4月～	7月～	10月～	1月～	4月～	7月～	10月～	1月～	4月～	7月～	10月～	1月～
定例協議会	春		秋	冬	春		秋	冬	春		秋	冬
事務局会議	随時（年4回程度）				随時（年4回程度）				随時（年4回程度）			
海鳥モニタリング デコイ設置	5月～9月				5月～9月				5月～9月			
海鳥ウィーク		実施				実施				実施		
	発足間もない事もあり2014～2016年の3カ年は着実な取り組み実施と体制強化が目標です。協議会として、まず実績を積む必要があると考えています。											

平成25年度
地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業」

中期計画シート（詳細版）

「知床半島ウトロ海域の地域協働による ケイマフリ保護の取り組み」

平成26年3月22日

請負契約の受託団体の法人名	知床ウトロ海域環境保全協議会
受託団体の代表者氏名	西　岡　　保

目　次

はじめに

１　組織概要

２　地域の課題

３　協働取組の概要

４　3年後のゴールイメージ

５　2014年度の目標・事業内容・スケジュール

６　2015年度の目標・事業内容・スケジュール

７　2016年度の目標・事業内容・スケジュール

８　事業実施における課題と対策

９　関係主体の全体図

10　関係主体の役割

1　組織概要

<table>
<tr><td>法人名</td><td colspan="2">知床ウトロ海域環境保全協議会</td><td>代表者名</td><td colspan="2">西　岡　　保</td></tr>
<tr><td rowspan="2">所在地</td><td colspan="2" rowspan="2">〒099-4354
北海道斜里郡斜里町ウトロ西186－10</td><td>電話</td><td colspan="2">01522 （ 4 ） 2297</td></tr>
<tr><td>FAX</td><td colspan="2">01522 （ 4 ） 3646</td></tr>
<tr><td>ホームページ</td><td colspan="2"></td><td>e-mail</td><td colspan="2">t450917nishioka@ninus.ocn.ne.jp</td></tr>
<tr><td rowspan="3">組織体制</td><td>役　員</td><td>5 名</td><td>会員</td><td colspan="2">16 名</td></tr>
<tr><td>専従者</td><td>0 名</td><td>ボランティア</td><td colspan="2">0 名</td></tr>
<tr><td>パートタイム</td><td>0 名</td><td>その他（　　）</td><td colspan="2">0 名</td></tr>
<tr><td></td><td>創立年</td><td>2013 年</td><td>法人設立年</td><td colspan="2">年</td></tr>
<tr><td>これまでの活動実績</td><td colspan="5">平成13年度～平成24年度　ケイマフリをはじめとする海鳥調査を実施
平成21年度　ウトロ海域懇談会を開催
平成22年度～平成24年度　環境省「知床国立公園ウトロ海域における海鳥の保護と持続可能な海域利用検討」3ヵ年事業の取り組みとして検討会議を組織。年2回程度の検討会の開催、利用動向調査、デコイを使用した地域協力による取り組みのPR、観光船事業者による海鳥観察記録の実施、専門家による調査結果の情報共有など、海域に関わる様々な地域の人々が“ケイマフリの保全“をシンボルテーマに協力関係の確立を実現した。</td></tr>
<tr><td>過去5年間に受けた補助金や助成金等の名称及び金額</td><td colspan="5">※平成22年度～平成24年度 「知床国立公園ウトロ海域における海鳥の保護と持続可能な海域利用検討業務」（環境省釧路地方自然環境事務所）の取り組みにより、「適正利用・エコツーリズム検討会議　ウトロ海域部会」として部会が組織された。このウトロ海域部会を母体とし、本年度より「知床ウトロ海域環境保全協議会」が設立される見込みである。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">事業地域</td><td>事業名</td><td colspan="4">知床半島ウトロ海域の地域協働によるケイマフリ保護の取り組み</td></tr>
<tr><td>該当地域</td><td colspan="2">□全国</td><td colspan="2">■地方</td></tr>
<tr><td>事業実施地域</td><td colspan="4">知床世界自然遺産地域（知床国立公園）内、北海道斜里郡斜里町ウトロから知床岬までの、知床半島西側の沿岸および海域。</td></tr>
</table>

2　地域の課題

現在表面化している問題

・世界自然遺産地域である知床半島には希少海鳥であるケイマフリが生息しているが、主な生息地となっている知床半島の西側、斜里町ウトロ周辺の海域では、近年そのケイマフ生息数、営巣数が減少していることが専門家の調査で明らかになった。特に観光船の頻繁な航行は、ケイマフリ営巣地へのプレッシャーとなっている事が示唆された。
・ウトロ周辺の海域はサケ・マスを中心とした漁業の盛んな地域であるが、夏季の観光シーズンでは大型観光船、小型観光船、遊漁船、シーカヤックなど様々な海域利用の形態が見られるが、各海域利用者間の海域利用における軋轢も少なからず見られている。
・ケイマフリの保護が研究者らによって指摘されているが、ケイマフリの認知度は低く、豊かな知床半島を表す希少な野生動物としての保護の取り組みは遅々として進まなかった。また観光資源とも成り得る可能性を秘めているにもかかわらず、ほとんど観光利用者に注目されることは無かった。
・世界遺産地域登録の際には、知床半島における人と自然の良いバランス関係が保たれている点が大きな評価ポイントであった。ケイマフリの保護と人々の海域利用の良い関係を確立する事は、世界遺産地域である知床半島では達成しなくてはならない課題である。

問題を放置した場合に想定される状況

・ケイマフリという希少種が、今後も注目される事がなければ、人知れず知床から姿を消してしまう可能性もある。
・観光船による海の観光利用は知床半島の観光スタイルとして、とても大きな役割を担っているが、観光船でガイドされる内容は、風景や、クマなどに限定されており、より充実した観光サービスの提供の観点からケイマフリのような観光資源となりうる希少野生動物を紹介出来ない事は利用者にとってもマイナスである。
・海域関係者間の良好な関係が構築されなければ、海域環境の保全などの取り組みは進まず、また様々な問題や摩擦が生じ嫌な思いをする場面が増加する。

該当地域の社会的・地域的背景

・知床半島ウトロ地域は知床観光の拠点となっており、半島東側の羅臼町とともに要の存在となっている。
・知床横断道を利用する観光利用者にとっては、高い確率でウトロ漁港から出港している観光船に乗船している事が解っている。2005年の世界自然遺産地域登録を契機に、観光船の事業者数、隻数も増加し、それまで海域利用の、ほぼ全てであった漁業者との軋轢も発生している。
・ケイマフリは知床半島においても、ウトロ海域のごく一部の断崖から成る海岸を繁殖地としており、局所的な生息分布が見られている。国内には現在4個所しか繁殖地は確認されておらず、知床半島ウトロ周辺のケイマフリ繁殖地も、貴重な繁殖地の一つである。

地方公共団体の政策課題等との関係性

1）第5次斜里町総合計画の基本計画に自然教育活動の推進を掲げ「住民の自発的な自然保護活動を支援し、自然保護活動における住民との協働を目指す」としており、斜里町は、自然保護自治体を標榜する自治体として、これまでの活動にも参加するなどしている。
2）世界遺産知床の海域における管理計画として平成25年3月に環境省・北海道により策定された「第2期知床世界自然遺産地域多利用型統合的海域管理計画」においては、ケイマフリの繁殖個体数の減少を回避と海洋レクリエーションにおける海鳥等への悪影響の回避について記述され、多様な主体の相互の密接な連携協力のもと、保護管理措置等を推進していくとともに、それらに係る人材の育成を図っていくこととされている。
3）知床エコツーリズム推進協議会により策定された「知床エコツーリズム推進実行計画」では、知床エコツーリズム推進協議会が、観光資源である知床の自然環境を保全するための独自事業を実施、もしくは他機関が実施する環境保全事業への支援を行うとしている。知床エコツーリズム推進協議会は、地元観光協会が主体となり漁業協同組合や自然保護協会といった多様な主体がメンバーに参画している。

3　協働取組の概要

協働取組の目的とテーマ

ケイマフリの保護をテーマに「規制に頼らない保護の仕組み」、利害関係にもなりうる様々な立場の関係者（行政、専門家、漁業者、観光船、観光利用客）の「全ての関係者にメリットを見出すWin-Win-Winの関係づくり」を前提目標とし、行政と民間の連携、異業種間の協力など、「ケイマフリの保護」をシンボルとして多様な立場の方々が問題を共有し、知床世界自然遺産地域（知床国立公園）として相応しい、持続的な海域の利用と野生動物の保護を同時に目指して行こうとする取り組みである。

課題解決に向けたアイディアと協働プロセス

「ケイマフリの保護」をシンボルテーマとし、多くの方々に係わって貰い、それぞれが何らかのメリットを享受できる（Win-Win-Win）仕組みを構築する。通常「見てはいけない」「触れてはいけない」「近づいてはいけない」という希少野生動物の保護策の概念を越え、専門家による調査データを活用し、保全しながら観察する手法を観光船事業者等と共有することにより、「見て守る」観光資源化と野生生物保護の両立を目指し、また環境教育の素材（地域の宝物）として活用支援を進める。そのほか、希少野生動物を「見て守る」Win-Win-Winの仕組みの取り組みを「知床スタイル」と定義し、わかりやすい言葉でまとめ地域関係者の共通言語とするとともに対外発信できるようにする。

地域・協力者の期待・ニーズとの整合性

・観光事業者は、世界遺産地域に相応しい、充実した観光サービスの提供を目指して日々の努力を行っている。ヒグマ、エゾシカ、知床連山、知床五湖、羅臼岳など、知床観光の目玉となるものは数多いが、知床半島の自然の豊かさを伝える事が出来るケイマフリも、ぜひ観光利用者に紹介したい生き物の一つである。観光事業者には、観光船事業者のみならず、ホテル等の宿泊業やガイドサービス業も含まれる。
・漁業者にとってケイマフリの保護と漁業生産とは直接的な関連はほとんど無いと考えられるが、ケイマフリが生息出来ている事は、その海が豊かな状態が維持されている事の指標とも成り得る。ケイマフリの主要な餌資源となるイカナゴは、漁業対象となる魚類にとっても重要な餌資源である。ケイマフリが生息している事は漁場の健全性を表す事でもあり、漁業者もケイマフリが居なくなってしまうことは避けたい。
・地域の住民にとってもケイマフリが生息できる知床半島の自然が維持される事は、自分の暮らす地域の自然環境が豊かである事の証明であり誇りである。この豊かな自然は地域の人々の財産であると多くの人が認識しており、特に斜里町は古くから自然環境の保全、保護に力を入れてきた自治体であり、地域に暮らす人々の自然環境への意識は非常に高い。

4　3年後のゴールイメージ

2016年度末のゴールはどこか（最高の状態）

・平成25年度より知床半島東側の羅臼町でも、海域利用に関する取り組みが動き始めている。2016年度末には斜里町側ウトロ海域と羅臼海域とで、ウトロ・羅臼それぞれの海域や観光船利用の個性が尊重された上で、取り組みの連携によって、知床半島全体の海域利用と海域環境保全への取り組みに発展。両地域共に相乗効果が発揮され、さまざまな効果が見え始める。
・協議会の活発な活動により、ケイマフリを中心とした活動から、ケイマフリ以外の海洋生物や海洋環境の保全に関わる活動に発展している。

2016年度末のゴールはどこか（望ましい状態）

・住民の多くがケイマフリ等の海鳥の存在意義について認識し、観光利用者の多くがケイマフリという海鳥が生息することを知っており、それを目当てに訪れる観光利用者も少しづつ増加している。
・ケイマフリを中心とした定型的な活動から、その他の協働型の活動への着手について、具体的な検討が始まっている。地域からの協議会の評価が高まり信頼されており、様々な協働の誘いなどを受けるようになった。

2016年度末のゴールはどこか（確実に達成する状態）

・関係者のつながりが維持され、また更に信頼関係が築かれてきた。協議会や「うみどりWeek」が継続的・安定的に開催できており、「うみどりWeek」は、地域の恒例行事として定着した。
・普及啓発や海域の魅力を紹介することができる応援団が増えている。観光サービスに関わる方々が誰でもケイマフリについて観光利用者に説明できるようになった。

事業の結果を測る指標（アウトプット）

1）希少野生生物を活用し、保護する仕組みについて「知床スタイル」として明文化する。
2）facebookページが立ち上がり、「いいね！」が3ヵ年で1,000件を超える。
3）啓発VideoをYouTubeに掲載し、閲覧数が3ヵ年で1,000件を超える。
4）「海鳥ミニ出前講座」を開催し、観光船事業者2社以上、宿泊事業者2社以上の参加を得る。また、観光客を対象にした講座に50名以上の参加者を得る。
5）専門家によるケイマフリのモニタリング調査を5月～8月行い、繁殖数、個体数を把握する。調査結果は協議会に還元し、観光サービスに活用する。
6）協議会を2回、企画会議を3回開催し、Win-Win活動の企画を検討する。
7）町内の学校、幼稚園、全てにケイマフリ関連の教材・展示品を貸し出しする。

事業の効果を測る指標（アウトカム）

1）ケイマフリ生息個体数の維持・安定、営巣数の安定（増加）、営巣エリアの維持（拡大）が確認される。
2）アンケート調査（利用動向調査）結果から、ケイマフリ（海鳥）の認知度向上が確認され、ケイマフリを主体としたツアーが企画される。
3）知床の観光船は他の地域と比較し、「自然保護の意識が高い」とメディアで紹介される。
4）知床スタイル（希少野生生物を活用から保護する仕組み）の活動について、域外からの視察が行われる。域外で「知床スタイル」を紹介する講演・発表が依頼される。
5）協議会が地域の新たなコミュニティとしても機能し始める。
6）地元の小中学生、高校生は、ケイマフリの習性や、皆で大切にしようと努力していることを知っている。

5　2014年度の目標・事業内容・スケジュール

2014年度の目標

協議会発足2年目は、協議会の開催や、「海鳥モニタリング調査」、「海鳥Week」など、毎年コンスタントに実施したい、協議会の軸となる活動の実施時期や実施体制の確立を目指します。また活動の継続性確保のため、事務局体制の強化や少ない予算でも活動を実施できる「続けられる仕組みづくり」のために、普及啓発や魅力発信を行う核となる人材の育成を行うとともに、行政機関や各種団体などとの将来的な連携も視野に入れ、地域に認められる協議会になれるよう、実績づくりに専念。

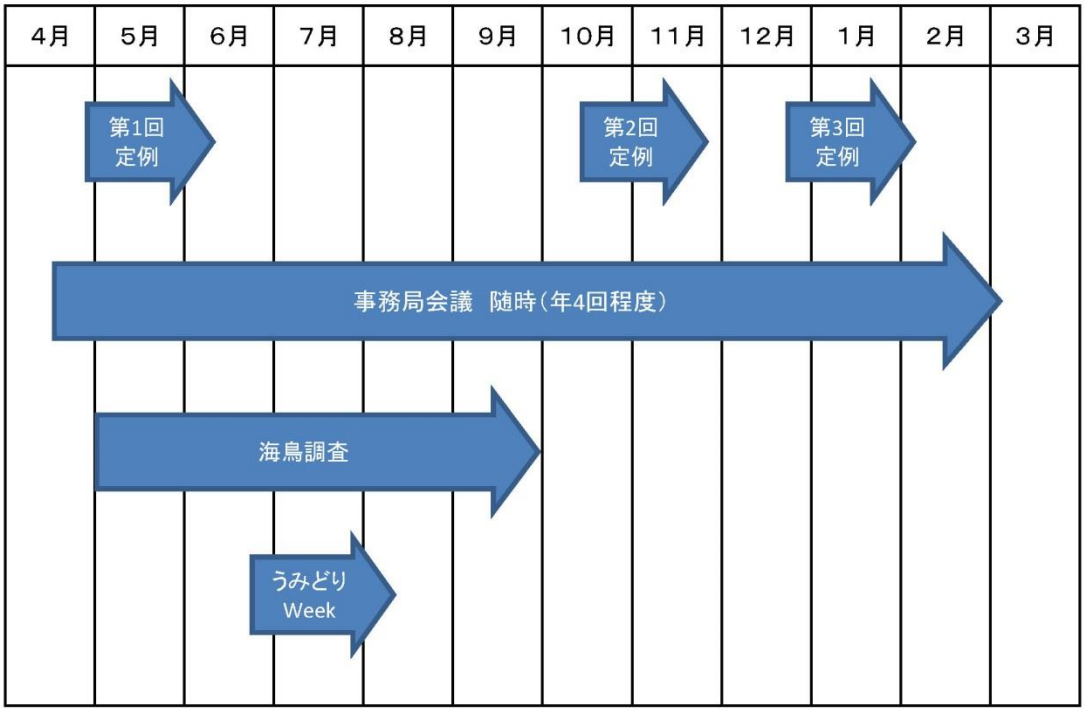
2013年の発足初年度の反省を元に、現在の協議会の立ち位置を見誤らず、現実的な目標設定をすることが大切。実績を重ねることで、新たな協働の形も描けるはず（＝実績のない協議会に関わりたいと思う人はいない）

目標を達成するための具体策

まず、既存の活動を確実に実施し、少しずつ内容を充実させる努力をする。また新たな協力者を求めるため、地域の方々に協議会の目標や趣旨を伝え理解者を増やす。

【確実に実施する内容】
・海鳥Week、海鳥モニタリング、「知床スタイル」の実践
・人材育成、海のハンドブックの作成

発足間もない事もあり2014～2016年の3カ年は着実な取り組み実施と体制強化が目標です。
協議会として、まず実績を積む必要があると考えています。



６　2015年度の目標・事業内容・スケジュール

2015年度の目標

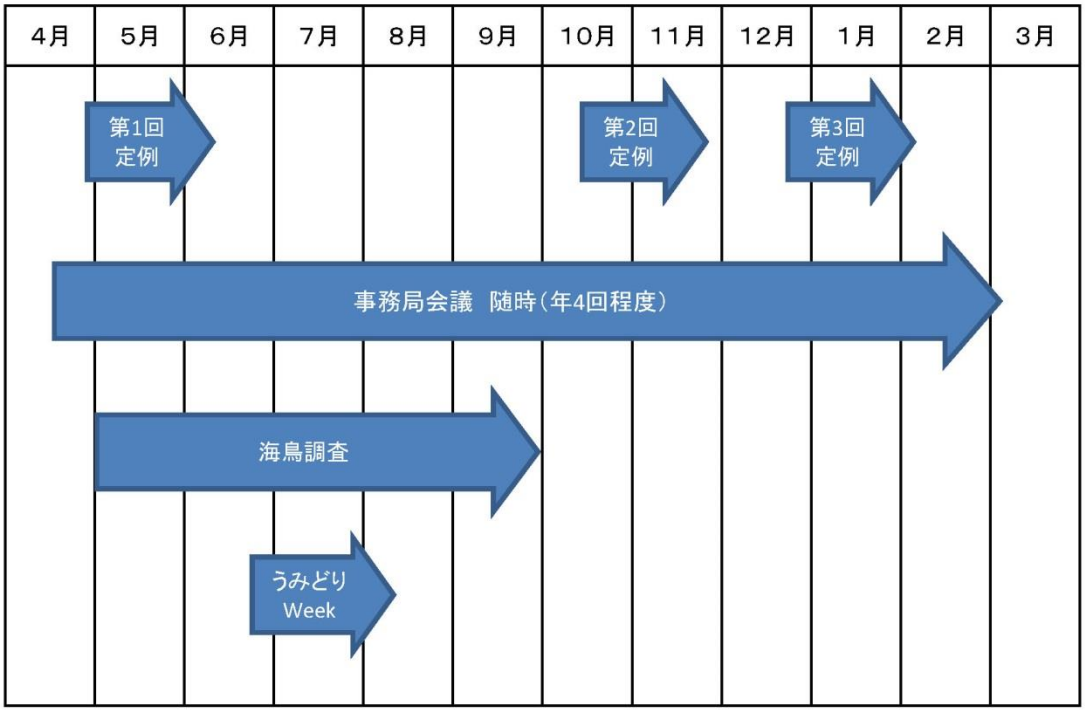
協議会の開催、「海鳥モニタリング調査」、「海鳥Week」はコンスタントに実施。そのほか行政機関や漁協などの各種団体とのコラボ企画などにもチャンレンジするが、あまりリスクを背負わない

目標を達成するための具体策

ウトロ漁業協同組合、知床財団、との関わり、連携を少しずつ進めていく。まず信頼関係を築くこと。

【確実に実施する内容】
・海鳥Week、海鳥モニタリング、「知床スタイル」の実践
・人材育成

発足間もない事もあり2014～2016年の3カ年は着実な取り組み実施と体制強化が目標です。
協議会として、まず実績を積む必要があると考えています。



7　2016年度の目標・事業内容・スケジュール

2016年度の目標

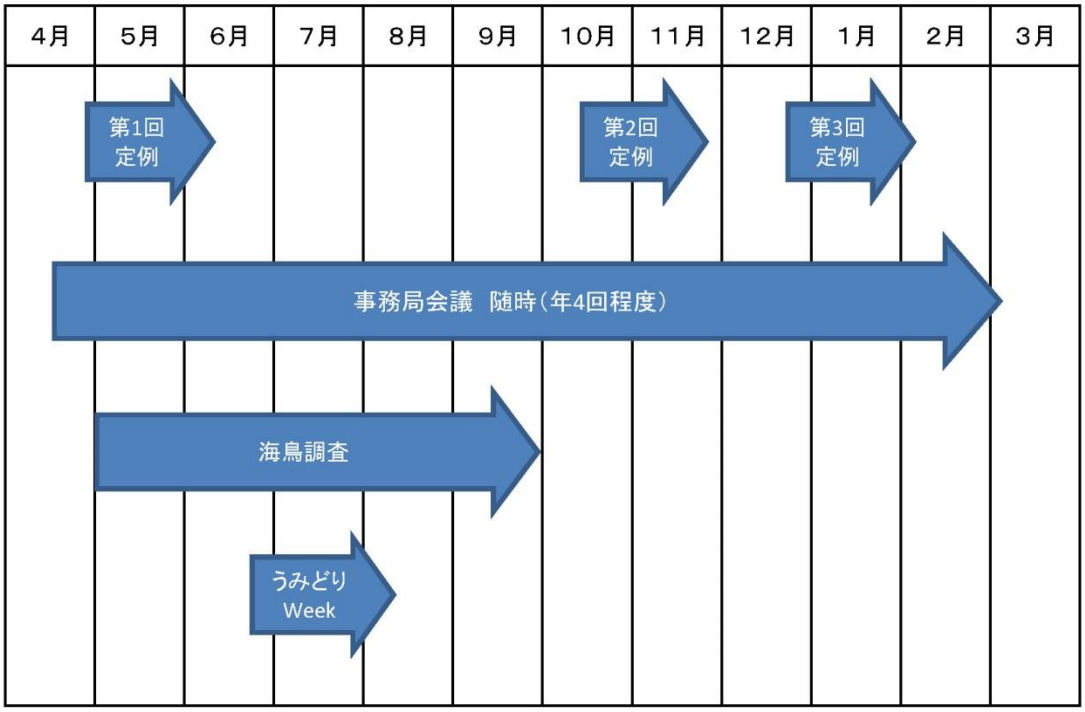
協議会の開催、「海鳥モニタリング調査」、「海鳥Week」はコンスタントに実施。羅臼海域の関係者との意見交換の場を作り、ウトロ海域の取り組みとの連携による相乗効果を図る。
・また、ケイマフリ以外の海洋生物や海洋環境に関わる課題を抽出し、協議会で扱う。
・2014～2016年までを振り返り、次の３年間のビジョンを定める。

目標を達成するための具体策

ウトロ漁業協同組合、知床財団、との関わり、連携を少しずつ進めていく。まず信頼関係を築くこと。

【確実に実施する内容】
・海鳥Week、海鳥モニタリング、「知床スタイル」の実践
・人材育成
・羅臼地域と連携した活動
・次の3カ年計画を立てる

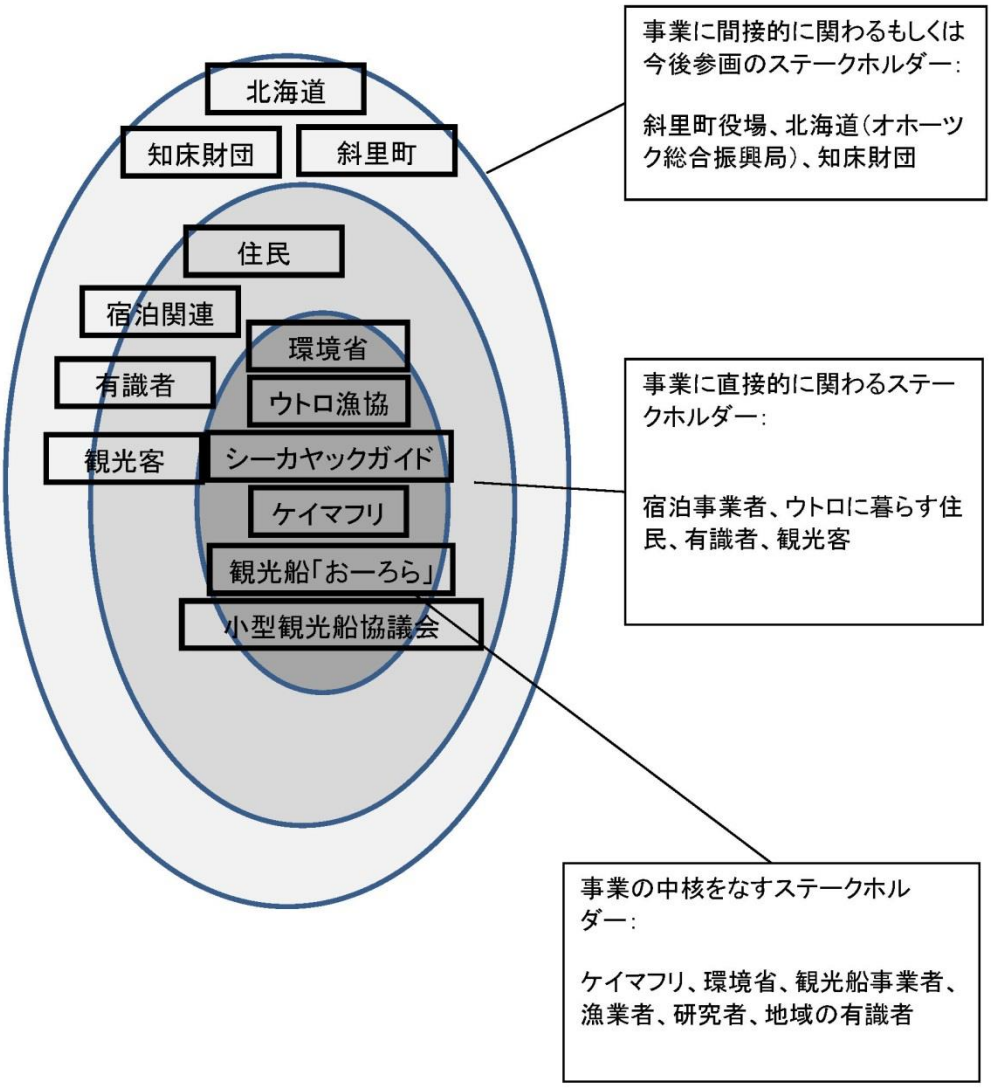
発足間もない事もあり2014～2016年の3カ年は着実な取り組み実施と体制強化が目標です。
協議会として、まず実績を積む必要があると考えています。



8 事業実施における課題・リスクと対策

分類	課題・リスク	対策
人員	協議会の事業継続のための仕組みとして、協議会の活動に時間を割ける人材が不足している。 →事務局メンバーがそれぞれの仕事が忙しく、協議会の活動に時間を取れない。	新たな人材の確保。 比較的時間がある方で信頼できる人。協議会の趣旨・目標に共感してくれる人。 →　定年退職後の地域の方々なども頼れる存在か？ ・役割分担を明確にする。
財政	現在、確約された予算など全くない状態。	お金が無くても出来ることはあるので、基本的に助成金などを追い求めることはしない。 ただし、どうしても取り組み実施のために資金が必要となった場合は、助成金などの応募も検討する。
法・制度	協議会は任意団体である。法人化のメリットやデメリットなども、理解しておくことが必要。	徐々に、そのあたりのノウハウを集めて、法人化の準備を進めておく。
協働相手の拡大	・関係者の協働型の取り組みが、特定の活動に限定されている。例えば、漁協や行政などとの本格的な連携に至っていない。	少しずつ、協働できる内容の取り組みにトライしていく。相手のメリットを提案できるように様々な可能性を考える。
（自由項目）		

９ 関係主体の全体図


北海道
知床財団
斜里町
住民
宿泊関連
有識者
観光客
環境省
ウトロ漁協
シーカヤックガイド
ケイマフリ
観光船「おーろら」
小型観光船協議会
事業に間接的に関わるもしくは今後参画のステークホルダー：
斜里町役場、北海道（オホーツク総合振興局）、知床財団
事業に直接的に関わるステークホルダー：
宿泊事業者、ウトロに暮らす住民、有識者、観光客
事業の中核をなすステークホルダー：
ケイマフリ、環境省、観光船事業者、漁業者、研究者、地域の有識者

10 関係主体の役割

1 組織名	知床海鳥研究会	事業における役割	ケイマフリをはじめとする海鳥の調査の実施および調査結果の還元。またイベント時の海鳥解説などの普及活動。協議会の旗振り役としての役割に期待。
所在市区町村	〒099－4353 斜里町ウトロ中島10-6-208		
ホームページ	http://www.d1.dion.ne.jp/~murrelet/		
2 組織名	知床小型観光船協議会	事業における役割	観光利用者と直接接する職業であるため、海鳥の魅力やケイマフリの生息状況等、知床の素晴らしさを伝え、正しい自然環境情報を提供する。海域環境を常に見守り、新しい企画開発や、デコイ設置などの海上作業への協力も。
所在市区町村	〒099－4355 斜里町ウトロ東52		
ホームページ	http://www.shiretoko-kankosen.com/		
3 組織名	ウトロ漁業協同組合	事業における役割	デコイ設置などの海上作業協力および、海域環境を見守り、海域利用者間の調整等。
所在市区町村	〒099－4355 斜里町ウトロ東117番地		
ホームページ			
4 組織名	道東観光開発株式会社	事業における役割	観光利用者と直接接する職業であるため、海鳥の魅力やケイマフリの生息状況等、知床の素晴らしさを伝え、正しい自然環境情報を提供する。海域環境を常に見守り、新しい企画開発や、デコイ設置などの海上作業への協力も。
所在市区町村	〒099-4355 斜里町ウトロ東107		
ホームページ	http://www.ms-aurora.com/shiretoko/index.html		
5 組織名	環境省ウトロ自然保護官事務所	事業における役割	希少野生動物の保護、国立公園地域の適切な利用など、行政機関の中でも中心的に様々な調整機能に期待。また会議開催場所やイベント開催時の資材の貸し出しなど。
所在市区町村	〒099-4354 北海道斜里郡斜里町ウトロ西１８６－１０		
ホームページ			
6 組織名	知床温泉旅館協同組合	事業における役割	宿泊客への自然情報、海鳥情報の提供。海鳥出前講座などの開催協力、各種取り組み活動への協力。
所在市区町村	〒099－4351 斜里町ウトロ香川192		
ホームページ	http://www.shiretoko-kazanamiki.com/		
7 組織名	知床民宿協会	事業における役割	宿泊客への自然情報、海鳥情報の提供。海鳥出前講座などの開催協力、各種取り組み活動への協力。
所在市区町村	〒099－4355 斜里町ウトロ東124		
ホームページ	http://www.siretokonoyado.com/		

平成25年度　環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組事業

振り返りシート(採択団体・地方支援事務局)

大項目	小項目	振り返りの視点	振り返り	
			採択団体	地方支援事務局
【効率性】	人的資源の投入	・スタッフの配置は適切だったか ・関係主体の役割分担は適切だったか	・連絡調整や会計など事務局の庶務を担う人材が不足。本業の他に協議会の作業を行っている現状があり、体制としては脆弱・不安定である。常任スタッフを配置できない状況であるため、それでも確実に活動を続けられる仕組みとして、役割分担の明確化と、事務局メンバーの増員が必要であろう。 ・研究者による調査、観光事業者による資源活用に関しては、適切な役割分担ができた。	
	財政資源の投入	・本事業に係る経費支出の内訳は適正だったか、判断基準はどうか	・保護に向けた取り組み（基礎調査）、協働のための協議、普及啓発事業等、偏りないのない支出であった。	
【効果−目標達成度】	協働取組の展開	・プロジェクト全体でPDCAサイクルを回したか	・単年度でPDCAの全てを完結する事は出来なかったが、来年度以降において、今年度の活動から見えてきた課題を明確にし、計画の見直しを修正を行っていきたい。	
	地域課題	・地域のニーズを把握したか、解決に貢献したか	・普及啓発活動については、アンケート調査を合わせて実施し、協議会等での評価に活用した。 ・漁業者、観光事業者との軋轢が生じたが、協議会の場を活用して、関係者での意見交換を行い、解決を図った。 ・イベントで行ったアンケート結果を基に、普及啓発素材の開発を行っている。	
	人材育成	・スタッフの成長は見られたか ・人材育成の機会設計をどのように行ったか	・行政主導の取り組みから、地域主導の取り組みへの移行に際し、各人の立ち位置が、参加者→主体に変わる必要があった。責任負担や役割の重要性が増すことになったが、その事を痛感したことは成長のために必要であったと思われる。 ・協議会の趣旨、活動に賛同してくれるメンバーを更に増やし、地域に根付いた協議会、参加しやすい協議会、やりがいのある協議会であるように、”海鳥Week”も気軽に地域の皆さんが参加して、一緒に作り上げて行く恒例行事にしたい。特に地域の次の世代を担う若者たちが参加できるような企画を展開する必要もあろう。	
【関係主体の巻き込み度合い】	地域住民	・共通のビジョン構築をできたかどうか ・信頼関係の構築に向けて、どのような取り組みをしたか	・地域住民と共通のビジョン構築をできたかは不明。	
	企業	・共通のビジョン構築をできたかどうか ・企業の方針や抱えている課題を、どのように把握したか	・企業としての地元観光事業者については、ビジョンを共有し、連携してイベント等の開催を行うことができた。	
	自治体	・共通のビジョン構築をできたかどうか ・自治体の政策やニーズ、報告書を調べて、何を必要としているのかを把握したか	・自治体、教育・研究機関との関係性については、知床では元々世界遺産管理、知床五湖の利用、ヒグマ対応、カムイワッカ等の様々な協働型の枠組みが動いており、担当者も重複していることから、本事業における連携・協働は負担の純増となるため、不十分であったと言える。	
	教育・研究機関	・共通のビジョン構築をできたかどうか ・教育・研究機関の方針やニーズ、報告書を調べて、何を必要としているのかを把握したか		
	地域メディア	・地域メディアにとりあげてもらうためのアプローチを行ったかどうか、結果はどのようなものか	・地域メディアに対しては、メンバーの一員である行政機関から投げ込み等を行い、取り上げてもらった。	
	その他	・プロジェクトに関して外部関係者の意見を把握できる場を、どのように設計し、どのように実施したか ・参加しやすい場づくりを行えたか	・年に複数回の協議会を開催し、外部有識者にメンバーに加わってもらい、意見をいただいた。今年度は第2回協議会に北海道大学観光高等学研究センター　敷田　麻美　教授にご参加頂いた。	

大項目	小項目	振り返りの視点	振り返り	
			採択団体	地方支援事務局
【受益者の満足度】	市民団体のニーズと期待に対して	・受益者の満足度を把握する取り組み（アンケート、ヒアリングなど）を実施したか ・受益者が本音を言えるような工夫をしたか？	・協議会や事務局会議等を定期的に開催し、関係者（受益者）が積極的に意見交換できる場をもった。 ・普及啓発活動については、アンケート調査を合わせて実施し、協議会等での評価に活用した。	
	一般的地元民のニーズと期待に対して			
	企業のニーズと期待に対して			
	自治体のニーズと期待に対して			
	教育・研究機関のニーズと期待に対して			
【社会的インパクト】	組織目標の達成度合い	・協働カレンダー⑥に対して、結果はどうだったか	・住民によるケイマフリの認知度、観光客によるケイマフリ観察の認知度はある程度上がってきていると思われるが、十分に達成できているとは言えない。	
	知名度	・マスメディア（新聞・テレビ）/ローカルメディア（ニュースレター、地域情報誌、市報）/個人レベルでのメディア（ブログ、MLなど）に対して、どのように働きかけ、どのような内容・成果を伝えたか	・メディアに対しては、普及・啓発活動に係る投げ込みを行い、環境保全のあり方や協働の体制について積極的に取り上げてもらった。個人レベルでの広報は、関係者のブログやHP上で行ったが、イベントの告知程度にとどまった。	
	更なる協働基盤準備	・本協働取組で把握した現場のニーズに基づいた提案を、企業や商工会、教育・研究機関などに、適用をするように働きかけたか	・本活動については、更なる協働基盤づくり・制度準備という段階にはなく、現在の協働の体制を強化することの優先度が高い。	
	更なる制度準備	・本協働取組で把握した現場のニーズに基づいた提案を、自治体などに、政策への反映や他の事業への適用をするように働きかけたか	・ケイマフリという知床を代表する海鳥の生息状況に関する基礎調査を行うことができ、地域の環境保全に貢献した。	
	地域の課題解決	・本協働取組を通して、地域の環境保全に貢献できたかどうかを把握したか、その内容 ・本協働取組を通して、企業の行政向上や雇用拡大、地域活性化などに貢献できたかどうかを把握したか、その内容はどうか	・普及啓発活動を通して、地域活性化に貢献したと考えられるが、その評価までは行っていない。 ・「Win-Win-Win」の関係、「知床スタイル」「ケイマフリからのびる赤い糸」などのキーワードを生み出し、共感を得ることができた。	
	横断的課題への影響	・地域が今後目指す姿などを表現するキーワードを生み出し、共感を得たか ・本協働取組に触発された（自団体以外の）新しい地域での活動が始まったか	・本活動に触発され、新し費地域での活動は始まっていない。地道な活動を続けて行く事で、協議会の地域からの信頼や評価を得られていくものと思われることから、現状では、まず協議会の活動実績をしっかりと積み重ねて行くべき段階であると考える。	
【計画妥当性】	年度実施計画時との比較（内部条件・外部条件・資源投入・組織構成や機能・事業展開）	・状況に応じて計画を変更する際、どのような考え方をし、プロセスで行ったか ・計画と結果のズレをどのように判断し、それを次の機会に活かすようにしたか	・概ね計画は達成出来ていたが、第3回の協議会の開催を平成26年2月～3月に開催予定であったが、冬季の流氷観光のハイシーズンとなることなどから事務局メンバーの日程調整が困難と予測されたため、1月に開催予定であった第4回事務局会議の中で今年度の活動の総括を行うこととした。 ・1月に開催された第4回事務局会議では、今年度の振り返り・総括を行い、見えてきた課題や、次年度以降の取り組み活動計画について協議された。 ・常任スタッフを置かない協議会であるため、次年度以降は各業種の参加者が参加しやすい時期に協議会の開催を計画するようにしたいと考えている。	
【自立発展性】	組織（自団体）	・本協働取組事業の使命・目的・今後の展開を常に関係主体と共有しているか ・特定の組織に責任と役割が偏らないように役割分担がなされているか	・事業の目的等については、意見交換の場を利用して、関係者で共有するよう努めた。	
	組織（協働基盤）	・本協働取組事業の使命・目的・今後の展開を常に関係主体と共有しているか ・特定の組織に責任と役割が偏らないように役割分担がなされているか	・各協議会参加主体への責任と役割の分担に努めたが、改善の余地は残っている。	
	財務	今後の協働取組事業の発展に向けた資金調達計画があるか、その内容はどのようなものか	・活動に関係するハンドブックを作成・販売し、収益を活動資金に充てる予定。	
	技術	協働取組事業を自立発展するためのノウハウを蓄積するための取り組みをしているか、その成果はどのようなものか	・協働取組事業を自立発展するためのノウハウを蓄積するための取り組みは行っていない。	

5.2　報告会への出席

本事業の採択団体として、環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO 北海道）および地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）の主催する報告会へ参加した。以下の 2 回のイベントへ参加状況について報告する。

5.2.1　協働のかたち研究会（採択団体合同連絡会）

会議名称	協働のかたち研究会（採択団体合同連絡会）
日　時	平成 25 年 10 月 4 日（金）18:30～21:00
場　所	札幌市環境プラザ 環境研修室
出席者	北海道大学大学院文学研究科地域システム科学講座教授　宮内泰介氏 北海道大学観光学高等研究センター教授　敷田麻実氏 知床ウトロ海域環境保全協議会　福田佳弘氏、栗林貴光氏 NPO 法人もりねっと北海道　佐野愉架氏、山本 牧氏 （一社）環境パートナーシップ会議　平田裕之氏、白井聡子氏、江口健介氏 環境省北海道地方環境事務所　笹木秀敏氏、向田健太郎氏、寺井仁史氏 （公財）北海道環境財団久保田 学氏、内山 到氏 EPO 北海道　本多悠葵氏、倉 博子氏、溝渕清彦氏 EPO 東北　鈴木美紀子氏 その他、一般参加者 13 名

写真 5-1　会場の様子

議事概要
開会の趣旨や事業について、環境省北海道地方環境事務所及び EPO 北海道から説明の後、採択団体（知床ウトロ海域環境保全協議会、NPO 法人もりねっと北海道）から、各々の取り組みの中間報告を行い、それを踏まえて有識者と一般参加者を交えた意見交換を実施した。 **１．質疑応答** **（1）知床ウトロ海域環境保全協議会の取り組み** ・ 協議会はすでに動いているのか。 →この事業をきっかけに協議会は無事 6 月に設立され活動を進めています。 ・ 事業を進めるためにどのような仕組みをつくったり、討議をしたりしているのか。 →メールで協議会開催等の連絡や報告を行っているが、環境省ウトロ自然保護官事務所が情報の発信主体となることが多い。今後は地域方々で分担して出来るようになればと思います。会議の場としては、海域に関わるさまざまな事業者が、お互いじっくり言いたいことを言い合えたのがよかった。 ・ 目玉となる取り組みはなにか。 →海鳥ウイークというイベントを今年から開催した。それぞれの仕事に影響を出ないように、適度に取り組めている点が良かったと思う。取り組みが面白いことが取り組みへの参加を促す事に繋がるが、海鳥ウイークにはそうした場面が多く期待できることから、協議会の看板活動になるとよいと考えている。 ・ 漁業者にはどのようなメリットがあるのか。 →実際のところ漁業者へのメリットという部分では、現在明確に示せてはいない。しかし「海の事は何でも協力はする」という漁協の厚意もあるので、必ず今後の取り組みの中で漁業者へのメリットの部分を見い出して行きたいと考えています。また知床の漁業スタイルはサケマスの定置網と水深の深い所で行う底刺し網であることから、幸いにケイマフリの混獲などの影響はほとんどありません。 **（2）NPO 法人もりねっと北海道** ・ トランクキットの所有関係はどうなるのか。外部貸し出しにも応じるのか。 トランクキットは「動物」をテーマにしたものと「自然」をテーマにしたもの、２つを作成し、依頼に応じて貸し出すことを予定している。子どもたちに動物の毛皮などの実物を触ってもらいたい。現場の先生たちからフィードバックをもらいながら、ティーチャーズガイドを含めて作成していきたい。 ・ 旭川市教育委員会等はどのように参画しているか。先生方の反応はどうか。 →教育委員会は積極的に参画してくれており、学習指導要領の説明など、情報提供をしてもらった。また、旭川市環境部では、登録している環境アドバイザーを学校に派遣する制度があり、今後、活用できればと考えている。 ・ 事業がうまく進んだ要因はなんだったのか。 →情報発信は進めているが、まだまだ「事業がうまく進んでいる」といえる段階ではない。もり

ねっと北海道の取り組みを必要としている人と、担い手の間をつなぐきっかけになればよいと考えている。

２．意見交換

（１）採択団体の取り組みの特徴について

- ・両団体とも、協働取組推進事業を活用して支援や資金を得て、自分たちの取り組みを次の段階につなげていくことができている。この事業特有の制約はあるが、たとえば自治体とのコミュニケーションを進めるなど、うまく活用してもらえたらと思う。
- ウトロ海域協の取り組みは、環境保全と観光振興の考え方が完全に一体化することはなくても、一緒に取り組み、結果的に保全につながっているよい事例だと考える。環境保全に熱心な人はもっと啓発しようとするが、それでは現場ではうまくいかないことが多い。だれがどのようなことに関心を持っていて、力を注げるのか。社会の多様性を踏まえてコラボレーションしていくことが大切で、そうした独自性を「知床スタイル」として地域のアイデンティティにしていくのが有効だと考える。
- どのようにしたら、緩やかな関係のまま取り組んでいけるのかを考えていた。環境保全に向けたコラボレーションの話は、その通りだと思う。
- ウトロ海域協では、自主的に集まって環境保全に取り組もうとしたことが特筆に値する。３年間の話し合いを通じて、観光船が海鳥の近くを通過するときには気を遣うようになるなどの変化がある。
- もりねっと北海道の取り組みでは、学校教育に結びつけようという意思の強さがすばらしい。小さくても Win-Win の関係性をつくったことで、次の段階に進めるきっかけができると期待している。また、専門家同士を結び付けていくことも、取り組みの大きな特徴なのではないかと考えている。
- ウトロ海域協は「知床スタイル」、もりねっと北海道は「旭川目線」という言葉を使っていた。取り組みがうまくいくと、どんどん地域外へ向かう活動も多いが、このように地域との関係を構築、維持することは重要である。

（２）協働取組推進事業のメリットについて

- 協働取組推進事業に取り組んでみて、現時点ではどのようなメリットがあったか。
  →もりねっと北海道としては、当初はトランクキットとガイドブックを作るということしか考えていなかったが、協働で作るということになり、いろんな人とつながるきっかけを得たと思う。また来年度以降の活動にも、今回得たネットワークを生かしていくといこうと考えている。
- 事業費があれば、で取り組まなければという気持ちもかたまるし、このように自分たちの取り組みを発表する機会があると、それに向けて取り組みを充実させていこうという意欲が湧く。また、取り組みをいろいろな視点から評価されることも、取り組みへのモチベーションにつながると考える。

（３）今後の取り組みについて

- もりねっと北海道としては、来年度、どのように展開していくかという悩みがある。活動が広がりすぎると人材育成が間に合わない。そのため学校の先生に取り組んでもらえるように考えてき

たが、参加が少ない。アドバイスがあればいただきたい。

- 100 人中 5 人の参加があればいい、それ以上はボーナスだと考えてはどうか。「ぼちぼち」の緩やかな関係を前提として、目標を高く設定し過ぎないとよいのではないか。
- 先生には森林保全をしたいというニーズはないかもしれない。結果的にその取り組みに参加することになるように、いくつか入口を設けてはどうか。また、先生が教える側として参加できるようなメニューがあってもいいかもしれない。
- 今後、トランクキットの活動が動きだせば反響は少しずつでも増えるはずだと考えている。先生のニーズを聞き取り、さまざまなアプローチを試しながらやっていきたい。
- ウトロ海域協としては、普及啓発活動として「海鳥ウイーク」を充実させるほか、清掃活動なども交え、地域の主要な環境保全主体との協働を進め、海域環境保全の取り組み、「知床スタイル」の確立に向けて努力したい。
- ある活動を続けるときに、一人が頑張る場合もあるだろうが、違う人たちが登場することもある。その時々の「主人公」のようなものは、極端にはお金であったり、やる気であったりすることもある。そうしたものが現れるような素地のようなもの、場をつくっておくことが重要だと考える。

※公開で開催された「協働のかたち研究会」に先立って、同日 16 時から 18 時にかけて「事業に係る関係者の意見交換会」を実施し、事業の運用などについて意見交換を行った。

5.2.2　協働ギャザリング 2014 －環境×協働＝どんな未来？－

会議名称	協働ギャザリング 2014 －環境×協働＝どんな未来？－
日　時	平成 26 年 2 月 22 日（金）10:00～19:00
場　所	東京都千代田区九段北 住友不動産ベルサール　ベルサール九段　Room4
出席者	北海道地区からの出席者 知床ウトロ海域環境保全協議会　福田佳弘、栗林貴光 NPO 法人もりねっと北海道　佐野愉架氏、尾形和哉氏 環境省北海道地方環境事務所　向田健太郎氏、寺井仁史氏 （公財）北海道環境財団久保田 学氏 EPO 北海道　本多悠葵氏、有坂美紀氏 その他、全国の採択団体関係者、環境省、GEOC、全国 EPO 関係者多数。

写真 5-2　会場の様子

議事概要

1. 事例報告会　～アピールタイム

全国ブロック採択団体 2 団体、地方ブロック採択団体 13 団体によるショートプレゼンテーション。1 団体 5 分と限られた時間だったが、本協議会からは福田事務局長がプレゼンテーションを実施した。

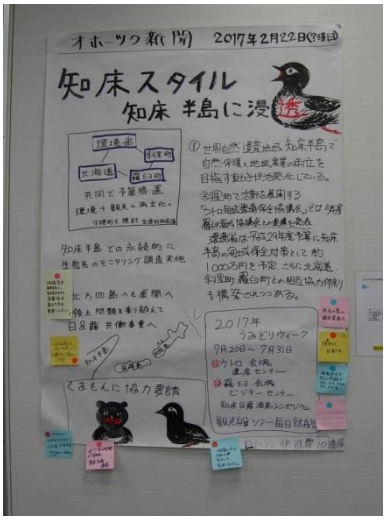
2. ランチ交流タイム

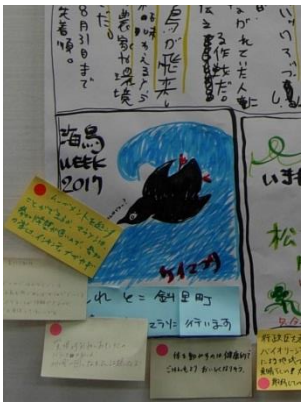
軽食を取りながら、全国の採択団体と交流。取り組み内容は多種多様。

3. 事例報告会　～コミニュケーションタイム～

取り組み団体を聞くグループと説明するグループの二つに分けて、交代で各団体のプレゼンを聞きに回ったり、本協議会のプレゼンを聞いてもらったりと、なかなか大変な作業。短い時間では各団体の取り組みの強み・弱みは、なかなか読み取ることが出来ない。

4.　ワークショップタイム





３年後の新聞記事を作るというワークショップ。自分たちの取り組みの将来像をどれだけ描けているか？試されるところ。“おふざけ”は一切無く、福田氏は黙々とペンを走らせる。完成したら皆さんに発表。書いた新聞記事は壁に張り出されて、各団体の良い所の評価、提案したい事などを付箋に書いて貼って回る。“当協議会にスポンサーになってもらう“とケイマフリを描いてくれた団体もいらっしゃって驚き。どの辺に期待を持たれたのか不思議だが、「知床」のネームバリューなのか？

5.　総括

最後にアドバイザーからの総評を頂いて終了。全国の協働取組を実践されている方と交流できた事は良い刺激となった。このような機会は時折出てくると思われるので、次回は他の協議会メンバーの方々にも、ぜひ参加して欲しい。

6.　懇親会

当協議会からは福田事務局長が参加。栗林は都合悪く不参加。